

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA-Yonemi (dumonota) N-ro 41

VOJEĜEME

やっぱり旅先のエスペランティストはありがたい。

Varmkora Akcepto de
Barcelona Esperantisto, kiu
tamen estis ege okupata

HASEGAŬA-JOŠIFUMI

La 22an de Aŭgusto, 1975
Matenmanĝoj de "Hostel Segre"
estas: sekaj panoj, kafo kaj
iom da butero. De tie mi
telefonis al la korespondanto
Jose Ivern ĉe lia laborejo
(banko).



バルセロナ、海迎のROMPEOLAS通りにある"Bar" PORTA COELI

Laŭ li, lia laboro finiĝos je 12:00.
Mi promesis kun li, ke ni renkontiĝu
je 1:00. Mi tagmanĝis per pano kaj
fruktoj en parko apud la "Hostel".
Kaj mi iris al la rendevuejo, la monu-
mento Colombus. Je 1:00 li ne venis
tien. Mi volis iri al necesejo, do,
mi vizitis iun kafejon, sed oni devas
pagi monon tie por uzi necesejon.

Ĝis la 2a horo mi atendis lin sed
li ne venas. Mi telefonis al lia labo-
rejo. Li povos veni je 3:00 pro la
okupiteco. Fine li venis iom post la

3a horo kaj ni iris per lia aŭto al
restoracio apud la maro. Ni manĝis
palinurojn.

Li transdonis leterojn, al mi adre-
sitajn, el mia familio kaj amikoj.
Dum ĉi tiu eŭropa migrado, mi antaŭe
sciigis lian adreson al ili. Mi estis
tre ĝoja, ke mi povis ricevi la leterojn.

Kaj ni iris al la monumento por vidi
lian esperantistan amikon. Ni, tri,
supreniris per la aŭto sur la monteton,
kie estas kastelo(=muzeo). Ni povis
vidi de tie belan tutan urbon de Bar-

celono.

Kaj ni promenis sur malnovaj stratoj. Li revenos hodiaŭ al lia somera domo per sia aŭto. Li invitis min al la somera domo por tranokti tie hodiaŭ, tamen mi preferis tranokti en "Hostel Segre", ĉar li matene tre frue ekiros al la banko.

Vespere ili veturigis min ĝis mia

西ドイツから

クラブをつくって、
VERDA MONTETO みたいな
雑誌を出してみたい

西ドイツの ヨシエ・クレーマンさんから、5月の終りごろ、こんな写真がとどき、緑丘会の皆さんによろしくとのこと。VERDA MONTETO を送ってあげたら、大へんうらやましがられました。・・・『お正月に、近くの町に住む2家族のエスペラント一家 Verdaĵ familioj をお招きして、日本料理で

hotelo. Post la disiĝo, mi promenis ĉirkaŭ la hotelo kaj manĝis ĉe iu "Bar" en la strato Ramblas. Tie mi vidis japanan studenton. Li studas en Parizo kaj nun vojaĝas en Hispanio. Ni longe interparolis tie, interŝanĝante diversajn vojaĝinformojn ekzemple pri: malmultekostaj hoteloj, manĝaĵoj, belaj pejzaĝoj aŭ iu...speciala loko.

お祝いをして、一泊2日遊びました。その時、私達もひとつエスペラント・クラブをつくろうということになりました。この写真はその時のもので、あわせて3家族のこの Verdaĵ familioj は、奥さんがみな日本女性。一家族はハイデルベルグの sona 一家で、もう一家族はフランスからの Grossmann 一家です。私(ヨシエさん)の家は、3家族の住む町々のちょうどまん中あたりになるので、今後はここが例会場になりそう。でも忙しくて、なかなか集まりません。今のところ、1か月か2か月に1回くらい集まって、子供の本の翻訳などをやっています。Verda Monteto のような肩のこらない bulterno 出せたら楽しいなあと思っています。』



Aseco #

奥村林蔵

ROの61/10に北京大会の講演の要旨が載っていた。栗柄氏が「語系が異なるため日本語人はEの単語を覚えるのに苦労する。」オランダの s-ino Usink-Nagata が「ヨーロッパの言語学者が勝手に術語を導入するので日本語人は困る。現在時を aseco、過去時を iseco というようにせぬものか。」

前者には全く同感。後者には、何の事かと思っていたら、UEAの61/12に講演の詳細が載った。「ヨーロッパ人は自分達の間で共通なら、世界的に通用すると誤解して、勝手に術語を入れてくる。日本人は、Eは造語法があるので、単語がいくつにも増加できて大へんやさしいと悦んでいるが、takso, krono, preter を覚えても、sintakso, sinkroni, preterito など全く判らぬ。基本文法第15条によって、現在時は aseco, 過去時は iseco というようにしては」ということである。

興味を引いたので、永田さんへ所感を書き送ったが、UEAの62/2にも何通かの賛否が載せられた。C氏は「ごもっとも」、L大先生は「では電話は distancsonilo, 自動車は memmovigilo と書くわけですね。これではEは亡びますよ。日本、中国にも telefono, aŭtomobiloで判かる人がいますよ」と皮肉って来た。

つづいて62/4にR氏が「Lさんよ、Eは万人のためのもの、語学練達者だけのものではありませんよ。そりゃ中国や日本にだって語学の達人な人はいますよ。」とやりかえした。

私としては「ある程度のヨーロッパ共通の術

語導入は仕方がない。が過ぎると困る」。

たった28字のアルファベットの組合せで限らない人間の知識を表現しようと言うのだから、どこかで両意の単語も現われよう。日本語にもハシ、クビ、ミチ、などおびたしい。

だから milito (mil-ito), malica (mal-ic-a), sentema (sen-tem-a, sent-em-a)

krizantemo (kri-ant-em-o) などある程度仕方がない。また一つ一つ既成語で表わさねばならぬとすると、mem-mov-ig-il-o 式となって古代へ逆行、しかし Maljuna viro kun malnigra barbo iras malrapide kun malgranda knabo. ではやり切れない。やっぱり old-a, blank-a, lante などほしくなってくる。但し過ぎると普通人には困る。初学者が辞典を引くのに一番困るのは字の切れ目さがして、これに一番便利なのは三宅の小辞典、どんな合成語も見出語で出てくる。

ヨーロッパ人に便利だからEが今日のように広まったことに感謝しつつ、日本人も日本式の術語を導入して使いまくりましょう。使いまくった方が勝ち！！

Ni pagu ŭarikane, ĉar oni postulis belabonan prezon. Ni estas ankoraŭ ne oitaj. (62/5/17)





写真1. ことし3月29日、息子夫婦 ミッシェル・アニー 結婚20年のお祝い。



前田との文通が始まったのはもう23年前の、1964年、東京オリンピックのあった年。フランス・ポルドーに住むロベール夫妻で、レオは73才、奥さんのガイタは67才。初来日は、文通開始翌年の1965年、東京で世界エスぺラント大会があった夏の三週間。その後、彼らはもう一回訪日したが、私（前田）は、厚かましくもう3回フランスで遊ばせてもらった。

文通は主にレオと、現在もまだ続いている。お

互いに Kara Frato と呼び合う仲で、また日本へ来ないかと言ってやったら、まだかなり元気なくせに、『もう、70才を越したからね』という。おしゃべりで、議論好きで、最近の手紙はピンセンにタイプ打ちで10枚前後、それにいつも写真が数十枚。

写真1の右はし奥がレオ。写真2の右から3人目がガイタ夫人。この写真は今年3月29日、息子のミッシェル（写真1の左から2人目）と、その奥さんアニー（同左から3人目、写真2でも同じ）

の結婚20年のお祝いで、あるレストランで会食。

写真1、2の左端が、アニーのお母さんのマルセラ・クルバン夫人、写真2の右から2人目が、アニーのお父さんのアンリ（エスペラントではヘンリコ Henriko という）・クルバン。この2人は、エスペランチストである。

写真2の右端が下の孫のヴェンサン、右から4人目が上の孫のフランソワ。写真3の右がヴェンサン、左がフランソワ、2人とも、映画スターのような美少年たちである。

弟の方がかなりお茶目で、レオの手紙によると

土曜日の、
緑の丘の懐かしい面々 (その2)

S-ro MAEDA

アエイ!! 皆の者、このお顔か、
目にはいらいぬか、このお方を
どなたと心得る、おれ
おれ、さきの團子ヨーグニ
...じゅなが赤、もとへ、
おれ おれ、緑の丘の
お名、前田米美先生に
おせられるゾ、ズが
高い、おれおれ!!!
ん???



会食中も、Li streĉas sin por aspekti ne tro petolema, sed ne longe daŭras. Li estas ĝiam knabeca, kvankam jam 13 ½ jara. 兄の方は考え深く、いつもよく弟をリードしている。今年はアビトゥリエント（大学進学適性試験）があるので、François aspektas multe pli serioza, sed li estas 17 ½ jara, kaj nun preparas abituri-entan ekzamenon.



クイズ 世界のエスペランチスト人口

UAE "Esperanto" 誌 1987年 4月号

KONKURSO

"Laŭ artikolo en The Linguist (Britio), n-ro 1, 1987, p.8-9, estas 8 000 000 da e-istoj en la mondo, el kiuj 10 000 en Britio (kaj maksimume 2 000 en Belgio).

"Kie troviĝas la 7 988 000 aliaj?" demandas Germain Pirlot. Ankaŭ ni. Kaj por esplori viajn pensojn pri la afero, ni anoncas konkurson kun la jenaj reguloj:

1. Skribu sur poŝtkarton du ciferojn: (a) kiom da e-istoj, laŭ vi, ekzistas en la mondo (laŭ kiu ajn kriterio, kiun vi volas apliki); (b) kio estas la meza (averaĝa) cifero, kiun divenos la respondantoj al demando (a) — t.e., la plej akceptata cifero inter la esperantistoj mem.

2. Sendu la poŝtkarton al la redaktoro de Esperanto, Nieuwe Binnenweg 176, NL-3015 BJ Rotterdam, Nederlando, por atingi nin ĝis la 30a de junio.

3. Ni kompilos la respondojn kaj lotumos inter la respondintoj tri premiojn elektitajn el la jubilea eldonserio de UEA. La rezultoj estos anoncigitaj en la kunveno de legantoj de la revuo kadre de la varsovia UK. (Se vi tamen ne venos tien, ne zorgu — ni poste aperigos la rezultojn en la revuo mem.)



締切

6月30日

このエッセイの全訳 本誌のどこかのページにあります。

[本の紹介]・・・マジョリー・ブルトン著

FAKTOJ kaj FANTAZIOJ
(事実とファンタジー)



前田 米美

今、緑丘会の土曜例会で、分担輪読している本ですが、とても面白いのでちょっと紹介してみます。

430ページの分厚い本。内容は、中級向けで実に多彩です。本のタイトルが示すように、世界のすみずみの珍しい実話、世界のすみずみの童話民話、それに、随想、笑い話、ことわざ、文法を組み込んだ楽しい詩など。

著者マジョリー・ブルトン女史は、1924年生れ、オックスフォード大学卒の文学博士。永年、教育大学の学長を勤めたあと、現在は著述家。1949年にエスペラントを習い、UEAのエスペラント文学コンクールでデビューし、1955年以来、いろんな部門の名著を次々と発表し、現在エスペラント界の有名雑誌にも、彼女のピリッとわさび?の効いた論説が、これまたいろんな分野にわたって、しばしば発表されていて、彼女の博学多才さがうかがわれます。エスペラント版(英語版でも出ている)のザメンホフ伝記は、土曜例会の有志が福本さんの指導で読んでいますが、ちょっと難しいけれど、味わい深い名著です。

ところが、この『事実とファンタジー』となるとぐっとくだけて、各所に気のきいた sprito (機知

)がちりばめられてあって、むずかしい内容も笑いながら読めるように工夫されているのが魅力です。例会ではもう100ページほど読み進みました。1章が大体7ページくらいにまとめられ、全部で52章あります。各章は、はじめに短編ものの童話とか、エッセイがあって、あとは更に短い実話、笑話、小詩、ことわざなどが並べられてあって、長編を読む時のしんどさはなく、暇な時に少しづつ読み進むのに適当な分量です。

たとえば、UNUAJ PLUMAMIKOJ の [1] と [2] がそれぞれ第8章と第10章にあって、文通をはじめの人たちへの、女性らしいこまやかな助言がよくまとめられています。「文通は初等講座を終えたら早く始めるのがいいのだけれど、文法の基礎と、日常単語をしっかり身につけて、文を正しく組み立てられるようになってからにしないと、「fuŝperanto」になって、お互いの理解がうまくいかないのです。

"La tipaj eraroj de, ekzemple, francaj lernantoj ne similas al la tipaj eraroj de japanoj, tiel ke unu fuŝanto ne facile divenas la intencon de la alia"

タイプライターを使えばはっきり書けると思われていますが、それがまた、baroj が batoj になったり、paco が pavo になったり、時には、不必要な文字がまじりこんで、ni havas ion da mono en la "branko". だとか "ni ŝus evitis akcidenton per longa kaj rapida "salato". などと書いたりします。(前田註: branko は banko, salato は salto)

同じエスペラントの単語でも、国によって感じ方がちがうのです。napo はエスペラントでは、根が食べられる「蕪」(かぶら)のことですが、Al franco napo eble sugestas "tablotuko"(nappe); al anglo "dormeto"(nap); al italo "pokalo"(nappo); al hungaro "tago"(nap)となる。自分の国ではそういう意味だから、エスペラントでも、てっきりそうだろうと思ひこんで、Tiu ruso, kiu skribis al anglino, "Gladu vian katon por mi", faris tre strangan impreson: Ĝu li vere estas

tiel kruela? Sed li intencis skribi "Karesu"; la rusa vorto гладитъ signifas "gladi" kaj "karesi".

風俗、習慣、国の政治体制のちがいに、よく注意しなければなりません。風俗習慣の場合は、ショックをうけることもあります。また一面興味深いいろいろな誤解があっても、よく手紙で話し合えば、たいてい すっきり了解して、かえって文通が面白くなり、親密さを増し、これこそ文通の功德ということにもなりますが、政治体制のちがいと

余程注意しなければ、深刻なことに。

Kia tragedio, se naiva, bonintenca, nur senkulpe senatenta korespondanto, per eta ago en si mem ne malbona, puŝus alian senkulpan homon el posteno, aŭ en malliberejon, aŭ eĉ en ĉerkon, tre eble pro opinioj, kiujn li aŭ ŝi eĉ ne havas! 」

(puŝus el posteno 地位・職場から追放)

以上は第8章の UNUAJ PLUMMIKOJ [1] から。この章は、ブルトン女史も書いているように、少し negativaj avertojばかりになってしまったので、第10章 [2] の方では、もう少し前向きな助言を述べてみたいと。

[FAKTOJ kaj FANTAZIOJ 3000円、送料 350円
JET, KLEG, 取次、ベストセラーですから、よく品切れ 注意]

(7/26 世界の 에스ペラントチスト人口)

イギリスで発行されている "The Linguist" 誌の、1987年 1号 p.8~9 の記事によると、世界の 에스ペラントチストの数は 800 万、そのうち1万人はイギリスに、そしてベルギーには多く見られて 2000 人だそうです。「なら、残りの 798万 8000 人は どこにいるんだろう。」と Germain Pirlot 氏は疑問を提出しています。私達も尋ねたいところ。そこで、これについてあなたのお考えを知りたく、以下の規約で解答コンクールを行います。

1. 解答には数字を2つだけハガキに書いてください。

(a) あなたのご意見では、世界中に 에스ペラントチストは何人いますか? (どんな計算根拠を使ってもけっこうです)。

(b) 問題 (a) で、回答者が推測した 에스ペラントチストの人数の meza (averaĝa) ciferoは、いくつでしょう——即ち 에스ペラントチスト自身の最多数が認めている数。

2. 解答のハガキは 6月30日までに届くよう、
"Esperanto" 編集部: redaktoro de Esperanto,
Nieuwe Binnenweg 176, NL-3015 BJ Rotterdam,
Nederlando 宛に送ってください。

3. 解答は集積し、解答者の中から3人を抽選して UEA の記念出版書の中から選んで贈ります。結果の発表は、ワルシャワ大会中の「本誌読者の会」で行われます。(不参加の方もご心配なく——後に本誌上でも発表します。)

新宮 에스ペラント会

新宮 에스ペラント会が、会報「ARBOLANDO」を創刊しました。隔月刊8ページ。会員は5月現在15名。発行所は、平見善吉さん。〒647 新宮市新宮 3872-31 TEL 0735-(23)-0036。

会長は西村忠之さん。わずか1年余りの間にここまで出来たのは、朝日新聞新宮通信局の池本盛雄さんのすばらしい努力の結果。

創刊号の表紙は、会員岡崎真美さんが今年3月韓国 에스ペラント協会釜山支部を訪れた時の写真。表紙裏は西村会長の発刊挨拶で、『新宮市高田グリーンランドの記念碑の裏には、 에스ペラントで説明が書かれていて、近い将来ここで、「日韓セミナー」が開催できれば・・・』という希望が。

同じ和歌山県、木の国紀州にこの快挙、心からお祝い申し上げます。

外国郵便料金表 (昭和62年4月1日現在)

航空通常郵便物の料金

種類	名あて地 重量	地帯	第1地帯	第2地帯	第3地帯
		アジア地域 (ソ連邦のアジア地域を) 除く オーストラリア、ニュー ジーランド、ミッドウェイ その他のオセアニアの諸島	カナダ、 アメリカ合衆国、 (アラスカ及びハワイを) 含む 中央アメリカ、 西インド諸島	ヨーロッパ、 アフリカ、 南アメリカ、 中近東、 ソ連邦のアジア地域	
書状	10gまで		110円	130円	150円
	10gを超える 10gまでごとに		70円増	90円増	110円増
郵便はがき			80円	90円	100円
印刷物 点字郵便物	20gまで		80円	90円	100円
	20gを超える 20gまでごとに		40円増	50円増	60円増
特別郵袋 印刷物	5kgまで		8,000円	10,000円	12,000円
	5kgを超える 1kgまでごとに		1,500円増	2,000円増	2,500円増
小形包装物	80gまで		200円	240円	280円
	80gを超える 20gまでごとに		40円増	50円増	60円増
航空書簡			世界各地あて110円均一		

AIR MAIL
昭和六十二年四月一日発行第三十巻第四号付録

小包郵便物の料金

地域	名あて地	取扱い		航空		船便		SAL小包	
		500gまで	500gを超える500gごとに	1kgまで	1kgを超える1kgごとに	1kgまで	1kgを超える1kgごとに	円	円増
東アジア(1)	韓国、台湾、香港及びマカオ	円	円増	円	円増	円	円増	円	円増
		1,900	400	1,700	250	—	—	—	—
東アジア(2)	中華人民共和国及び朝鮮民主主義人民共和国	2,100	550	1,850	400	2,100	600		
東南アジア	タイ、マレーシア、シンガポールほか	2,200	700	1,700	400	2,200	700		
	フィリピン	1,800	500	1,450	300	1,800	700		
西南アジア	アフガニスタン、インド、パキスタンほか	2,500	900	1,900	400	2,500	900		
オセアニア	オーストラリア、ニュージーランドほか	2,600	1,000	1,800	400	2,700	1,100		
中近東	イラン、イスラエル、クウェイトほか	2,800	1,050	1,800	400	2,800	1,300		
東ヨーロッパ	東ドイツ、チェコスロヴァキア、ソ連ほか	2,800	1,000	2,100	700	—	—		
西ヨーロッパ	西ドイツ、 英国、 フランスほか	2,900	1,050	シベリア 経由	2,300	800	2,900	1,200	
	その他			2,000	450				
中南米	メキシコ、ブラジルほか	3,500	1,600	2,400	500	3,500	1,600		
アフリカ	ケニア、ナイジェリアほか	3,100	1,400	1,900	450	—	—		
	南アフリカ	3,400	1,750	2,100	350	3,700	1,500		
アメリカ	米国、カナダ	2,400	1,000	1,750	600	2,500	1,100		

(注)1. SAL小包の送達所要日数は、米国あてのものは2~3週間、カナダ及び西ヨーロッパあてのものは、2週間前後、ブラジルあてのものは3週間前後です。
2. 各地域に含まれる国名及び地域名の詳細については、郵便局の窓口でおたずねください。

編集後記

★外国郵便料金(船便)は次号へ。

★S-ro 大谷のサニホ7伝(11)は、大谷さん多忙を極め、今回お休みさせていただきました。

★“土曜日の、緑の丘の懲りない面々”はS-ro辻。belulo, belulino. 自信のある方、S-ro辻に、おねがいしてみたら??

★やはり、belulino ねえ言よりも、biginoのほうがなつかしい。S-ro?

1987年6月
(はんしゅう) 前田米美
640和歌山市小松原6-1-6
TEL0734-22-8660

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA-Yonemi (dumonata) N-ro 42

ザメンホフ伝 (11)

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

刊行：辻千早

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat

La kopirajto de la originalo, la Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.
9 Maycock Place, ORELIA(WA) 6167,
AŬSTRALIO

第4章 学生時代 (つづき)

「19ルーブル」では月初めでもあまり楽ではなく、やっぱり足りなかった。でもルドビコは両親に金銭的負担をかけたくなかった。またたく間に2年が過ぎ去った。1881年の夏に彼は帰省した。

ワルシャワでは、大学で医学の勉強を続けるつもりだった。愛する母には父との約束が心に重くのしかかっていることを話した。彼の人生目標は変りなかった。人は兄弟のように伸び直らなければいけない。民族間の橋渡しをする言語を書きしるしたあのノートや試作文はどこにあるのだろうか？ ルドビコは夏休みにもう一度それを最初から読み直し、大好きな仕事に再びとりかかりたかった。

母は、顔を青ざめ、目に涙を浮べて座っていた。彼女は押し黙っていた。偉大な息子の



頭を白い手でやさしくなでた。ルドビコはもう22歳になっていた。息子は真相をどう受け止めるだろう？ あの日夫はルドビコの原稿を燃やしてしまったのだ。夫は、ただただ父親としての、賢明で激しい愛情ゆえに、そんなことをしてしまったのである。そうすれば、我が子を「救える」と思いこんでいたのだ。この仕打ちには彼女は何度涙をこぼしたことだろう。今またその涙が戻ってきた。彼女は無言のままだった。

ルドビコは母の心を理解した。何があったか、全てを察した。彼はさっそく父に約束の

言葉を撤回してほしいと頼んだ。早く自由の身になりたい。なんとかしなければという切実感でいっぱいだった。彼はただ、大学を卒業するまで、あの目標や仕事のことを誰にも話さないと自分に誓うつもりだった。

実は、書類を失ったことはそれほど痛手ではなかった。本当は全部暗記していたのだ。A

オールドビコは自分の著作を懸命に書き直した。

1881年8月のノートには、1878年のものとほとんど同じ言葉が再現されている。いやむしろ前より良くなっている。ハイネの美しいバラード「夢の中」では次のようにドイツ語から訳されている。

Mo bella princino il sonto vidá
(Mi belan princinon en la songo vidadis)
Ko ŝuoj malseŝaj e palaj,
(Kun vangoj malsekaj kaj palaj,)
Sul dillo, sul verda no koe sidá
(Sub la tilio, sub la verda ni kune sidadis)
Il armoj amizaj e kalaj.
(En la brakoj amikaj kaj karaj.)
"La kron' de ta padro fio pu mo esté,
("La kron' de via patro nenio por mi estas,)
La ora, la redža ra sello!
(La ora, la ruža lia selo!)
La skepro diantiza, rol mo ne volé,
(La sceptro diamanta, ĝin mi ne volas,)
Tol mem koj volé mo, ma bella."
(Vin mem nur volas mi, mia bela.")
"To et ne estebła", ŝo palla a mo,
("Vi -- ne estebła", ŝi paroladis al mi,)
"Kor et si la tomo kuŝe mo
(Ĉar -- -- la tomo kuŝas mi)
E koj i la nokto vioné mo a to,
(Kaj nur en la nokto venas mi al vi,)
Kor tol fe prekale amé mo!"
(Ĉar vin tiel trekare amas mi!")

美しい王女様の夢を見た。

涙で濡れた、青白い頬の王女様。

ほだいじゆの、緑の木陰に腰を下ろして、
僕たち二人は抱き合っていた。

「お父上の冠も、

黄金の赤い鞍も僕はいらない!

ダイヤモンドのしゃくも欲しくない。

君だけでいい、愛しい人よ。」

「だめだわ」と言う王女様、

「だって私はお墓の下にいるんですもの。

でも、夜になったら、

あなたのもとへ飛んで行くわ。

こんなにあなたのことを

愛しているんですもの!」

【エスペラント逐語訳…大谷】

この当時のザメンホフのユニヴェルサーラ・リングヴォは、ごらんのように現在私たちが学んでいるエスペラントとはいくぶん形が違っています。例えば、代名詞 *mi, vi, ŝi, li* はそれぞれ *mo, to, ŝo, ro* となっていますし、動詞の活用形も *-is, -as,* がそれぞれ *-a, -e* となっています。ところで過去の継続的行為を表す *-a* は、形容詞の品詞語尾 *-a* とまぎらわしいですね。また *kaj* の *e* や *en* の *i* は短か過ぎて単語を明確に区別しにくい感じがします。まして音読する場合は、他の音と一緒に一層まぎらわしいことでしょう。一方、定冠詞の *la*、否定詞の *ne*、複数語尾の *-j* など現在のエスペラントと全く同じのも見られます。全体から受ける印象は、文法的な明確さで現在のエスペラントにゆずるものの、音の流れは美しく、ラテン系の言葉により近い響きを感じます。みなさんはどう思われますか？ ところで、第3連の1、2行目に出てくる *et* 及び *si* はどういう意味を表しているのでしょうか？ どなたか御存知の方、御教授下されば幸に存じます。

ちなみにハイネの詩のドイツ語の原文は次のようになっています。

Mir träumte von einem Königskind,
(Mi sonĝis pri bela princino,)
Mit nassen, blassen Wangen;
(Kun malsekaj, palaj vangoj;)
Wir saßen unter der grünen Lind',
(Ni sidis sub la verda tilio,)
Und hielten uns lieb umfangen.
(Kaj ame ĉirkaŭpremis unu la alian.)

"Ich will nicht deines Vaters Thron,
(*"Mi ne volas vian patran tronon,*)
Und will nicht sein Skepter von Golde,
(*Kaj ne volas lian sceptron de oro,*)
Ich will nicht seine demantene Kron',
(*Mi ne volas lian diamantan kronon,*)
Ich will dich selber, du Holde."
(*Mi volas vin mem, vi aminda."*)

"Das kann nicht sein," sprach sie zu mir,
(*"Ĝi ne povas esti," diris ŝi al mi,*)
"Ich liege ja im Grabe,
(*"Ĝar mi kuŝas en la tombo,*)
Und nur des Nachts komm' ich zu dir,
(*Kaj nur en la nokto eliras mi al vi,*)
Weil ich lieb dich habe."
(*Ĝar mi amas vin."*)

【エスペラント逐語訳…大谷】

みごとにまでに韻をふんだ美しい詩です。この原文の第2連では *Skepter von Golde* (金のしゃく)、*demantene Krone* (ダイヤモンドの王冠) となっているのに気がつきました。ザメンホフがユニヴェルサーラ・リングヴォに翻訳の際に、詩のリズムや韻を考えて、黄金の赤い鞍 (*La ora, la redza ra sello!*)、ダイヤモンドのしゃく (*la skepro diantiza*) と意識的に言葉を変えたのでしょうか？ また、エスペラントの *nur* はドイツ語と一緒にこの原文からわかります。

最後に後年のザメンホフの訳詞と *Kalosçay* と *Waringhien* の訳詞を紹介します。

ザメンホフの後年のエスペラント訳
(1887)

En sonĝo princinon mi vidis
Kun vangoj malsekaj de ploro. ---
Sub arbo, sub verda ni sidis,
Tenante nin koro ĉe Koro.

“De l’patro de l’via la krono
Por mi ĝi ne estas havinda!
For, for lia sceptro kaj trono ---
Vin mem mi deziras, aminda!”

--- “Ne eble!” ŝi al mi rediras:
“En tombo mi estas tenanta,
Mi nur en la nokto eliras
Al vi, mia sole amata!”

“En Songô” Trad. de Zamenhof

カロマイとワリンゲンの歌
(1945 ~ 1968)

En sonĝo princinon vidis mi
kun palaj vangoj ploraj,
sub verda tilio sidis ni,
tenante nin kor-ĉe-koraj.

“Ne strebas mi je l’patra tron’,
nek je la sceptro el oro,
nek je la diamanta kron’,
vin mem mi volas, trezoro.”

“Ne eble --- rediras si al mi ---,
min kaŝas kav’ tombara,
nur nokte eliras mi al vi,
ĉar vin mi tre amas, kara.”

Trad. de Kaloscay kaj Waringhien

Kaloscay の訳詞の方がドイツ語の原詩に忠実なののはっきりと見てとれます。一方ザメンホフの訳詞は、黄金とかダイヤモンドとかいう言葉は省いています。詩のリズムや音の響きを重視した個性的な美しい訳詞で、ザメンホフの優れた詩的感覚、音楽性が感じられます。

VOJAGEME

Taktiko

ĉe Gastejo



やどやのかけひき

HASEGAŬA

JOSIFUMI

la 23an de Aŭgusto, 1975

Mi foriris de la pensiono Segre antaŭ
la tagmezo kaj iris al la stacidomo
“Barcelono Terminalo”. Tie mi vidis
alian japanan junulon kaj ni parolis



longe en iu kafejo. Li informis min pri "Madrid", "Granada" kaj aliaj hispanaj lokoj.

Liaj informoj estas tre utilaj por mi. Antaŭe mi planis veturi nokte al Madrid sed li konsilis al mi ekveturon per ekspreso "Talgo" de 14:05, kiu atingos Madridon je 21:55, do, ankoraŭ estas lume, tial mi povos trovi pensionon pli facile.

Mi ŝanĝis mian planon laŭ lia konsilo. Post aĉetado de sandviĉoj, mi envagoniĝis en "Talgo"n. Mi samkupeiĝis kun

hispana familio el 3 personoj. Ekspreso "Talgo" kuras ne rapide, precipe malrapide en monta regiono.

Ĉi do atingis Madridon je 22:15. Kutima malfruigo, tamen nur 20 minutojn, kaj estis ankoraŭ lume. De tie, laŭ la opinio de la japana junulo en Barcelono, mi veturis plu per trajno kaj "Metro"(subtera trajno) ĝis la strato Jose Antonio. Estis jam 23:00, kiam mi atingis tien.

Mi iom paŝis kaj trovis "Hostel Maria Luisa". La pordo de la gastejo estas jam fermita, tamen ties gastoj unu post aliaj revenadas al la gastejo, kaj tiel la pordo malfermis!

Mi unue demandis la prezon kaj la mastro respondis "350 pesetoj". Multekosta, cetere la ĉambro estas dulita kun duŝejo kaj matenmanĝo. Tamen, ĝi estas iom tro multekosta por mi. Tial mi rezignante eliris de tie. Ĉu mi povos trovi alian? Tiam, de malantaŭe la mastro denove vokis min kaj anoncis "300 pesetoj!". Jam estas malfrue, kaj tial mi tuj jesis.

(daŭrigota)

☆前号 Junio 誤字: P5 クイズ世界のエスプレ
ンチスト人口 すぐ下 ㊦UAE ⇒ ㊧UEA
(UAEといえはアラブ首長国連邦のこと)

Infanaj tagoj

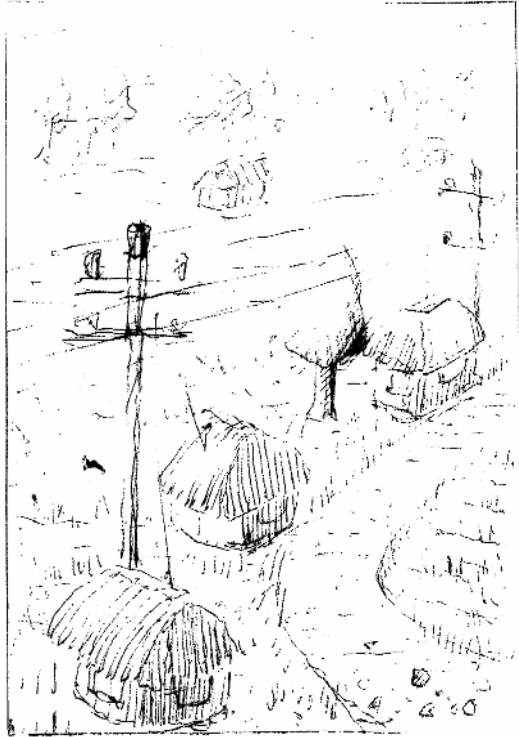
Tanaka Masami

Siatempe de la jaro 1920, oni kutime sin vestis per Kimono, kaj estis raraj tiuj, kiuj vestiĝis per eŭropstilaj kostumoj. Ni, lernantoj, iris al la lernejo en Kimono teksita el katuno, kaj piede portis pajl-sandalojn, kiam la vetero estas bela, kaj nur en pluva tago Getaojn.

En nia klaso troviĝis unu, du lernantoj, kiuj vestiĝis per studenta uniformo kun tolaĵŝuoj piede. Ili aspektis tre modernaj kaj ni ĉiuj vidis ilin kun enviaj okuloj. En la koro mi kredis, ke ili certe estas filoj apartenantaj al bonhavaĵa familioj.

Same kiel multaj samklasanoj, mi iris al la lernejo en kimono ĉifonita, verdire ĝi estis sportebla en la agado sed mi sentis sin neniam esti multe ĝena.

Ni ĉiuj estis ĉiam viglaj kaj energiaj. Apenaŭ finiĝis la leciono, ni rekte hastis al la sportejo, kie ni ludis per ludŝnuroj aŭ luktadis Sumoon kun la samklasanoj sur kota tero ĝis plena svito, kun pendanta nazmuko sub la nazo. Ĉiufoje mi trovis min inter tiuj knabaĉoj. Mi ne povis eldiri klare, de kiam mi fariĝis knabeco tiel aktiva el iama sinzorgema bubo.



Laŭ mia supozo, post la familialiĝo de la nova patrino, mi eble penis esti kiel eble plej gaja kaj eĉ fervora en lerneja leciono. Tion mi povis diveni en kelkaj atestiloj, kiujn la elementa lernejo donis por mi.

ATESTO

Ni honorigas vin je la dua loko en la klaso per via alta poento kaj diligenteco.

Taisoo 10 Nen (1921) Marto 24-an
Hukuoka ken Nisikawa vilaĝo
Ninobu elementa lernejo

Post unujara restado de la karbomineja urbo Nisikawa, ni trans-

loĝiĝis denove al la vilaĝo, nomata Oguni, ĉirkaŭita de montoj. La vilaĝo estis tre kvieta kaj malkompakta. Elkreskantaj arbaroj dense leviĝis al la ĉielo. Oni ne povis facile distingi, kie estas domoj pro troaj arbaroj.

Nia nova loĝejo lokigis apud krucovojo. Najbare staris dokelkaj pajldomoj disloke laŭ la padoj. Loĝantoj preskaŭ ĉiuj prilaboris pri lignaĵaj laboroj. Post printempaj ferioj, mi vizitis vilaĝan lernejon kiel lerneĵano de la dua klaso. La lernejo staris sur la placo apud vilaĝa ŝintoisma sanktejo, kiun ĉirkaŭis grandegaj dikaj kriptomerioj. Lernantoj nombriĝis totale dekdu aŭ dektri, de la unuaklaso ĝis la kvara. Ni ĉiuj kune lernis en unu ĉambro, kaj du instruistoj okupiĝis por ni.

La domo, kie ni devis vivi, estis tre mainova, legita per kriptomeriaj ŝeloj. Kredeble la domposedinto uzis ĝin antaŭe kiel stalon de bovoj aŭ ĉevaloj. Kvankam nia ĉiutaga vivo estis mizera samkiel la antaŭa, sed ni povis ĝuegi sufiĉe admirandan naturon. Se ni ekstaru ekster la domo, tie en plenaj vidoj disvastiĝis grandioza panoramo. la plej okulfrapa impresio estis la montaro de Asoo, kiu estas ankoraŭ nun fame konata en la mondo, kiel konstanta aktiva vulkano. Plie antaŭ ni disebeniĝis vastaj verdaj herbejoj, kiuj etendiĝis malproksimen ĝis la montopiedo.

En serena vetero de printempo, vidiĝis tie kaj ĉi tie paŝtantaj bovoj kaj ĉevaloj senbridigitaj, promenadis senĝene sur supraj freŝaj herbaroj, sur kiuj ondumanta brizo ilin karesante forpasis kvazaŭ ĝi amuzis sin sur la kreskaĵoj. (daŭrigota)

Redaktoro mirmuras:

自慢は自他共に勤ます

エスベランチストには、目立ちたがりやが多いですね。私、前田もその一人ですが、文通で変わったのがくると、皆に見せたい。人形を送ってもらった、きれいな本を送ってもらった、旅行した、あんなところへ行ってこんな人と出会った...

一方、緑丘会には、いったいどんな人達がいるのかなと思っていらっしゃる読者もおられると思います。読者会員お互いに、気楽な交流がもっとあってもいいのではないかと、思っています。

Tre bone! 緑丘誌は、みなさんの素直でnaivaな自慢話を載せたいと思っています。KORESPONDEME, VOJAGEMEなどは、編集子のそういう意図がうしろにあるのです。

でも、文通の場合、『手紙の内容を和歌山の地方雑誌に（読者は約60名）載せてもいいか』文通相手の consento をとっておいてほしいと思います。案外喜んで承知してくれる場合が多いです。大へんintimaな私事でないかぎり。

また、国内、海外の旅行先で撮った写真に、解説をつけたものも歓迎いたします。写真は必ずお返しいたします。できたら Esp. 文の解説を。日本語まじりのものなら、編集部で Esp 訳いたします。

原稿の送り先、ネタの通報先:

和歌山緑丘会

640 和歌山市小松原 6-1-6

前田 米美 方

◆◆◆ PINOさんへの返事 ◆◆◆

*この原稿を、相川さんから直接いただいたのは、6月6日、KLEEG大会の夜でした。当時、既にV. M. 6月号は版組にかかっている、間に合いませんでした。せっかくいただいたのに、時期を失し、お詫び申し上げます。

相川節子(宇治エス会)

第39号の編集後記を読んで、十何年も前に見たテレビの場面を思い出しました。ヤング向けのショー番組で、桂三枝がマイクを持って客席をまわりながら、「िकासを英語で何ていうの?」と聞いています。だれも答えられません。िकासは すばらしいという意味だから、ビューティフルとかファインとかグッドとか言っておけばそれでいいのに。ほとんどが高校生らしく見えたが、むずかしく考えすぎたのですね。

PINOさんの娘さんの質問、「ぶりっこ」

「ぶつつん」「ちくり」も、あまりむずかしく考えるとわからなくなりなす。

「ぶりっこする」はよい子ぶることだから hipokriti でいいはず。afekti sin bona infano とすれば意味はより正確ですが、やはりひとことで済ませる方が感じが出ます。

「ぶつつんする」は、どこか頭の配線の一ヶ所が切れるという意味(わたしの解釈では)なので、esti kun rompetita kapo とでも言っておけばいいでしょう。「ぶつつん人間」は difektkapulo か、rompkapulo ですね。

「ちくる」はつまり密告だから、denunci でいいはず。

え? そんな訳語では、ヤングのイマイことばづかいのニュアンスがだせないって? あたりまえです。たとえば、私たちは手紙のはじめに、Kara samideanoと書きますが、これを「親愛なる同志」と日本語に訳したところで、エスペランティストが kara samideano ということばにこめるニュアンスは伝えられません。Verda hejmo を、「エスベラ

ンティストの家族」と訳しても、わたしたちのこのことばに対する思い入れを表現することはできません。もともと翻訳とはそういうもの、お互いさまです。

ところで、エスペランティストでない人に、時にはひやかし半分で、「これをエスペラントではどうなの?」と聞かれることがありますね。そんな時はあまりむずかしく考えず、あてずっぽうでもいいから即座に、自信ありげに答えましょう。もたもた考えていると、「やっぱりエスペラントは不完全なことばだ、こんなことも表現できないのか」と誤解されかねません。人工語に対する偏見がなくなる時代が来るまでは、多少のハタハリも必要です。わたしも最近、「売上税をエスペラントでどうなの?」と聞かれ、すました顔で、「imposto pri varojだ」と答えました。この税は、varoj(商品)だけでなく、葬儀屋の手数料にもカルチャーセンターの授業料にもかかるのだから imposto pri vend-sumo が正しいことを、あとで La Movado を読んで、知りました。

ついでに言うと、「わたし十年もエスペラントやってるけど、まだうまくしゃべれないのよ、ホホホホ」などというケンソソも禁物です。和歌山にはよく外国からお客さまがいらっしゃるようですが、たとえば相手の言うことの四分の一が理解できたら、わからなかった四分の三でなく、わかった四分の一をおおいに友人知人に吹聴しましょう。

S-ro 辻の「緑の丘の怒りない面々」

(その3)

S-ro Otahi

「緑の丘のアカデミア」

髪は夕テまっすぐ、
口もとヨコまっすぐ、
視線は水平まっすぐ、
Esperantoに対しては
も一前むきまっすぐ。
何かご質問は?



例会日誌

[Monteto Verdas]

書記 高橋 千恵子

私達の土曜例会は、いつもおだやかな、そして静かな風が吹いています。

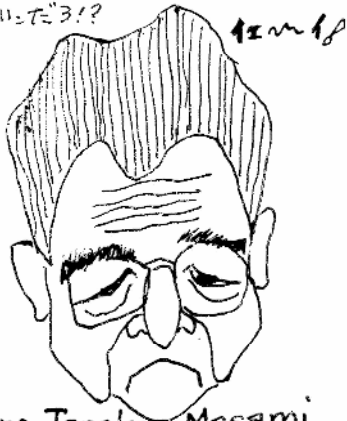
例会出席者は、国会中継の間接並みに、あまり変化はありませんが、勉強のあい間の途中下車は、充分出席者の好奇心をそそります。

何度も立ち消えになりかけた Ekskurso も やっとまどまって、5月23日と日時も決定、風光明媚な 白崎海岸周辺のドライブ とまではよかったです。当日は朝からどしゃ降り。<誰だ！雨男は！> なんて言いながら止むなく中止と決定しました。

が、.. あきらめきれない *sinjorinoj junaj nur aspekto* 3人は、急遽、根来緑化センターへ出

S-ro 辻の“緑の丘の終りない面々”(その4)

Miのこと“緑の丘 横丁のご隠居”などとアレな事と言う若いモノがいる。けしからん!! そのへんの若いヤツラよりも、Miのほうがモテるぞ。知らなかったぞ!!?



S-ro Tanaka Masami



ことし6月6日~7日、神戸外大を主会場にして開かれた、第35回関西 Esperanto 大会の本会場前で；左から、牛島美恵子さん、上中章子さん、中国から参加の 林 文娟さん。

かけ、充分 Esp. のことも忘れ、森林浴をしてみました。

6月6~7日(土~日)は関西大会で、例会はお休み。和歌山からは参加者4名。聞くところによると、中国からの参加 *bela juna esperantistino* 林さんをつかまえて *babilado* を試み、大会終了後ポートピア・ホテルで、すばらしい神戸の夜景をおつまみに、*vespermango* を楽しまれたとか。

7月4日は 梅雨の晴れ間、地元の毎日新聞記者の取材がありました。<仲間>という欄に8日紹介されました。

この頃やっと方々の地方誌にも、私達の会のことが載るようになりました。例会は地道な活動ですけど、やさしい作文の問題を、ああでもない、こうでもないなあ... と言いながら考えている面々のすがすがしいこと。ぜひ一度見に来てください。

木曜婦人会の方は、7月16日から 9月3日まで夏休みにはいります。9月10日(木)から再開です。

毎週月曜午前10:30~12:00、ギャラリーけまりでの、入門講座には、申込12名あり、皆さん暑いのに、熱心に出席なさっています。

(7月10日記)

(本の紹介) . . . 出口王仁三郎 著

記憶便法 エス和作歌辞典

この本、ずいぶんかしから(初版大正13年、第4版昭和46年)、実に愉快な辞書だと、かねてから聞いていました。エスペラントの単語を覚えるのに便利のように、その発音と意味をひとつひとつ不思議な日本語狂歌に歌いこんだのを、集めたもの。その狂歌のいくつかは、どこかで読んだ記憶があって、頭のすみにこびりついていました。なんでも知りたがりや、エスペラント図書館蒐集マニヤの私近ごろ思いきってJEIとKLEGに問い合わせてみたら、いずれも品切れ。

土曜例会に突如出没する江本さん、亀岡の大本本部によく行かれると聞いてお尋ねしたら「ある!」とのこと、やっと手にいれました。

450頁、1頁につき1~3回、ridego eksplodas. 気分転換にもってこいの楽しい本です。

たとえば、こんな具合です。

Ber-o 実(葡萄、いちごなど、汁多き)

紅いちご、葡萄などの汁多き

果物の実をベロ(ベロ)りと平らぐ

Abism-o 深淵、深谷

水をアビモ(浴び角力)を取りて深淵へ

知らず知らずに沈みけるかな

Absolut-a 絶対の、完全無欠の、

自主独立の

蜂とアソる-ータ(あぶ揃うた)二人兄弟は

皆絶対の權威者となる(靈界物語参照)

三つ目ののは、少しムリな感じで、大本の教義に詳しい人でないと、得心できませんが、そんな私のような無信仰の俗人も、著者のすごい熱意に打たれてだんだん笑ってばかりいられなくなります。1頁に

このような歌10首ずつ、接頭辞、接尾辞まで入れて、約4500首。そのうちの3600首は、多忙を極めていた宗教活動の寸暇、早朝、旅行の乗物の中、夜床のなかなどで書き続け、15日間で仕上げたという。今から60年余り前、大本の教義とエスペランチスモとの共通点の発見、そしてエスペラントへの熱意と先見の明に、頭が下がります。

[800円 110円。発行:天声社
〒621 亀岡市天恩郷 . . . ちよと
守まざるようですか?]

(おしらせ)

☆東京の日本大会は、8月28日~30日。エスペラント100周年で多彩なプログラム。緑丘会からは5~6名参加の予定。

☆木曜婦人会 Jaŭdaj Sinjorinojは 7月16日から9月3日まで夏休み中。 9月10日から再開。会場未定。

☆新しく入門講座が始まっています。(7月6日<月>より約5カ月、午前10:30~12:00ギャラリー-けまり)。sinanoncintoj 12名。

☆第19回 林間学校 } 8月4日(金)-16日(日)
第6回 日韓セミナー } びわ湖畔 国際館「冷凍室」
(東西線「直江津」駅徒歩25分)
問合せは KLEGへ 06-841-1928

☆日本・中国エスペランチスト交流の旅
昭62.10月25日~11月3日(10日間)
コース 上海-青島-濟南-泰山-曲阜-北京
費用 360,000円(成田発着、大阪発着)
申込/切 9月16日 (詳細 前田まで)

1987年 8月

(へんしゅう) 前田 米美
(ワープロ) 福本 博次
(SAILバックとさしえ) 辻 千早

〒640 和歌山市小松原町目1-6
TEL (0734) 22-8660

※暑中お見舞申し上げます。暑さ気にせす。ひたすらlernu!
189

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 43

ザメンホフ伝 (12)

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat
La kopirajto de la originalo, la
Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD
9 Maycock Place, ORELIA(WA) 6167,
AŬSTRALIO

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

挿絵：辻千早

第4章

学生時代 (つづき)

6年もの間、ザメンホフは毎日せつせと自分の言語を改良し、その適性を調べていった。各国の作家たちの作品の一部を翻訳した。また原作も書いた。書いた文章を一人で朗読してみた。多くの文型が理論的には良いように思えたが、いざ使ってみると、うまくいかなかった。重苦しい感じだったり、音の響きが悪かったりした。

「いろいろ削ったり、他と置き変えたり、修正したり、時には根本的に形を変えなければなりません。短文を作ってみた限りにおいては、理論的には全く問題はないと思いましたが、単語と文型、原則と現実要求がお互い矛盾しあいました。理論的にばかり固執してい



たら、万能の前置詞 je とか、意味に融通性を持たせた動詞 meti とか、意味がはっきりしないくせに一定の形をした語尾 -aŭ などは、おそらく私の頭の中には浮かんで来なかったでしょう。最初は儲けものだと思ったものの中にも、今では実用上、無用なお荷物となっているものもあります。そういう例として、私は、

不必要な接尾辞をいくつか捨てなければなりませんでした。」 (ボロヴコへの手紙)

この整理作業の過程で、いくつかのラテン語の語根が消えていった。例えば、anno や diurno がそうで、iara (年) や tago (日) にとって代わられた。実際のところ、^{ザメンホフ}

ザメンホフの人柄はまわりの人たちに感銘を与えた。彼はひかえめな人だったが、目標に対しては不屈な精神力を持っていた。その目標は、多くの見知らぬ人々の心に宿っていた夢でもあった。だから後に、この新しい言語で著作する最初の作家グループに影響を与えた。国民文学はたいてい戦争を歌った叙事詩から始まる。有名な戦争詩人がそのスタイルや精神の担い手となる。ザメンホフの言葉はそれとは逆であった。平和な詩で、大衆の中に入

り込んでいった。巨匠の後継者たちもまた、人類の友愛について書いた。

ザメンホフはまた自分の精神状態についても書き表している。6年もの間、彼は沈黙を守っていた。それはつらい日々であった。誰にも自分の仕事のことを話さなかった。それを隠しておくのはつらいことだった。それで彼は外に出かけるのを嫌った。どんな会にも出席しなかったし、どんな集りにも仲間入りしなかった。人々の集いの場では、自分がよそ者のように感じたのだった。人生最良の学生時代をそんなふうにあふさぎこみ、悩み苦しんで過ごしてしまった。そのような心に秘めた情熱の炎や苦しみを、彼は詩によってこう表現している。

我が想い

夕闇せまる夏の宵、人里離れた野原にたたずみ、
仲間の女性が希望の歌を歌っている。
打ち砕かれた人生をいたわりながら、話してくれる――
僕の心の傷が、ふたたび打たれ、血を流して痛む。

「眠っているの？ ねえ、あなた、どうしてそんなふうじっとしているの？
ああ、きっと子供の頃のことを思い出しているのね？」
何と言ったらいいのだろう？ 泣かずに話せたんだ。
夏の散歩の後、憩いのひとときを過ごしているお嬢さんと話した時にはね！

僕の想いや苦しみ、悲しみや願い！
今までどれほど黙っておまえに捧げつくしたことが！
僕の一番大切な ―― 青春を ―― 泣きながら
いけにえを捧げよと命ずる祭壇に、この手でみずから供えたのに！

心の中に熱い火が燃え上がり、僕も生きたいと思う。
でも、陽気な人たちのもとに走ったら、僕は永遠に見放されてしまうだろう。。。
運命よ、もし僕の苦勞や仕事が気に入らないのなら、
すぐ死を与えてくれ、希望を持っているうちに ―― 苦しむことなく！

-ano という接尾辞はすでに別の意味で使っていたし、ザメンホフは anno のような二重文字を含んだ単語はいらないと思ったのである。また diurno は *diurne* (毎日) とか、*diurne* (正午) といった合成語にすると、とても響きが悪い、それに *diurne* (昼間) というような、普通の人が決して使わないフランス語やラテン語を知っている教養人は、国際的にはほんの一握りしかいなかった。一方 *lago* は、少なくとも何ヶ国かの国民は日常語として使っているからすぐにわかるし、現実にはずっと国際的であった。同じようにギリシャ語からとった響きのよい *kaj* (そして) がラテン語の *e* の代りに採用された。 *e* はあまりはつきりききとれないので、文を間違ひなく区分するのに不適當だと考えられたのである。

後に部外者が語彙を「完成」しようと試みたが、たいてい元の形に戻ってしまうか、せつかく経験を積んだ思慮深い先哲が歩んだ道を後戻りするのおちだった。「それよりもこの形が絶対科学的だと思う」と彼らはこざかしい理屈を並べた。ザメンホフはそんなことは先刻承知だった。しかし長年使ってみて、初めの形が全く実用に不向きだとわかり、もっとよいものに変えなければいけないと思い直していたのである。

「天才とは長年にわたる忍耐である。」とはビクトル・ユーゴの言葉であるが、試作、試行を重ねて休みなく磨きあげていった6年間は、まさにその言葉そのものであった。子供の頃のザメンホフは音楽に熱中した。ピアノを弾き、歌を歌うのが好きだった。だから美しい音の調和がいつも彼の言葉の好みを左右していた。

彼は、言葉を生き生きしたものにするには、文法や語彙だけで、十分だとは思っていません

た。文章中で洗練さに欠けるものや重苦しい感じのする箇所に会おうと、真剣に悩んだ。どうもこの言葉は「すらすら」流れないと心の中でいつまでもぶつぶつとこぼしていた。そういうわけで彼は、あちこちの言語からの逐語訳はもうやめようと思い始めた。直接この新しい言語で考えるように努めた。

少しずつ、この新しい言葉は一人歩きをし始めた。言葉は身軽になり、歩みが速くなった。もはや他の言語の陰のような存在ではなくなった。みずからの命を、魂を、独自の性格を身につけていった。今や外部からの影響力をすんなりと押しつけた。それはもう、しなやかに、優美に、そして「生きた母国語のように全く自由に」流れるようになっていた。

この時こそが、その国際語の本当の誕生日だった。生命のない単語の集りで出来た言葉がどうして人類を救えるというのだろうか？ たとえ90人の学者がそんな言葉を認めたとしても、それが何になろう？ みなそれぞれ自分勝手な解釈をしてしまうだろう。言葉に何の共通の基盤もなく、共通のスタイルもない。自由さのある程度規制するなんらかの慣例もない。しかし、エスペラントが発表された時、すでに生き生きしていたのは、ザメンホフの忍耐と天才のたまものであった。その言葉が確かな力を身につけていたのは、巨匠がそれを使いこなしていたからである。文法や語彙は全く論理的なもので、個人的な嗜好はさしはさめないが、語尾や小辞の選択や好みは自由であった。だが、人々の心を結び合わす魂と、文体の基本は、ザメンホフ自らの手でその中にしっかりと封じ込められていた。ザメンホフは、その言葉の中に大いに自らを投入した。その言葉で新しい感覚や人間のあこがれを表現し

Infanaj tagoj



Tanaka Masami

Jam antaŭe mi skribis pri la nova domo, kiu estis vere nepriskribeble kadukiĝinta kaj plie estis malvasta, havante nur unu ĉambron. La kuirejo estis ĉe la angulo de la ĉambro. Ekster la domo estis konservejo por hejtolignoj kaj tuj apude estis la necesejo kaj banujo. La domo ne havis elektrolampon, pro kio ni lumigis ĉambron per oleo-lampo ĉiuvespere.

La gepatroj kiel kutime eliris frumatene por labori kaj revenis vespere, ĝis kiam mi atendis ilin en la domo.

En iu tago, reveninte de la lernejo, mi intencis prepari hodiaŭan vespermanĝon. Pri la rizkuirado mi ofte rigardis, kiamaniere la patrino kuiras. Komence ŝi lavas rizon en la akvo kaj enmetas ĝin kune kun freŝa akvo en la kuirpoton, kaj surmetas ĝin sur la forno.

Laŭ la procedo de la patrino maniero mi aranĝis tuton kaj ekbruli-

gis vergaĵojn sub la forno. Baldaŭ bolanta bruo aŭdiĝis el la kuirpoto. Mi ne povis flanken vidi kaj nur prizorgis fajrforton. Kiam la bruo eksilentigis, mi rapide estingis vergofajron kaj atendis plenan vaporumiĝon de la rizo, sed mi estis maltrankvila, pensante pri la rezulto. Plu detenante min, kun timo kaj ekscitiĝo, mi levis la kovrilon de la kuirpoto iomete supren, kaj ĵuste tiam elŝprucis varma vaporo el la kuirpoto kaj ĝi ĉirkaŭvualis mian vizaĝon. Bongusta odoro tiklis al mi la nazon, tiam momente mi vidis tie perle brilantan rizon tra la diafana vaporo.

Hi estis kontenta kaj ĝoja, ke mia laboro sukcesis en bona ordo.

Ĉe la sojlo, kiel kutime, mi atendis la gepatrojn. Iom poste ili revenis. Vidante ilin mi diris fiere, "Mi jam pretigis vespermanĝon". Kun rideto la patrino vidis mian vizaĝon kun suspekto kaj

diris, "Ĉu vi vere kuiris rizon?"

Kiam ni kune atbligiĝis por manĝi, la patrino diris al la patro, "M' bone kuiris sed li konsumis tuton el la rizkesto, ne restigante eĉ unu rizeron. Kiel ni pasigu poste de morgaŭ?"

Vere mi eluzis tutan rizon restantan en la rizkesto, eĉ ne pensis pri la morgaŭa rezervo. Post la vespermanĝo la patro diris al la

patrino, "Senzorgu pri tio, necesan rizon mi prunteprenos de najbaro" kaj li diris al mi, "Etulo M' fariĝis bona kuiristo, do ekde morgaŭ preparu vespermanĝon ĉiutage"

Ek de tiam, donite de la patro la taskon, mi vole nevole devis min okupi per rizkuirado dum postaj multaj jaroj. (daŭrigota)

KIU ESTAS PLI NOW-A?
#####

OKUMURA-Rinzo

(1) 駅前にヤング向けの店が
オープンしました。

いろいろの店が出て、駅前の土地の値段がうなぎ昇りです。さてこの(1)の文を読んでどう感じられますか?

「別に何も。何かあるんですか?」とおっしゃる方はそれでよろしいのです。

「ヤな文だな。気障な。」と感じられる方はちと古い方です。ヤング、オープンが引掛かる人は、日本語が乱れていると嘆く人なのです。この人達は

(2) 駅前に若者向けの店が
開店しました。

と書けるのにと考えます。

(1)を何の抵抗もなく読み流し、きき流す人は今式のナウい人達なのです。――ときめてかかってよろしいでしょうか? この様に今式、古風を分類してよいとすると、(1)

(2)の文をエスペラントに訳すとき、

(3) -- Butiko por young-oj
open-is antaŭ la stacidomo.

(4) -- Butiko por gejunuloj
malfermiĝis antaŭ la stacidomo.

というようになりますか。さて、(3)と(4)とどちらが古風でどちらがナウいか? どちらが耳障わりでしょうか。

そして次の文のどちらがナウく、どちらが古いでしょうか?

(5) Ni ĉiu pagu ŝarikane.

(6) Ni ĉiuj pagu sian parton.
(62.8.5)



~~~~~  
----- 8月10日、V. M. 42号をいただきました。 Dankon. その中の相川さんの文をよんで一文追加したくなりました。もし差支えなかったら、前便のあとへこの「ちくる」をくっつけてくれませんか。-----  
~~~~~

つづいて「ちくる」。

V. M. 42号、「ちくるは密告することだから denunci でいいはずです」とありましたが、密告も、ちくるも、たれ込みも denunci 1本で片付ける、(1本でしか片付けられない)のは余りにもエスペラントが貧しい、わびしい、寂しいと思います。料理店も小料理屋もめし屋もお食事処も manĝejo と restoracio とで片付け、大根も人参もごぼうも legomo で片付けるとなると表現力が全く貧弱となる。

同じ内容でもニュアンスが異なったら、異なったニュアンスを出して訳したい。「出せなくて当然、翻訳とはそういうもの。お互いさまです」は万止むを得ぬ時の反撃口上としてとっておき、出来たら、出来るだけ何とか工夫して、ニュアンスも加えたいものです。

「あの子が先公にちくりやがったのよ」の訳は
La infanaĉo ĉiklis min al la instruistaĉo, fi!

S-ro 辻の、“土よう日の
緑の丘の懲りない面々”(その5) kaj(その6)



S-ro Tanigami



S-ro Hasegawa

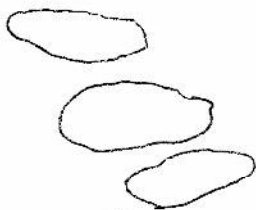
のようにしたい。

Ŝi denunciis min al la instruisto, ても内容は同じだが、味がもう一つ。

「ちくる」のエス語訳が無いから、と denunci に後退するか、無いから ĉikli という単語を考えて即席に一步前進するか。エスペラント発表当時の 900 語が今 PIV の 15233 語に増加、私達もいつまでも他人まかせにせず応分の新語導入に協力しましょうよ。

「ちくる」にしても、日本人の青少年の誰かが導入した日本語です。「ちくるってどうエス語で言いますか？」と聞かれたら、即座に、自身ありげに、もたもたせず答えましょうよ。「ĉikli です。ĉiklas ĉiklis ĉiklos ĉiklu と変化します」と。

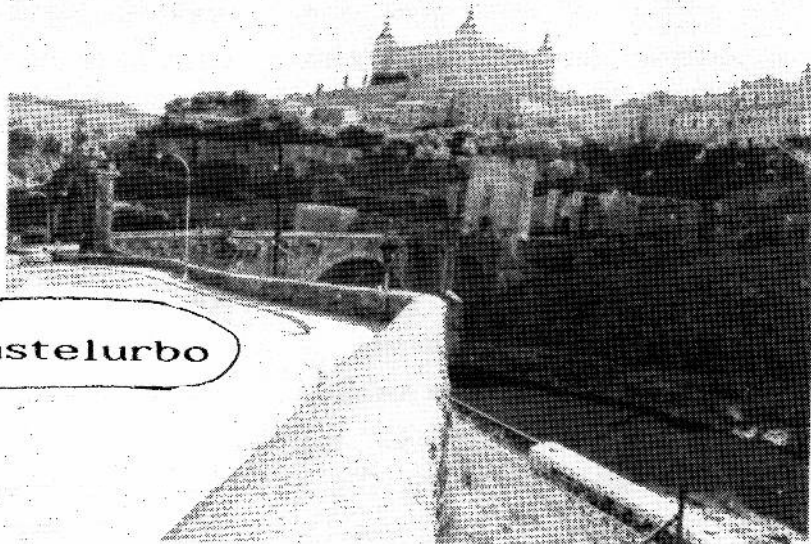
~~~~~  
付記：今を去る24年前、昭和38年に全日本高校エスペラント連盟の創立のとき、奈良女大附高生福味節子さんが奈良県代表で参加されました。今、相川節子さんとして当時の顧問先生をとくに追越してしまいました。可祝。うれしいことです。  
~~~~~



TOLEDO

--La kastelurbo

HASEGAŬA JOŜIFUMI



トledoは 城壁のまちです。

la 24an de Aŭgusto, 1975
(dimanĉe)

Mi ellitiĝis en la ĉambro de "HOS-TAL MARIA LUISA", kaj post la matenmanĝo mi duŝis min tie.

Hodiaŭ mi eluzis mian sapon kaj dentopaston. Mi devos aĉeti ilin almenaŭ morgaŭ.

Ĉi tiu ĉambro estas la plej bona ĝis nun, escepte de tiu en Moskvo, ĉar ĝi havas duŝejon, kvankam neceso ne estas en la ĉambro.

Mi eliris el la ĉambro post la 11a horo kaj veturis al la stacio "Madrid Atocha". (Madrid havas kelkajn stacidomojn por trajnoj). Unue mi ŝanĝis monon ĉe la stacia banko. Miaj pesetoj estas jam tre malmultaj.

Mi rimarkis ke en Hispanio troviĝas japanoj malmulte, kompare al aliaj eŭropaj landoj, kaj hispanoj facile distingas japanojn el aliaj, ĉar la vojaĝantoj el aziaj landoj estas eble plejparte estas japanoj. Kaj ili rigardas japanojn kun granda intereso.

Nu, mi ekveturis je 2:00 p.m. al Toledo per malrapida trajno. Ĝi atingis la finan stacion de Toledo je 3:30.

Mi serĉis deponejon por mia peza valizo en la stacidomo sed vane. Antaŭ la stacio, la etoso estas ne prospera kaj kelkaj japanoj, kiujn mi vidis en la stacidomo, diris al mi, ke ĉi tie oni trovas pensiojn

tre malofte. Mi devas marŝi unue, kunportante pezan valizon senradan, al la urbocentro de Toledo, ĉ. 2 aŭ 3 kilometrojn. Mi paŝis sub varmega suno. Toledo troviĝas sur monteto kaj tuta urbeto estis en kastela longa remparo.

Mi serĉis tranoktejon interne de la remparo kaj vizitis unu malnovan pensionon. (Ĉi tie oni nomas tian pensionon "Fonda"). Sed mi rifuzis tranokti tie post la unua vido al la ĉambro kaj mi vizitis plu du "Hostal"ojn, sed unulitaj ĉambroj estis jam rezervite plenaj.

Fine mi trovis unu "Fonda", kiu estis malmultekosta, nome 130 p. sen matenmanĝo. Mi tuj decidis tie

tranokti. La nomo de la "Fonda" estis "La Sevillana".

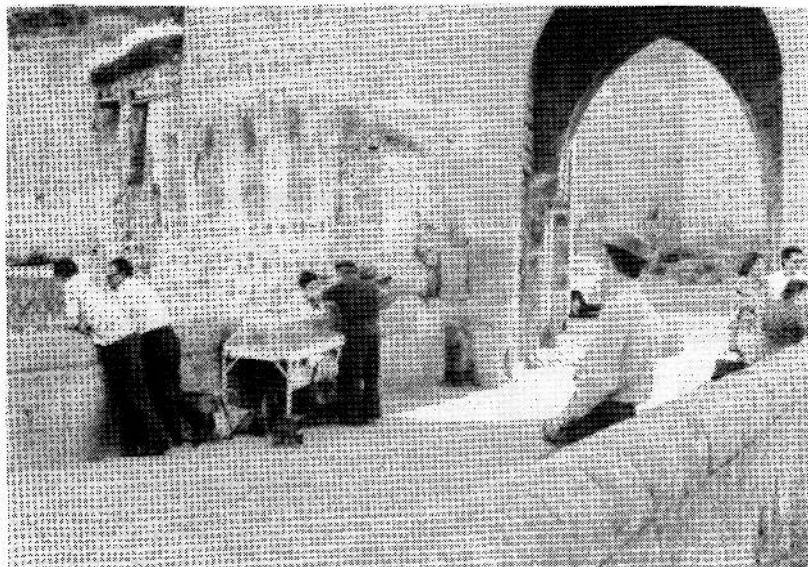
Unue mi pagis por la ĉambro kaj deponis mian pasporton. Tranoktejo, kiu petas deponi pasporton, estas ĝenerale bona kaj fidinda. Mi metis miajn sakojn kaj valizon en la ĉambro kaj eliris kun fotilo por rigardi la urbeton.

En Toledo, mi ofte vidas soldatojn. Pro kio? mi ne scias.

Mi vidis specialaĵojn de Toledo en butikoj. Ili estas tre belaj kaj bonaj kaj aparte plaĉis al mi felaj boteloj aŭ skulptitaj metalaĵoj; arĝentaj, oraj, latunaj vazoj aŭ potoj tekruĉoj k.t.p.

Sed hodiaŭ mi ne aĉetos ilin. Mi intencas hodiaŭ rigardi kaj foti Tolledon de ekstere.

Poste mi vizitis urban parkon, kie mi manĝis diversajn specialajn manĝaĵojn, ekzemple marinaĵojn k.t.p. Ili ne estis multekosta kompare al enaliaj eŭropaj landoj.



城門の前の橋の上。石の街。

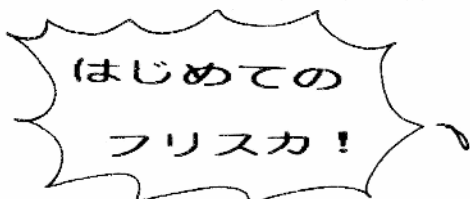
Jam estis vespere kaj mi paŝis
por foti la ĉirkaŭaĵojn de Toledo
longtempe, eble ĉ. du horojn.

Kaj mi denove eniris en la rem-
paron de Toledo kaj tiam estis jam
post la 10a horo, nokte. En la cen-
tra vasta placo, multaj gejunuloj
ariĝis, pli multe ol tege.

Mi revenis al "Fonda", lasis la
fotilon en la ĉambro kaj vesperman-

ĝis ĉe iu kafejo antaŭ la placo.
Tie mi devis meti trinkmonon,
bedaŭrinde, ĉar la aliaj ankaŭ metis
ĝin.

Mia ĉambro estas por du personoj,
tial vasta kun du litoj. Sed mi ne
povis uzi akvon, kvankam troviĝas
lavmaŝino tie.



この夏、びわ湖畔で.....



Friska lernejojについて、感想を書いてみます。
この3泊4日のfriscaの中で私は、日本にいるよ
うな気がしませんでした。ちょうど日韓セミナーも
同時開催で、2日めと3日めは、韓国の人達と同室
になり、エスペラントを使わなければならない状況
でしたので、かえって、相手のエスペラントも真剣
に聞き、私も辞書をひきひき、我ながら頑張ってエ
スペラントを使いました。また、朝の会話と歌も、
よい刺激となりました。

江川さんの Folia kurso (通信講座) の生徒さん
板倉千恵さん (大谷女子大、英文科4回生) の
驚き。 8月13日~8月16日

同時に、第6回日韓青年エスペラントセミナーも
ありました。

friscaでいちばん、Gaja vesperoが楽しい催し
でした。韓国の民族衣装を着て、太鼓と鐘の演奏を
きかせてくれ、(私の部屋でリハーサルされ、すさ
まじい音でした...)そして ゲームや地元の青
年団の踊りで、2時間位 あっという間でした。

friscaに参加したことによって、エスペラント
がぐっと身近に感じられました。そして何よりも、
もっとエスペラントを勉強して、もっと自分の意志
を伝えてみたいと、痛烈に思いました。その点で、
friscaの間ずっともどかしい気分でした。ベテラ
ンのエスペランティストの皆さんが自由にエスペ
ラントで話をするのを見たりして、自分もそうなりた
いという気持ちと、なれるかなという気持ちが半々
です。

私もfriscaの本屋で、中国の絵本を買ってきま
した。絵をみると、なんとなくわかるので、楽しい
です。



吉富 相子

私達は、まだ真っ暗な朝五時に起床し、上等のスーツに身を包んで、花の都東京へと出発したのであります。市駅で待ち合わせ 四人組となり、エスぺラント語ならぬ日本語でべらべらとおしゃべりしながら、数々のアクシデントとハブニングを乗り越えて、東京へ着いた時は いささか疲れておりました。

新橋の駅に降りたち、ホテルからニッショーホールへ向う道すがら、お登りさんとおほしき緑の星バッジをつけた集団があちらこちら。お互いに関くものあり。

Saluton!

Kie Nissho hole estas?

De kie vi venis?

大東京に突然 外国が現われたような錯覚に陥った。『ここはどこ? 私は誰?』

" Mia nomo estas Aiko YOSITOMI "

" Mi venis de Wakayama "

と一生懸命に頭で作文した時は、すでに遅く

「この人は、ワカンネーダ」

と日本語で話しかけられて、私の目の前の外国は、あっという間に消え去りました。都会のビル街、一流会社の社員や OL 達の間を、我がエスぺラント国民達は大きな荷物をぶらさげて、ニッショーホールへと集結していきました。

中に入ると、あちらからもこちらからも再会の挨拶が飛び交い、先ほど垣間見た世界へとたちまち引きずり込まれていきました。

開会式が始まり、えらいさんが演壇に上がり、流暢に何やらご挨拶をなさっておられましたが、さっぱり分からず、東京都知事さんの代理の方が、日本語でしゃべられた時には、本当にほっといたしまし

た。(前田先生ゴメンナサイ)

その後、みんなで立ち上がり、La Espero の歌を大合唱しました。林(リン)さんの里親のおば様が「もう一回みんなの声で歌いましょう」とおっしゃり、カラオケなしで歌いました。私もここぞとばかり、大きな声で元気よく歌いました。(この歌だけは知ってるゾ。ハハハ)

それから全員で記念撮影を行い、「せっかく来たのだから」と私は、グラグラするテーブルの上に上がり、ニッコリとポーズをいたしました。その後、歌や演奏があり、開会式は無事に終了しました。

最後に、私のつたない感想ですが、この大会に参加して、改めてエスぺラント語の魅力を再発見しました。それは、純日本人である私が突然エスぺラント人に変身出来るということです。日本人の吉富が考えたり行動したりすることと、エスぺラント人の Joŝitomi とは別であったということが、本当に驚きでした。(エスぺラント人の私は全く無秩序で大胆で、すっとんきょうなのであります。)

私の中の別の私という人間を発見しました。それは、自己の客観視であり、エゴである私と、無意識の私との対面であります。フロイト哲学のエゴとイド、そして無意識の私というものを概念の中ではなく、具体的事実の中で知ることが出来るのでした。一つの行動、見方、考え方は、その人の固有のものであるべきですが、それは、「日本人」「和歌山人」という一つの枠の中での通念であって、一たび場を転換すれば、常に普遍であるべき実体はないのだということが、火を見るより明らかな発見となりました。

エスぺラント会場で 垣間見た異次元の世界と、その中で私を、これから究めてゆきたいと思えます。

和歌山緑丘会の会費	郵便振替口座を開きました。
年 3000円	大阪 6-3630
家族学生 1000円	名義 和歌山緑丘会

1987年10月

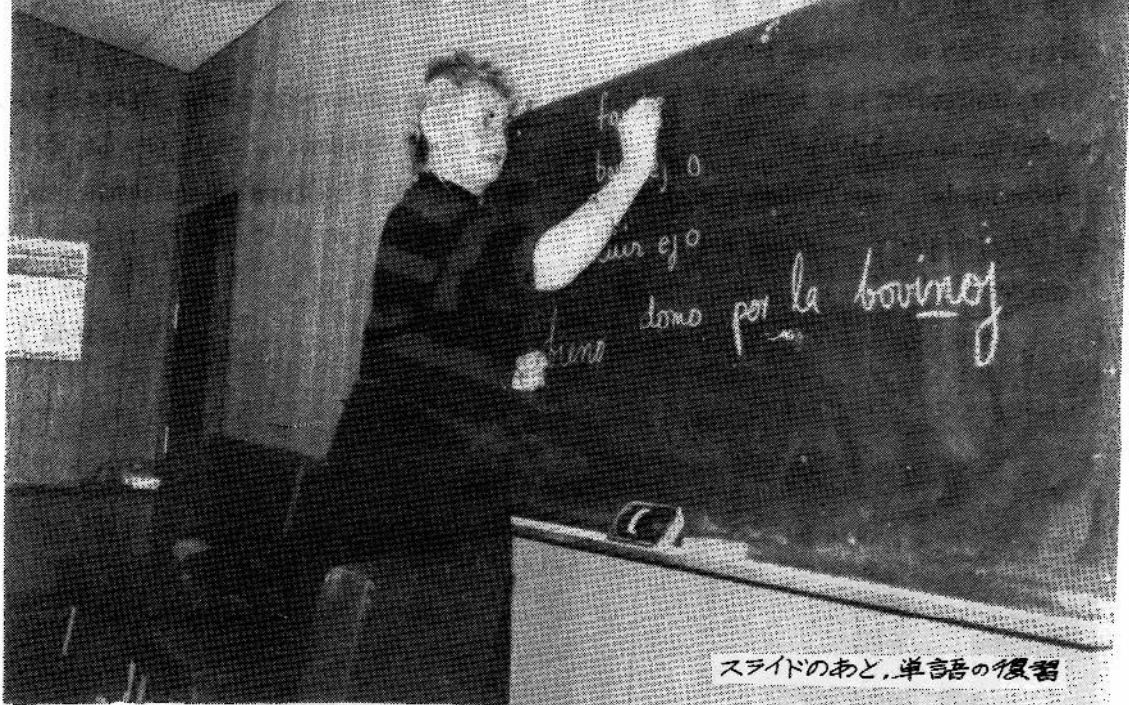
(編集)前田果美 640 和歌山市小松原6-1-6
(TEL 0734-22-8660)

VERDA MONTETO

Redaktita ĉe MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 44

★ Esperanto 100周年を記念して、ササカながら、バツ!!と12ページ。

S-ino Constance
en Wakayama



スライドのあと、単語の復習

S-ino Constance Harvey, kanad-devena nederlandano 57jara, vizitis nian urbon en la 25a kaj 26a de la lasta oktobro.

Ŝi estas tre alt'statura esperantistino.

Pro kio ŝi vizitis nin?

Ŝi estas ĝenerala sekretario de nederlanda ALS-Fond'ajo. Laŭ ŝia parolo, ALS-malsano ofte aperas en nia gubernio Wakayama, tial ŝi venis al nia urbo.

Kio estas ALS-malsano? Tio estas malofta sed grava malsano de neŭro-

patio kaj malmol'ig'as la organon aŭ histon kaj mort'ig'as pacientojn post 3 jaroj ek de la malsa'ig'o.

Tamen ŝi vizitis nian lundan kurson ne por prelegi pri tiu malsano, sed por sen'afekte inter'paroli kun ni en Esperanto.

Ŝi prezentis al kurs'an'oj la lum'bildojn pri nederlanda ĉiu'taga vivo. Tiam ŝi petis nin, ke ni ne traduku ŝian parolon en japanan lingvon.

Tre malrapide kaj klare ŝi parolis pri bel'eg'aj lumbildoj.

Nederlandaj ge'knaboj ekzercas sin en naĝ'ad'o sur'met'ant'e ĉiu'tagan vest'aj'on. En nederlando

estas multe da kanaloj. Se la ge'knaboj falas en kanalon, ili devas naĝi kun ĉiutaga vestaĵo. Tial ili ekzercas sin en naĝado kun vestaĵo.

Post la prezentado de la lumbildoj, ŝi faris kelkajn demandojn al ĉiuj kursanoj. Ili respondis al ŝi iom malfacile, sed ili povis kapti du tri viv'ant'ajn esperantajn vortojn. Tio estis tre bona ekzerco kaj instigo por ili.

Ŝi tra'noktis ĉe S-ro Egaŭa kaj ĉe S-ro Fukumoto, kaj en la 27a matene, ŝi for'lasis nian urbon kaj iris al Kioto.

Bon'vojaĝon al ŝi.

[Y. Maeda]



喫茶「けまり」の3階の教室



お国のクリスマス祭りの習慣の話に始まり
空手の話、スケートの話、子供の話、宗教の話
クラゲの話と、次から次へ……もちろん
あの有名なネーデルラントクリスマスの話も。
若い人達の同様の話もありました。

S-ro辻の。"土よう日の 緑の血の懲りない面々" (その7) kaj (その8)



S-ro EGAŪA

° 知らんを知る!
緑の血のズボラマア。
江川氏。
° 知らん! なんぞ
言はんは、緑の血人
モグリよ、モグリ!!
° 今マアミでよく
聞かん、あの江川カ
には、耳の大きさで、
ちよとマケてますが、
その分、偉くは
マケません。他の
トでは?? ……。
マケませんとも!



S-ro 辻

° 最後に出ました
ご本人!
° 土よう日の
"必殺、名物翻訳人"
° この人はウケサによい
は、単語を食べて覚
えるとか……。
空腹そうなときは、皆様
けし、Vertaro を見せ
ぬよう。
° 左の江川氏 ともども、若い頃はステキ
だったろうネ、+ムンチ 言う女性も いない
ことはない。か、カゾ 目がないね、
今だって ナニノ ナニノ 二人とも……

ザメンホフ伝 (13)

原作：エドモンド・プリヴァ

翻訳：人谷宏治

挿絵：辻千早

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat

La kopirajto de la originalo, la
Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.
9 Maycock Place, ORELIA(WA) 6167,
AÜSTRALIO

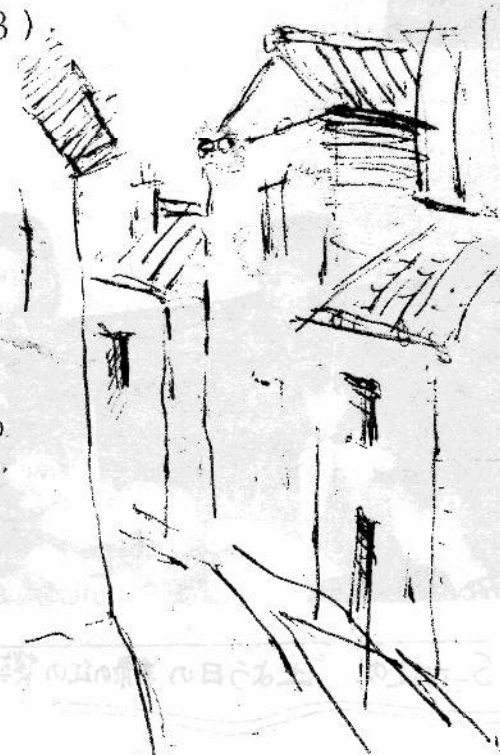
第4章

エスペラント博士

ところがある時、あの詩に詠われた「仲間の女性」がザメンホフの秘密を見抜いた。コブノの町の商人の娘、クララ・ジルベルニクが自分の義兄の家でザメンホフに巡り会ったのである。機知に富み、陽気で活発で、心優しい彼女は、無口で引っ込み思案な若者にずっと注目していた。純粋で賢そうな広い額、眼鏡の奥の明るい、考え深そうなまなざし。

二人の間に愛が芽生えた。ある日ルドビコはクララに自分の二つの秘密を打ち明けた。クララはルドビコの心を理解し、彼の献身的な生き方に参画しようと決意した。

前途につらい生活が待ち受けているのは、クララには初めからわかりきっていたが、あえて恐れずに踏み切ったのである。すでに、その二年前、ルドビコ・ザメンホフは医者免状を取得していた。1885年から87年の二年



間はとりあえず生業を求めたが、うまくいかなかった。あちらこちらと重い気持ちをひきずって、開業していきけるのに充分なだけの患者を見付けようとしていた。開業の当初はあまりはやらなかった。彼の控え目さや感じやすさも妨げとなった。貧しい患者にはとても尊敬されながら、大金を稼ぐということ知らなかった。ある晩のこと、ブロックの町で金持ちの家を往診した。ベッドには老婆が横たわり、傍らには三人の医者が付き添っていた。手のほどこしようがない状態だった。二日後に彼女は亡くなった。息子たちは往診した四人の医者に高い治療代を届けた。ザメンホフは自分の分を断わった。患者が死んでしまったのに、どうして治療代を受取れようか？

リトワニアの小さな町 Vejsieje で女の子の臨終に立合った。女の子は熱病で死んでしまった。気の毒な母親は、気も狂わんばかりに嘆き悲しんだ。その後何ヶ月もの間、その母親のしのび泣く声が耳について離れなかった。彼は一般開業医をやめて眼科医になる決心をした。

そこで、特設コースで眼科医学を学ぶためウィーンに旅立った。1886年の秋に、ワルシャワの両親のもとに帰省し、眼科医として開業した。同じ年の冬にフィアンセと知り合い、著作を出版するよう勧められたのである。

もう何年も前から出版業者を探していた。あちらこちらにあたってみたが駄目だった。誰も危険な賭けはしたくなかったのである。そのように、ルドビコはまた世間の営利第一主義の苦さを味わっていた。新たな苦しみが始まった。

しかし、「ルドビコの言語」の出版はいそがねばならなかった。彼が黙々とその言葉の仕上げをしているあいだに、西の方でコンスタン出身の修道院長シュライエルが「ボラビューク」を発表した。その語彙は難解で独断的であった。長い間ザメンホフはそんな言葉の試みがあったことを全然知らなかった。その評判が彼の耳に届いて来た時、初めはとても喜んだが、後になってその言葉の作り方そのものが実用に適さないとわかった。やがてその言葉の普及運動は弱まっていった。多くの支持者たちは失望し、普及運動をやめてしまった。けれどそれが目指している意図は以前として今でも正しいのだということ、世界の人たちに一刻も早く知らせる必要があった。言葉の仕組みが悪いだけだった。言葉は小手先で作られたものではなく、本当に国際的であり、

生命力を持ったものでなくてはいけないのだ。

この時とても世話好きな人が手を差し伸べてきた。クララ・ジルベルニクの父親であった。その春(註-1887年、3月30日)彼の娘はザメンホフと婚約していた。その若き理想に燃えた学者をクララの父はことのほか気に入っていた。彼はザメンホフにその計画のことを尋ねた。何と偉大な計画だろう! とても崇高な目標だ! 彼自身は単なる一商人に過ぎなかったが、思想好きであった。お金を儲けてためるばかりが能ではないではないか? ひとつこの自分より聡明な若者の手助けをして、人類のためにより価値があることをしてみるとするか?

彼みたいない地位にいる父親はたいてい娘を諷めるものだ。「男は甲斐性があって、現実的でなくちゃいかん。そんな馬鹿々々しい夢を見ているような奴は駄目だ!」彼等は口髭をひねりながらそんなふうには話すのである。しかしジルベルニクは違っていた。「おまえのルドビコ」は天才だ。クララ、おまえは神聖な仕事をするようになるぞ。いまいまいが、わしも手伝うとするか。」

そういうわけで義父は、夏にはもう結婚するように、そしてその前にお金を出してやるから、世界語の本を出版するようにと勧めた。それは実現した。校正刷りは、検閲官の手元にもう二ヶ月間も置かれたままだった。幸いなことに、その検閲官はルドビコの父の親友であった。1887年7月14日にやっと出版の許可が出た。検閲官にしてみれば、ルドビコ作品はおそらく無害なたわいのない物に思えたのだろう。だがルドビコは心配だった。ひとつには待ち切れない気持ち、もうひとつには不許可になりはしまいかという恐れとで、気

が気でなかったのである。

「いざ出版となって、私はとても興奮した。運命を決めるルビコン川のほとりに立っているような気がした。本が出版されたら、その日からはもう二度と後戻りはできなくなるだろうと思った。医者というものは一般大衆に依存して暮らしているのです、その大衆から、あの医者は夢想家で本業以外の『つまらぬこと』に気をとられていると見られたら、どんな運命が待ち受けているかはわかりきっていた。私は自分が出したカードに、自分と家族の将来の平穩

な生活の全てがかかっているを感じた。しかし、もうこの考えを捨てることはできない。それは私の体に入り込み、血や肉となってしまっていた・・・こうして私はルビコン川を渡ってしまった。」

その頃ザメンホフは「ああ、私の心よ！」というとても短い詩を作った。彼の心臓は、階段を五階まで駆け上がって来てドアの前に立った人の様に、息を切らしてドキドキと音をたてている。

ああ、私の心よ、そんなに不安げにドキドキと脈打たないでくれ。

今にも胸から飛び出しそうだし

もうちょっとやさしくしては押し切れない、

ああ、私の心よ！

ああ、私の心よ！ 長い仕事の果ての

判定の時になって、私は勝利を手にすることができないのか！

もうたくさんだ！ ときめきよ静まれ、

ああ、私の心よ！

第一書はロシア語で刊行された。その後まもなくポーランド語、フランス語、ドイツ語、そして英語で出版された。それらにはいずれも、この国際語で書かれた序文と本文が載っていた。例えば、キリストの祈禱の文「我が父よ」とか、聖書からの引用文、手紙や詩、16条からなる全文法、そして900語からなる2ヶ国語小辞典が含まれていた。またその国際語を学

ぶ約束をした人が1000万人になったら、自分もすぐに学び始めるという約束付きの入会申込用紙が付けられていた。第2ページ目で著者は「国際語は民族語と同じように共有の財産」だからと述べて、自らの全ての権利を放棄していた。全巻の終わりには、美しい意味を持ったペンネーム、「エスペラント（希望し続ける人）博士」と署名されていた。



① Kio estas malgranda gazo?
Ĉu vi legas malgrandan gazon?

GAZETO

② Kie vivas, tamen malofte, virino peka?

PEKINO

VIAGEME

ĈIE INFANOJ

ESTAS AMINDAJ

HASEGAŬA JOŜIFUMI



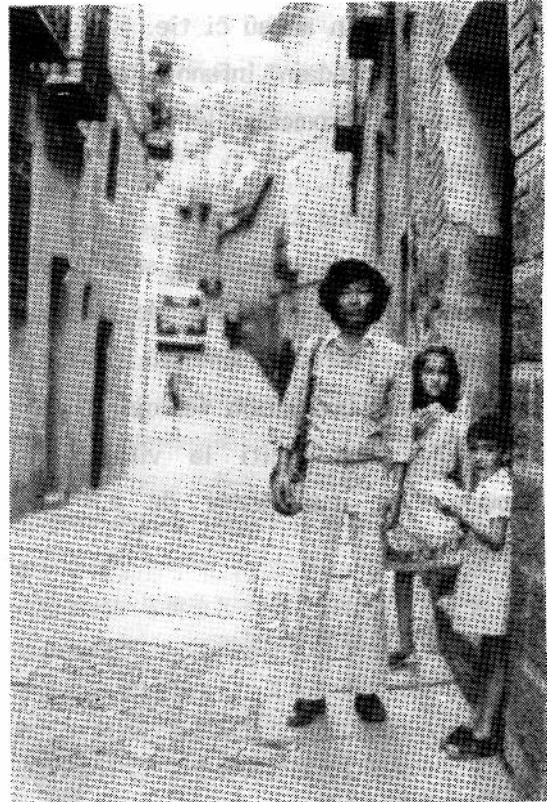
GH 02 8.3.75

城壁の小門

la 25an de Aŭgusto, 1975

(lunde)

Iom malfrue mi vekiĝis ĉe la tra-



GH 02 8.3.75

トledoの通り

noktejo "La Sevillana", ĉar mia ĉambro estas malluma.

Mi skribis b.k.-ojn* al Japanio, kaj vizitis poŝtoficejon apud la tranoktejo. Ĉiutage tre multaj turistoj vizitas la poŝtoficejon.

Hodiaŭ mi aĉetis diversajn aĵojn, ujon el ledο (tio estis utila), ruĝan akvomelonon (estis bongusta), sapon, dentopaston, panon kaj lakton.

Butikoj de lokaj specialaĵoj en Toledo estas tro multaj. Mi vidis

kelkajn japanojn ankaŭ ĉi tie.

Mi fotis amindajn infanojn en Toledo kaj mi promesis, ke mi sendos la fotojn al ili.

Mi vespermanĝis ĉe Bar.

En la lito, mi planis la sekvantan veturadon per la hortabelo de trajno. Morgaŭ mi restados ankoraŭ ĉi tie, ĉar mi devas lavi miajn vestojn.

Mi volas iam viziti la vilaĝon Samper (v.d.** maldekstre de p.8 en

la april-numero), ĉar Samper estas malpli turismeca ol Toledo.

* b.k. = bildokarto

** v.d. = vidu

la 26an de Aŭgusto, marde.

Vinberoj, kiujn mi aĉetis sur la strato en Toledo, estis tre bongustaj. Kiam mi sidante manĝis ilin, usona familio manĝis sandoviĉojn. Ni interparolis. Ili vojaĝas unu monaton nur



写真 できたら 送ってね"

en Hispanio. La edzino povas bone paroli la hispanan, sed la edzo nur iom.

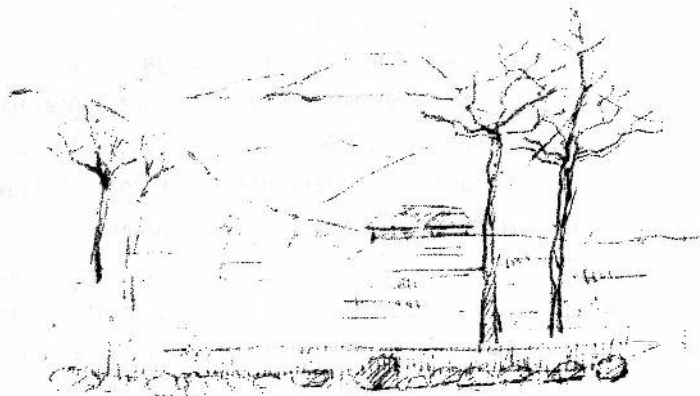
Mi revenis al "Fonda", kaj lavis vestaĵojn en la lavejo sur la tegmenta teraso. La mastrino pruntedonis al mi sapon. Tial mi povis facile lavi. Hodiaŭ estas vente,

kaj tial la vestaĵoj sekiĝos tre baldaŭ.

Post tio, mi skribis leterojn al alilandaj amikoj.

Mi decidis ekiri de Toledo morgaŭ matene. Pri tio mi anoncis al la mastrino kaj donacis al ŝi belajn pormemorajn poŝtmarkojn.

Infanaĵo
tago



Ianaka Masami

Ĉifoje mi intencis priskribi pli precize pri la montaro de ASO, kiel ĝi estas grandioza, kaj kiel ĝi montras al mi diversajn aspektojn tra la kvar sezonoj.

Mi plurfoje provis kiel eble elĉerpi impreson el mia infanaĝa memoro sed vane. Mi ne povis skribi ĉion detale pro mia forgesemo kaj la manko de mia esprim-kapablo.

Apud mia loĝejo fluas rivereto, kien mi iris frumatene en ĉiu tago. Estas en iu serena mateno, sur la

rivereto ŝvebas densa nebulo. Ĉe la riverbordo mi lavas la vizagon al mi aŭdante kantojn de birdoj, kiuj nestis en proksimaj arbaroj.

Post la lavado, mi rigardas la NAKADAKE. la plej alta el la montaro ASO. Ĝi donas al mi ian kuraĝon kaj freŝigon.

Venas somero.

Por la buboj de la montara vilaĝo, la somero estas la plej prezurinda sezono en la jaro.

Profitante la tempon de la belaj

tagoj, la buboj sep, ok Ĉiam agadas grupe, kune ludas, kune promenadas. En la somero ni havas aparte ĝojegan tempon por naĝado en la rivero, kien ni povas veni piede por dekkelkaj minutoj de mia vilaĝeto. La plej aĝa kaj dika bubo estas nia hetmaneto. Laŭ lia diro, ni devas absolute obei al li.

En iu bela tago, post la tagmango li kondukas nin al la rivero. Ĉiuj kunportas stangeton kun ferpikilo por kapti fiŝojn. Ĉiuj ne portas sur si vestaĵon eĉ kalsoneton. Same kiel ili, mi estas tutnuda, balancante peniseton, kaj iras kurante post la grupfino.

Ni alvenas al la rivero. Laŭ kutime ni celas unue al la akvoŝalo, kie estas abisma kaj grandspaca, nature farita konvena naĝejo, sed oni avertas al la naĝantoj, ke ĉi tie estas danĝere, ofte aperas KAPAO kaj atencas infanon, kvankam tia averto ne senkuraĝigas nin. Dum la tago ni pasigas la horon naĝante.

Meze de la rivero sin trovas granda roko. De sur la roko ni plonĝas konkure en la abismon unu post la alia. Mi estas ĉiam lasta, ili ne cedas min antaŭe plonĝi kaj en aliaj ludoj, pretekste ke mi estas la plej junaĝa kaj malaltstatura el ili ĉiuj.

Post la naĝado kaj plonĝado ni

iras al la dua ludejo, kie situas abismo malsupre kaj tie ni pasigas restantan horon fiŝkaptante. Tia estas nia tagvivo en la someraj ferioj.

Iufoje post la plonĝado, la hetmaneto ordonis al ni:

“Ekde nun ni naĝu al la kontraŭa bordo kaj senripoze revenu ĉi tien. Hej! Ekiru laŭ la ordo unu post la alia.”

Aŭdinte tion mi sentis timon en la koro, verdire por mi estis la unua longnaĝado. Sed kuraĝe mi sekvis post la lasta naĝanto per la ramponaĝo. Tiam mi ne sciis aliajn naĝantojn. Mi nur svingis freneze la manojn kaj piedojn kaj malfacile spirante mi povis apenaŭ alveni al la alia bordo.

Ĉi tie mi ripozis dum kelka tempo kaj ekvidis jen la grupanoj, kiuj estis naĝantaj jam malproksime. Oni ne permesas al mi plian restadon. Senhezite tuj mi sinĵetis en la riveron.

Kiam mi naĝis ĝis la mezo de la rivero, tute neatendite rapidega fluo malhelpis mian antaŭeniron kaj ĝi momente transportis mian korpon laŭ la fluo malsupren. Dum tempeta drivado feliĉe mi povis stari sur la vadejo.

Anhelante mi piediris al la bordo kaj grimpis sur la digon por serĉi la grupanojn.

Nenie troviĝis iliaj figuroj. Mi
 kriis per laŭta voĉo sed vane.
 Nenia respondo. Nur mia voĉo eĥis
 en la profunda valo. Ili jam foriris
 lasante min sola. (daŭrigota)

ちかごろ

- 土よう日の例会では車輪言説(マジョール・アルト)を続けていましたが、ちかごろは SLOSIL-VORTO による作文や絵話をしています。
- ちかごろの木よう日の例会は木曜夫人たちが "LIZA kaj PAŬLO" を手にとりたのしんでおります。
- 月よう日の講習会は、11月で一応終了です。継続講座は同じ場所で1月18日から始まります。ちかごろ、K.S.M からそれぞれ文通相手を紹介してもらって、皆はりまっています。(P)

★ S-ro 辻の "土よう日の緑の丘の懲りない面々" の似顔絵。緑の丘には土よう日以外にも、まだまだ懲りない面々はいるのに、皆ハズカシイです。なあって言ったら、和歌山緑丘会は、内気で、はにかみ屋のウブなヤツが多いからね。エッ? ぶりっこだって? ウ=! ほっという!! ----- ってコトで、今回で一応終了です。又ね。Gis!!

★ 少し早いのですが、今年最終の VERDA MONTETO です。どうぞ、皆様よいお年を! Felican Novjaron!

★ その前に「サマニホ祭」皆様どうぞお越し下さい。Nepre!

★ 会計の牛島さん、どうもご苦労さまでした。来年もよろしく、

★ 投稿お待ちしております。皆様!! (P)

1987年 会計報告

3. 61. 12. 1 ~ 3. 62. 11. 16

収入の部

項 目	金 額	摘 要
前年度繰越	27,838	
会 費	92,000	25 人
図書 還元	6,237	Libroservo
JEI, KLEG.		
会費 還元	7,760	
寄 付 金	43,470	内、相川さんより 切手 2240 円含む
計	177,305	

支出の部

項 目	金 額	摘 要
通 信 費	33,490	切手・送料
事務用品費	61,890	プリント印刷・封筒他
交 際 費	10,000	会館事務所管理人才志
会 議 費	11,080	秋の7祭 茶菓子代
計	116,460	

収入 の部 177,305

支出 の部 116,460

次年度繰越 60,845

和歌山緑丘会会計係 牛島美恵子

ザメンホフ祭

ザメンホフ祭のお知らせ

日時： 12月12日(土) 午後2時~4時
場所： 県職員会館(県庁前バス停下車 県庁北側の道を西へ300米)
当日会費：1000円(茶菓、その他)
テーマ： エスペラントとの出会い
お客様： 奥村 林蔵先生
司会進行： 福本博次さん

★当日会費1000円と、1988年度緑丘会会費3000円(学生・家族は一人につき1000円)は、会場で 会計係 牛島美恵子さん迄お渡し下さい。

緑丘会会費3000円郵送の場合：郵便振替口座 大阪 6-3630
名 儀 和歌山緑丘会

★その他 1988年度 KLEG会費 3200円と
// JEI 会費 4800円は

新規入会、継続 希望の方のみ 牛島さんまで。

★ことしは、Libroservo(図書売り場)は都合で取り止めとなりました。
何時か別の機会に、ゆっくりやりたいと思います。

★自己紹介は、エスペラントで、簡単にやりましょう。

★テーマについての話題は、日本語でもかまいません。

1987年11月

(編集) 前田美

〒640 和歌山市小松原6-1-6

(TEL. 0734-22-8660)

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 45

お く じ	ザメンホフ伝---大谷宏治 ----- 1	会話への第一歩---奥村林蔵 ----- 7
	Momente en la lasta Z-Festo ----- 3	あるニュージランド・エスペランティストの 仏教入信 ----- 前田米美 ----- 10
	VOJAGEME---HASEGAŬA JOSIFUMI ----- 4	会費受取り ----- 11
	Infanaĵ tagoj---TANAKA Masami. --- 6	ちかぞろ ----- 12

ザメンホフ伝

(14)

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat
La kopirajto de la originalo, la
Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

タイトルバック：辻 千早

第4章

エスペラント博士

(つづき)

1887年8月9日、ザメンホフは結婚し、ワルシャワの Przejard 通り9番地のつましいアパートに住みついた。そのアパートで彼は妻と一緒に、各国の新聞社や個人に第一書を送り始めた。妻は宛名や住所を書き、新聞に



広告を出した。そんなふうにな二人の新婚生活の数カ月が過ぎ去っていったが、共有の理想からできたばかりの種をまくことで、自分たちの愛を永遠のものにできる彼らは、幸せそのものだった。

第一書はどのように受け止められるだろうか？ 何の反響も呼ばずに忘れ去られてしまうだけなのだろうか？ 10年間の苦勞の成果に目もくれないほど、人々には見る目がないのだろうか？ そんなふうに思うと絶望的な気持ちになった。 そのような時、信念の炎に勇氣を吹きつけて燃え上がらせるか、それともくだらぬ不平の涙を流してその炎を消してしまうかは、往々にして女性の手に乗ねられているものである。

ひとつ、またひとつと、反響の手紙が来始めた。 質問や助言や賛同、そして熱意のこもった手紙も。 中には早くもエスペラントで書かれているものさえあった。 エスペラントは使われて、生きた言葉になっていたのである。 やがてたくさんの人たちが入会を申し込んできた。 家族的なサークル（ロンド・ファミリーア）が創られた。 ザメンホフの孤独はこうしてふたとおりの形で終わりを告げた。

これからは熱心な仲間に取り囲まれているのだと思うと、 ザメンホフはとてもうれしかった。 エスペラントが今やサークルを創り上げ、やがてひとり立ちしいくだろうと思うと、うれしさはまたひとしおであった。 彼は次のように願っていた。 「著者は舞台から下りて、忘れ去られるべきである。 それから後は、 私が生きていようが死んでいようが、肉体や精神の力を持ち続けようが失ってしまうのが、エスペラント運動は全くそんなことに左右されることはないのだ。 それは生きた言語の運命が、誰か一個人の運命に委ねられるようなことが全くないのと同じである。」

第二書はエスペラントだけで書かれ、1888年の初めに出版されたが、その中でザメンホフは上記のように書いている。 彼は多くの入

会者とは、一個人として文通を続けた。 しかしその文通で同じことを何度も何度も繰り返して言わなければならなかった。 そこで一冊の総括的な冊子の形にして自分の考えをまとめて返事したのである。 [註] エスペラント博士著「国際語第二書」第1版、ワルシャワ、1888年（1月18/30、検閲済）。

「人類に対する私の深い信頼は、裏切られることはなかった」と彼は序文に書いている。

「人類の持つ優れた天分が目覚めたのだ。 全人類の仕事を成し遂げようと、あちらからもこちらからも、老いも若きも、男も女も、自分の石を担いで駆けつけ、重大なそして実に有用な建物を造り上げようとしている。」

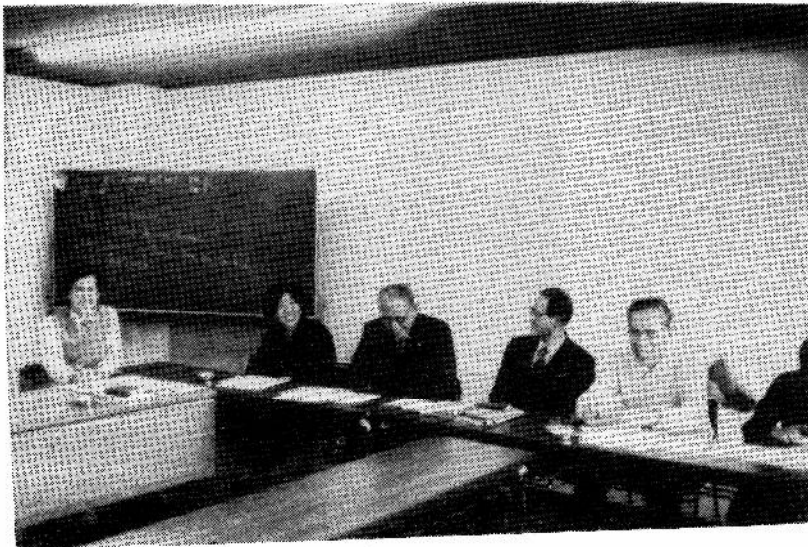
新しい仲間たちは、ザメンホフとばかりでなく、自分たちの間でも文通し合った。 アントン・グラボフスキーはすでにゲーテやプーシュキンの作品を翻訳していた。

1889年10月に、世界各国1000人の名前が載った最初の住所録が刊行された。「エスペラント博士の創った言語」は、一般の人々がそう言い慣らしている間にやがて、単に「エスペラント」と呼ばれるようになった。 ニュールンベルグではレオポルド・アインシュタインとその世界語（ボラビューク）クラブ全員がエスペラントに転向した。 同年彼らは月刊誌「ラ・エスペランティスト」を発行した。 その雑誌には、ソフィアやモスクワでもグループができたことが発表されていた。 国際的な運動が始まった。

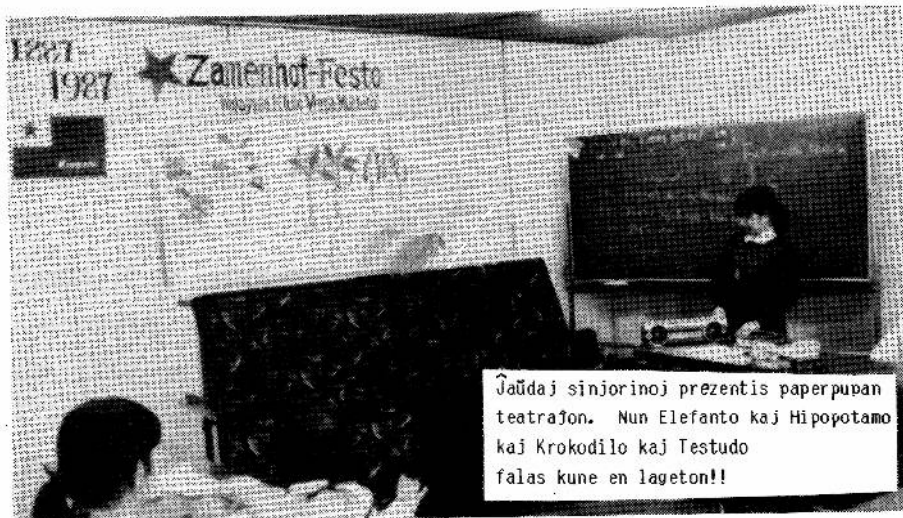
◆前号 (N-ro 44 dec.) 誤字訂正◆			
	誤		正
P. 2 左段 ↓ 3行	malŝa'ig'o	⇒	malŝan'ig'o
P. 5 左段 ↓ 5行	以前	⇒	依然
P. 5 右段 ↑ 15行	」	⇒	(トル)
P. 9 右段 ↑ 12行	vizagon	⇒	vizaĝon

★ Momente en la lasta Z-Festo ★

En la 12a de decembro, 1987
 Ĉe unu ĉambro de Wakayamaken Ŝokuinkaikan
 Ni okazigis Zamenhof-Feston
 Kun 17 ĉeestantoj kaj
 La invitita gasto S-ro Okumura Rinzo.



S-ro Okumura parolis:
 "Nun ni suferas pro
 la multaj neologismoj,
 Sed tio estas
 samtempe riĉiĝo de Esp.
 Kaj tio kreskis ĉefe dank'
 al la peno de eŭroopaj
 samideanoj.
 Dume japanaj kaj aziaj
 Esperantistoj
 Ĉiam restis tanin-makase.
 Do, ni devas strebi
 enkonduki
 novajn taŭgajn vortojn
 por taŭga esprimo je enhavo
 kaj je nuanco
 ĉe la multflanka homa vivo
 en la marŝanta mondo."



Ĵaŭdaj sinjorinoj prezentis paperpupan teatraĵon. Nun Elefanto kaj Hipopotamo kaj Krokodilo kaj Testudo falas kune en laĝeton!!

VOJAGNE

MI VEKIĜIS
MALFRUE,
SED NE GRAVAS!

(寝すごしても、心配ないよ！)

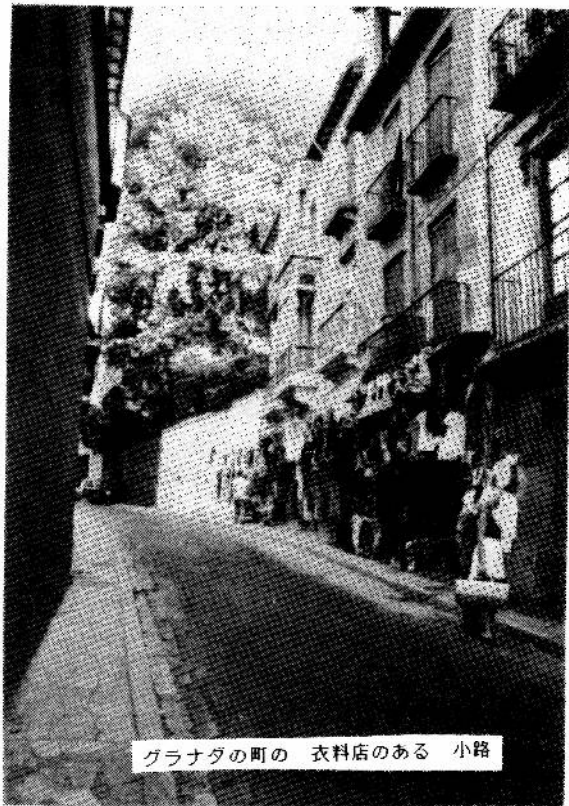
HASEGAŬA JOŜIFUMI

la 27an de Aŭgusto, 1975

Hieraŭ la mastrino de "Sevillana" pruntedonis al mi vekhorloĝon, ĉar morgaŭ mi devis vekigi je 5:00 matene. Tamen matene, mi tute ne aŭdis la sonon, kaj mi vekigis je 6:00. Mi surpriziĝis, ĉar la trajno al Madrid ekiros je 7:00 de Toledo. Mi devas iri piede al la stacio Toledo. Mi preparis min tre rapide.

Ekstere estis ankoraŭ maflume. Mi atingis la stacion je 7:10. Mi esperis, ke la trajno malfrue ekiru. Hispanaj trajnoj ofte ekiras ne laŭ la fiksita horo. Sed bedaŭrinde mi ne povis kapti tiun trajnon. La venonta trajno ekiros je 10:20. Tro malfrue. Tial mi intencis veturi per aŭtobuso al Madrid.

Mi demandis al iu hispanino staranta apud la stacidomo. Laŭ ŝi, mi devis unue veturi al centro de Toledo kaj de tie mi povos iri al Madrid per



グラナダの町の 衣料店のある 小路

aŭtobuso. Ĉe la centro mi denove demandis al iu hispano, kaj laŭ li la aŭtobuso al Madrid ne ekkuros de la centro, denove mi demandis pri tio al alia hispano kaj li respondis pri alia malproksima loko. Ĉe tiu alia loko mi denove al hispanino, kaj ŝi respondis, ke ĝi ekkuros de la centro! Mi tute ne komprenis, kio estas vero, kaj nenie mi povis trovi la aŭtobuson. Mi iris denove al la centro, portante tre PEZAN valizon. Mi ne povis scii, kiu buso iros al Madrid malgraŭ mi

demandis tiel multfoje. Mi forlasis la intencon veturi per aŭtobuso, ĉar jam multa tempo pasis.

Dume, mi fariĝis maŝata. Mi reiris al Fonda Sevillana jam je 8:00. Mi metis miajn valizon kaj sakon tie. Mi foriris de tie por aĉeti 1 litron da lakto kaj panon por matenmanĝo. Restitan lakton mi erverŝis en mian hispanan ledan akvosakon. Denove mi veturis per aŭtobuso al la stacio Toledo.

Finfine post ĉio, mi veturis per TAJNO de 10:20 al Madrid. En la trajno mi parolis kun japanaj novĝedzoj. Ili vojaĝas en Hispanio. Mi enviis ilin.

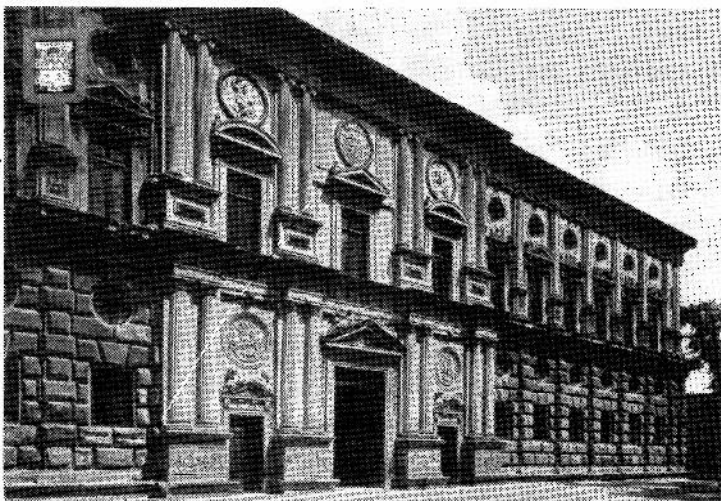
De Madrid mi ekveturis al Granada je p.m.1:00. Tiu tempo estis la plej konvena por veturi al

Granada, ĉar eĉ se mi veturus je 7:00 matene ek de Toledo al Madrid, mi tutsame veturas per ĉi tiu sama trajno al Granada.

La trajno devis atingi la stacion de Granada, laŭ la hortabelo je p.m.8:30, sed ĝi atingis nur je 9:00.

Post la atingo, mi serĉis pensionon

ĉirkaŭ la stacio. La unua pensiono estis jam plena. Pensionoj estas malmultaj ĉirkaŭ la stacio, tamen mi trovis tranokteblan pensionon. La pensiono "Los Carmenes" ne estis bona. En la kuveto de mia ĉambro akvo el krano ne elfluas. Precize dirite, la akvo elfluas tro malmulte kaj malrapide. Kiam mi eliris de tie por aĉeti panon kaj fruktojn, mi vidis unu japanan junulon sur la strato. Mi iam vidis lin ie en Eŭropo, sed mi forĝesis lin. Mi rigardis lin, kaj ankaŭ li. Li parolis al mi, ke la stacio ekzistas ne en la centro de la urbo Granada, kaj ekonomiaj pensionoj estas multaj en la centro. Li gvidis min en la centron. La loko estas tre pompa. Mi senĉos alian pensionon morgaŭ ĉi tie.



アルハニブラ宮殿

Infanaj tagoj

TANAKA Masami

Miljaraj kripomerioj dense staras ĉirkaŭ la valo kaj ombas la lokon, kie mi ripozas. Sunlumo ne atingas ĝis ĉi tie, malvarma vento preterpasas preter mia korpo senvesta. Fore vidiĝas la stranga faŭko de la kaverno apud la akvfalo, kaj sur la abismo kelkaj sovaĝanasoj estas naĝantaj. Krom la tondrado de la akvfalo estas nenia bruo.

"Ken, ken, ken!" Abrupte strikta ekkrio de birdo venis al miaj oreloj kaj tiam mi sentis harhirtigan timon je la koro kaj ekhavis la penson eskapi el ĉi tie kiel eble plej rapide.

Apenaŭ detenante sin ekplori, mi kuris haste al la grupkolektejo, elektante pli malongan vojon laŭlonge de la riverbordo. La vojo estis ŝtonriĉa; grandaj kaj malgrandaj ŝtonoj malhelpis miajn paŝojn, do mi provis transsalti de la ŝtono sur la alian ŝtonon, kaj feliĉe kelkajn fojojn mi sukcesis, sed kiam mi provis salti iom longan distancon, apenaŭ atingis sukcese sur la ŝtonon kaj iu nekonata forto kaptis min je la piedo, pro kio en sekvanta minuto mi falis sur la ŝtonon tiel

fortege ke mi havis kapturniĝon kaj sentis fulmon el la okuloj.

Agrabla vento kun bonodoro karese blovdas sur mia vizaĝo. Mi estas dormetanta en la hamako. Proksime aŭdiĝas susuro de rivereto kaj pepadoj de birdoj. kiujn mi kutimiĝas ĉiutage aŭdi. Apud mi staras la patrino, kiu malaperis for de mi. Ŝi kantis lulkanton kun ĉarma voĉo. Profundiĝas mia dormo pli kaj pli.

Frapite de egaj pluveroj akompanataj de fulmtondro, mi malfermis la okulojn kaj ekvidis nebulon ke mi estis kuŝanta sur la ŝtonego, tute malsekite, de la verto ĝis la piedpintoj.

Mi ekstaris kun kapturniĝo kaj senprokraste hastis serĉante al la grupo en la duŝa pluvo.

Baldaŭ furioza pluvego ĉesiĝis kaj sunlumo ekbrilis el la nuboj. Mi alvenis fine al la grupanoj, kiu estis absorbitaj de la fiŝkaptado kaj neniu rimarkis min, kiam mi ariĝis al la grupo kaj mi inter ili miksiĝante estis ludanta.

Plej poste mi eksciis post la dua mondmilito, ke oni konstruis ĉi tie hidraŭlikan elektrejon utiligante la riveron, kie ni, infanoj de la monta vilaĝo, ĉiam amuzis sin per naĝado kaj fiŝkaptado dum somero.

Pri la konstruopiano la vilaĝanoj persiste batalis kontraŭ la ŝtata

potenco por konservi la karan naturon hereditan de la prapatroj. La tenaca batalado daŭris longan tempon, sed finfine la vilaĝanoj devis retiri sin el la aŭdaca perforto de la ŝtata potenco.

Ĝis la fino de mia vivo mi neniam forgesos la karan nomon de la rivero "Ĉikugo-Kaŭa" kaj la nomon de la akvelektrejo "Ŝimouke-damu". Kiu detruis la naturon kaj rabis la trezoron de la monta vilaĝo.

Mi tre bedaŭras vidante la fakton, ke ĉie en nia lando amataj multaj naturoj nalaperas unu post la alia. Belaj marbordoj kun pinoj kaj blankaj strandoj, belaj verdplenaĵoj transformiĝas al fabrikoj kaj aliaj. Ili neniam reaperigus sin antaŭ ni kiel originalan figuron de amata naturo.

(daŭrigota)



会話への第一歩

奥村 林蔵

① 赤ちゃん式繰り返し キーウ・ヴィ法
赤ちゃんが日本語をおぼえるのに、どうするでしょうか？

「まりちゃん、おとし いくつ？」

「.....ふ・た・つ」

「ハイ よろしい。まりちゃんおとしいくつ？」

「.....ふたつ」

「よくできました。まりちゃんおとしいくつ？」

「ふたつ」

「たいへんよく出来ました。まりちゃんおとしいくつ？」

「ふたつ!!!」

「パチパチパチ (拍手)。では次、まりちゃんおなまえは？」

こうして、これを毎日やるわけです。そうして赤ちゃんは、自然と会話の流れを体におぼえてしまうのです。

エスペラント会話も、これを実行しようというのです。

さて、こんどは、話しかけ手も 答える方も 赤ちゃんです。

「Saluton, Kiu vi estas?」

「.....Mi estas.....Takahaŝi Ĉieko.»

(チエコ・タカハシなどと ひっくりかえしては いけませんよ。そんなこと考えてる間に 会話の流れが途絶えてしまいます。あたり前に順序そのままにおっしゃってください。)

「Bone, Kiu vi estas?」

「Mi estas Takahaŝi Ĉieko.»

「Tre bone, Kiu vi estas?」

「Mi estas Takahaŝi Ĉieko.»

「Tre tre bone. Kiu vi estas?」

「Mi estas Takahaŝi Ĉieko.»

あんまり同じことを繰り返して 嫌になったら、ちょっと変化をもたせましょう。

「Kiel vi nomiĝas? (名前をいふの?)」

「Mi nomiĝas Takahaŝi Ĉieko.»

こんなの時折はさんでください。または傍の物、傍の人を指さして、

「Kio ĝi estas?」でも、

「Kiu ĝi estas?」でも。

答える方の赤ちゃんも 同じ答えをさせられては嫌になります。相手が口ごもった時、息をふと止めたとき、パッと打ち込んでください。

「Mi estas Okumura Rinzo. Kaj vi?」と切り返して「Nu, Kiu vi estas?」と反撃する。

相手は あわてて、

「Mi estas Takahaŝi Ĉieko」と きます。そしてら さっと第二打、

「Tre bone. Kiu vi estas?」

つきつき第二打、第三打をうち込んでゆきなさい。油断すると 又相手から打ち返されますよ。

同じ質問、同じ答えとなると気がらくになって、余裕が出てきます。ちょっと言葉を挟む余裕が自然と生れます。

「Mi estas Okumura Rinzo, kiel vi jam scias」とか、

「Kiu vi estas, sinjorino?」とか、

「Nu, kiu vi estas? mi petas.」とか。

二人寄ったら 必ずこの赤ちゃん式 Kiu vi 法を やってみてください。三人寄ったら、右の人へ、左の人へ、三つ巴で舌戦をくり広げてください。耳にたこの出来るほど、飽いてゲップの出るまでに。

こうして体で会話の流れを覚えます。

Ki--とくれば、Mi- と答える、ツ-と言えばカー とくるように。

② 各国語、原語併用ブリッコ法

「Kio ĝi estas?」

「.....」品物のエスペラント名が出て来ないので、目を白黒。

「Ĝi estas ナニ」と答えたいのだが、ナニナニが出て来ないので、「Ĝi estas」も出て来ない。

会話の本流は「Ĝi estas」というところなので、枝葉末節の一単語にかかわって、会話の本流を捨ててはいけません。まずはともあれ、「Ĝi estas」と言っておきます。そして考えます。品物の名は一思い出せなかったら、或は 知らないかもしれません。日常よくあることです。ちょっと心配すること

ありません。ゆうゆうと、堂々と答えてください。

「Ĝi estas, mi forgesis.」

「Ĝi estas, mi ne scias.」

これで 堂々たるエスペラント会話です。立派な答です。見事な対応です。単語一つより この方が何十倍か上位です。

といっても、いつもいつも mi forgesis, mi ne scias では つらいですね。そのときは名案があります。原語そのまま借用するのです。

平常よく使ってますね。センス(扇子ではありません)とか、フィーリングとか リフォームとか リッチとか テンポとか。日本語の中へ英語を入れたり フランス語を入れたり スペイン語を入れたり、そしてちょいと気取って ナウいブリッコをまねます。混合して入るときもあります。カラオケ(空桶、いや唐桶でしょうか)。この ちょいとしゃれた プった流儀で エスペラントの中へも原語のまま借用してゆくのです。

日本語を入れるなんて最高です。

「Kio ĝi estas?」

「Ĝi estas ringo.」

「Bone, Kio ĝi estas?」

「Ĝi estas oiŝisoono orenĝi.」

上出来です。とくに oiŝisoono と語尾に形容詞語尾の a がついて ちゃんどエスペラント式になってるではありませんか!!

(テレビでも今「私このごろ主婦してます」なんてエスペラント式造語、語尾 -iĝ- を使ってますね。)

そして この方法で赤ちゃん繰り返し方法をやってください。二人でも三人でも、エスペラント会の席で、みんな揃うまでの時間つぶしに、又 帰途肩を並べて歩くときに、ショッピングの途上で。





③ひとりごと質問チューネ法

相手のある時は、前記のように。Kiu -とくれば Mi - と、Kio -とくれば Ĝi - と、口が、舌が動いてしまうように。

では もし相手のないときは？ そのときはチューネ法を使います。

相手があっても使えます。相手が 에스ペランティストでも、Ne-エスペランティストであっても、生き物でも品物でも。全く便利な方法です。自習法でして、ひとり言で相手に話しかけるのです。

「Vi estas manaita, ĉu ne?」

「Vi estas hooĉoo, ĉu ne?」

「Vi estas reizooko, ĉu ne?」

「Vi estas uĉino-kuroneko, ĉu ne?」

「Vi estas boro-zitenŝa, ĉu ne?」

何でもかんでも ĉu ne と質問するのです。

「Anata! Vi estas uĉino-danna, ĉu ne?」

「Sugu gohanjo, ĉu ne?」

一切合財 ĉu ne?です。そして又 その返事も自分でしてください。

「Jes, mi estas hooĉoo」

「Jes, mi estas boro-zitenŝa」

自然と口になめらかに つかえずに出てきます。そしたら 余裕ができて来て、ときおり形容詞が入られます。

「Vi estas keeki, ĉu ne?」

「Jes, mi estas tre oiŝii keeki。」

「Vi estas tute boroi zitenŝa, ĉu ne?」

昔、緑丘会の若い頃、一人のチョビひげの青年がいました。そして 家の人、町内の人にいつもあいさつしました。

「Bonan tagon, Mari-ĉan, ĉu ne?」

「Vi estas Mari-ĉan, ĉu ne?」

「Vi estas infano, ĉu ne?」

「Kore asagohan, ĉu ne?」

「Vi estas otonarino hundo, ĉu ne?」

「Ohajoo-san, ĉu ne?」

町内の子供達、彼を称して チューネのおじさん。今、堀田健蔵氏は厚木市に健在です。

体得

むかし私が ふと Ne, mi dankas (いいえ結構です) という句をならいました。いつか使ってやろうと思ってましたら、OES (大阪エス会) が、奈良へエクスクルソしまして、飛火野で休憩したとき、fraŭlino三品さんが私にりんごを1つ差出して「どうぞ。」ここだ!! と思った私は、

「Ne, mi dankas!」

と立派に堂々とやりました。この Ne, mi dankas の一句は、それ以後いつでも 私の口から なめらかに出て来ます。体験、体得ですね。唯、心残りの一事は 折角 fraŭlino の下さろうというりんごを一つ 貰いそこなったこと、千載の痛恨事です。

あるニュージランド・エスペランティストの 仏教入信

Daĉjo (ダヴィド・マクギル さん)の
教音な履歴

前田 米美



1984年6月 京都の KLEG 大会
分科会『外人エスペランティストを囲んで』に
一役 David MacGill さん

Daĉjo は、David の Da をとって、『ダーちゃん』の意味。-ĉjo は男性の愛称です。初めて和歌山市へ来られたのは、1983年1月ごろ。いつものように緑丘会員が紀の国会館で歓迎の夕食会をいたしました。国内大会や、世界大会でもよくお見かけしますし、また緑丘会員のために、いろんな学習用テープを送ってくださっています。

仏教徒らしく、いつも物静かにエスペラントで話されるので、賑やかな大会場などでは、よく聞き取れないくらいでした。奥さんを失い、年金生活で、今京都の鞍馬山の山奥の修道院の中に小さな家を建てて暮らしておられます。

今、欧米でも仏教の研究熱が盛んなようですが、エスペラント界でも、日本仏教徒エスペランティスト連盟 (JAPANA

BUDHANA LIGO ESPERANTISTA)がエス文『仏教聖典』の発行を本年中に完成しようとしています。Daĉjoもその有力メンバーのひとり。昨年の11～12月号の会誌 (N-R0 225)を眺めていたら、MIA BUDHANIĜO と題する彼の入信物語が載っていました。投稿はご自分の全生涯にわたる長い自叙伝のようですが、会誌にはその後半の主として Esp. と仏教入信に関する部分がとりあげられています。編集のいそ部晶之助氏と、ご本人とのご承認を得て、ここに紹介させていただきます。

(編集者のまえ書きより)

彼は、スコットランドに生まれ、5才の時、母親といっしょにニュージランドに移住しました。スコットランド讀りがつよくて、まわりの子供達は彼をのけものにしましたので、彼の子供時代は、動物と遊ぶのが好きでした。奨学金をもらって、大学に学び、戦争中は、ある種の軍事無線通信機器の仕事をし、後、民間航空局で働きました。

私の仏教入信

戦争中のこの頃、私は、ある女性と出会い、この女性と結婚することになります。彼女は、神の姿を見ることができるとする神知論者 (teozofa) で、エリントンにあるその集会場へ、私も行くよう勧めました。そこに大きな図書館があって、本が借りられるのです。大抵宗教のものばかりで、私は、仏教の本を一冊引っ張りだしました。

Mi estis nominala kristano, sed vere ne havis religion dum multaj jaroj. Tio okazis, kiam mi estis knabo ĉe Oakura, mi estis inter multaj fundamentaj kristanoj, kiuj kredis, ke la Biblio estas laŭlitere vera, tial Dio kreis la universon antaŭ nur proks. 6000 jaroj, ie en la mezoriento. Eĉ tiam mi scilis, ke la scienco postulas multajn milionojn da jaroj por klarigi la geologian rekordon.

進化論については私も、科学理論として、宗教教義と同じくらい、信じていました。同じ年ごろの子供と遊ぶよりも、動物と仲良しになるのが好きでしたから、動物との関係を説く学説の方に強くひかれました。まわりの大人たちは言いました。進化論は、バイブルに反する、だからクリスチャンは、それを信じることはできないと。

(後になって、クリスチャンでありながら、進化論を信じ、それでなんの不都合も感じない人に、たくさん出会いましたけれど。) こうして、人々は私を進化論から遠ざけようとして、かえって私を宗教から遠ざけてしまったのでした。

こういう経緯 (いきさつ) があって、私は神知論者の図書館で初めて仏教と出会ったのでした。最初感じた事は怒りでした。それは、こういう事を何年も私に隠していたこと、その間、これを知っていたら、私はもっと変わった

成長をしていだろうと思っただけでした。仏教のことは私の母は知ってはいましたが、私がクリスチャンでいてほしかつたので、私には隠していたようです。仏教の本を読み進むうち、私は Theravada (南伝仏教) に属するということがわかりました。というのは、その本には宇宙の創造のこととは書いていなかったからです。察するところ、もしブッダが専門用語を使って、説かなければならぬとしたら、こういったでしょう。宇宙の存在ということは、科学者の研究分野であって、宗教家のものではないと。宗教と云うのは、自分の「心」にどう立ち向かうかという事を考えるべきです。(ただ仏教では、クリスチャンが考えているような意味での「心」は否定しています。この逆説の説明を望まれる方は、お手紙下さい。私の出来る範囲でお答えいたします。)

Tiutempe mi kredis, ke mi estas la sola budhano en Nov-Zelando, ĉar la teozofistoj, kvankam ili studis budhismon, ne estis budhanoj.

Sed unu el ili diris, ke la Honorinda W.E. Barnard, iama Prezidanto de la Supra Ĉambro de la Parlamento, helpos min, se mi skribus al li.

Do mi skribis, kaj inter aliaj aferoj li donis al mi liston de libroj, kiujn mi devus legi. Mi kunprenis tion al la Nacia Biblioteko kaj povis pruntepreni la libron.

一方、私の家内は、身心共に病んでいましたが、医師の診断を拒否しました。彼女は、ありきたりの医学には全然信頼感を持っていなかったからです。子供達の世話もできなくなり、遂には私にも我慢ができなくなって、親元へ帰っていきました。親元では彼女を病院に入れましたが、まもなく亡くなりました。葬式のあと、私は子供達の新しく住む家を考えてやらねばなりませんでした。民間航空局に3年勤めたあと、私は特許事務所に転職し、そこで電気関係の Patent 申請の審査の仕事をしていました。この仕事はほんとうに私に向いていて、この事務所では退職までありました。私がエスペランチストになったのはその前で、オクラホダの入学で勉強していたころでした。

戦後、テープ録音の技術が一般に解放されました。戦争中ドイツ人がそれを完成していたのですが、占領した連合軍はそれを見付け、本国に持ち帰ったのでした。私はすぐそれがエスペラントに役立つと見て、懸命にテープ録音の勉強をし、プログラムをつくり始め、そのうちのいくつかは、今でもコピーをして方々へ送っています。

1965年、私は(東洋では初めての)東京の世界大会に参加するため、他の16人のニュージーランド人と一緒に日本に来ました。

(つづく)
おとす

Da ĉi ĵoから録音会に贈られた sonbendoj のリスト:

- ① La Rakonto de Miminaŝi Hoiĉi, La Rakonto pri Aojagi.
- ② Sub la Tranĉilo. Okulvitroj - Misteraj helpiloj. La Domo kun Ŭraj Fenestroj. Ĉu vi povas kalkuli?
- ③ La Afero ĉe la Ponto de Strigo Rivero. La laŭta Vekhorloĝo. Esperanto-Marŝo. Homo.
- ④ Ludvik Zamenhof, Anglalingva. Scola Cantorum de la Barcelona Universitato.
- ⑤ Oka Libro de "La Lumo de Azio". Ĉu vi povas kalkuli? Poemoj.
- ⑥ La Vojaĝo de la Maorioj. Esperanto-Marŝo. Wiki Puketapu kantas. Miŝo Zdravev kantas.

◆ 1988 年度会費ありがとうございました。

(略敬称)

上中 幸子	牛島美恵子	江川 治邦
大谷 宏治	岡垣内 匠	亀井 幸枝
木下 政和	小林さちえ	酒井 利子
高橋千恵子	田中 正美	辻 千早
藤井 一郎	藤井 梅子	西原未佳子
長谷川好史	福本 博次	藤木みどり
舟尾 公男	前田 米美	松下 亨代
松下 弘幸	松下 正行	宮本 勝正
山野 晴美	吉富 相子	
novuloj		
金村 清子	唐妻 尋子	楠見 悦子
小林充佐子	杉浦 真実	鈴木 政子
辻本 文昭	辻本 旬子	久田よしみ
福本 信子	前田 弘子	宮本 浩子

(若し渡れておりましたら、厚くお詫び申し上げます。前田 または 牛島 までお知らせください。)

◆会費(1988年 3000 円)払込は
郵便振替をご利用ください。

郵便振替口座番号 大阪 6-3630
名 簿 和歌山録音会

ちかごろ

- 土曜例会は、今年1月から、Korte作“SAVO EL LA NEGRO”を読み始めています。大へんやさしい遭難記で 77ページのうち もう30ページまで 読みました。

(1月23日)

〔 第二次世界大戦で 孤児となった Josefは、アメリカに住む 叔父夫婦の招きで、乗った飛行機が どこかの雪山に 墜落。たったひとり、深い雪の中で生きのこるために、岩窟の中で がんばります。 〕

- 木曜夫人のうち、今まで 自宅を会場に 提供して下さっていたお二人が 孫さんを 預ることになり、今後の運営を 検討中。

Teksto は ポーランドの Ĉu vi parolas Esperante?

- 月曜継続講座 は 昨年の初等講座の方 殆んど全部が出席して 1月18日から 開始。

ヨーロッパのスライドを見ながら 今 数詞の勉強中。会場は 持ち寄り。会場の お世話は もう木曜夫人に お世話をかけないよう、自分たちで 交代してやることに。

★ 受講生の一人は こう話しています。

エス語を書き始めて数ヶ月、それぞれ生活ペースに合せての勉強です。休みの多い人、頑張っている人、それなりの目的をもつエス語に 習せられています。大きな出来事は 初めての エス語文通です。先生や先輩に助けられながら出した エメール。各国の美しい切手と共に届いた返事の 嬉しい事と言ったら、この上もありません。文通を通じて、 復習、実習を おり混ぜて、苦しみながら 楽しんでいきます(?) -----。

- いずれの kunsido にも お出にならない方、Kiel vi fartas?
たまには letero や telefono など、atendas.

(会計) 牛島美恵子さんの adreso と telefonnumero :

(adreso) 〒640 和歌山市孤島 65-12 Tel. 0734-55-1088
(ただし、昼間は) 0734-33-3791

1988年2月

(編集) 前田米美

〒640 和歌山市小松原 6-1-6

TEL. 0734-22-8660

VERDA MONTETO

Redaktita ĉe MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 46

も く じ	ザメンホフ伝 — —— 大谷宏治 ———— 1	Infanaj tagoj — TANAKA Masami — 6
	VOJAGEME — —— HASEGAŬA JOŠIFUMI — 4	あるニューズランド・エスペ란チストの仏教入信 — —— 前田米美訳 ———— 8
		Krokodili — 前田米美 ———— 9

ザメンホフ伝

(15)

原作：エドモンド・プリヴァ
 翻訳：大谷宏治
 タイトルバック：辻 千早

第4章

エスペラント博士

(つづき)



"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat
 La kopirajto de la originalo, la
 Esperanta eldono, apartenas al:
 THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.

同時にザメンホフ博士は色々な事情で苦しんでいた。病院の方はいまひとつはやらなかった。彼は義父から本の出版費用をもらっていた。しかし、生活費にまでも援助を受けられなかった。なんとかして生活費を自分の力で稼ぎたいと思っていた。すでに二人の子供アダムとソフィアが生れていた。妻はコブノの実家に戻っていた。一方この若き眼科医は、もう一度別の土地で開業しようとしていた。

黒海のほとりのヘルソンという町で精一杯努力したがうまくいかなかった。1890年3月には夫婦二人でワルシャワに戻ってきた。

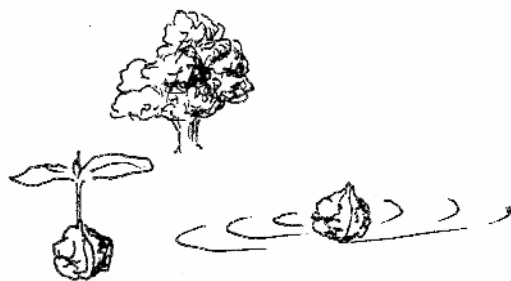
ワルシャワでザメンホフは、同志たちの要望に応じて、ラ・エスペ란チストの刊行を引き受けた。貧しい人がほとんどで、購読料を払

えたのはわずか100人にすぎなかった。まもなくザメンホフは完全に行きづまってしまった。妻子を抱え、非常に苦しい生活を送っていた。ちょうどその時、彼が心の底から愛してやまない母が、重い病の床についた。苦しくて、彼は胸がはりさけそうだった。何もかもが真っ暗で絶望的に思えた。運命は愛する母と、生きがいの国際語とを取り上げようというのだろうか。自分がいなくなっても、エスペラントはうまく普及していくだろうとは思っていた。しかし、中心となる機関誌が発行を中止したら、やがて全ての進展が止まり、しぼんでしまうだろう。「もしも幹が枯れたら、あらゆる希望が失われるでしょう。エスペランチストに引き受けてもらわなければなりません……。私はもうこれ以上続けていくことはできない段階にきてしまいました。」と彼は最後の呼び掛けを書いた。

その時、ザメンホフのこの言葉を理解した、この上ない気高い心を持った友人が現われた。その友人とは Vestfalia の Schalk に住む、勤勉で、控えめな測量技師 W.H. トロンペーターであった。彼は初期の頃からのエスペランチストで、ザメンホフの偉大さと、その目的を理解していた。人類にとって、かくも重要なエスペラント運動の全てが、大海に浮かぶ小さなくるみの実のように漂っていた。ちっぽけで、力もなく、名もないくるみが、もしも小さな波に溺れてしまったならば、世界はその存在さえも知らずに終ってしまうかもしれない。しかしもしも生きのびたら、その小さなくるみからいつの日かすばらしい木が生い茂り、仲良く手を取り合った人々の上に慈しみの葉を広げることだろう！

『救おう、くるみを！』とトロンペーターは

決意した。自分の給料の残りを全部差し出す。金持ちではなかったが、雑誌を3年間継続できる一定額を匿名で寄付した。編集者のもとに彼は毎月100マルクを送った。1894年までののちは保障された。「トロンペーターさんがいなかったら、私たちの仕事は全く存在していなかったでしょう。それなのにトロンペーターさんは、自分のことは何も触れず、お礼の言葉さえ求めませんでした」とザメンホフはプロ・ニュー・スル・メールの大会で話している。トロンペーターはとても信念の強い誠実な助言者であった。天才を助けるためなら、自分の生活費の一部さえも犠牲にするのを厭わない、たぐいまれな人たちがいるが、彼もそういう一人であった。



こうしてザメンホフは3年間安心して仕事を続けることができた。しかし新たな不幸に彼は打ちのめされた。1892年8月に最愛の母が亡くなったのである。やんちゃ坊主の彼を育ててくれた母、少年の頃には頭をなでてくれた母、彼を思いやり深い優しい人柄に育ててくれた母は、今亡くなってしまったのである。彼の受けた心の痛手は癒しようのないものであった。1894年には再び、財政問題に苦しめられた。幼い子供たちを連れて、ザメンホフ博士はグロドノに引っ越しをしなければならなかった。

5年間彼はそこで暮らした。大変な喜びと苦しみが彼を待ち受けていた。若い時ザメンホフはトルストイの新しい作品を熱心に読んだものだった。その偉大なロシア人は、今や世界中にその名声をとどろかせていた。彼は妬みや暴力に抵抗することを人々に説いた。気高い口調で全人類に愛と友好を呼び掛けた。輝かしい小説家としての業績を持っていたその金持ちの伯爵は、ザメンホフが子供の頃から抱いてきたのと同じような理想に転進してきたのである。トルストイは貴族階級を見捨てて、質素な生活に入っていった。村人たちは彼の友達になった。彼は国と国、教会と教会の間の憎しみ合いを咎めた。

ピアリストックの控え目なザメンホフの人柄と、これほどまでに酷似した考えを持った人が他にいるだろうか？心こまやかで控え目な人柄のため、ザメンホフはトルストイに自分の考えを押し付けることができなかった。トルストイに対しては、1888年に、他の人と同じように国際語のパンフレットを送っただけだった。返事は来なかった。しかし種はまかれていた。6年後にその種は芽をふいた。人民ロシア出版社「Posrednik」がエスペラントに興味を持ち、その有名な思想家に意見を求めたのである。「6年前にエスペラントで書かれた文法と辞書、そしていくつかの記事を受け取りました。2時間もたたないうちに、書くことは無理にしても、読むことはできるようになりました……。私は人々がただ物質欲のために、お互いに解り合えず憎しみ合っているのを何度も見えています。エスペラントを学習し、それが広まっていくことは、疑いもなく、人間生活の唯一最高の目標である神の国建設を促す、キリスト教徒の仕事であります」とトル

ストイは答えている。(Fasnaja Poljana, 1894年4月27日)

この言葉は大きな励みになった。トルストイの手紙は「ラ・エスペランチスト」に掲載され、熱狂的な反響を呼んだ。少し遅れて、1895年の第2号にはトルストイの「信仰と理性」の抄訳が載せられている。そのため、ロシア当局はロシア国内でのラ・エスペランチスト誌の出版活動に圧力をかけてきた。これは大変な打撃であった。というのは、購読者の大半がロシア国内に住んでいたからである。出版活動は中止を余儀なくされた。巨象のような権力が、一匹の小さな蠅を踏み潰したのである。こうしてエスペランチストたちの間の絆が断ち切られてしまった。悲しみと暗闇がエスペランチストグループを包んだ。一方ザメンホフはまたもや生活苦にあえいでいた。幸いなことに、他の土地にまかれていた種が芽をふき出した。同年の12月にはもう「リングヴォ・インテルナツィーア」が出版されていた。これは、ウプサラ・エスペラント・クラブがスウェーデンで出版したものである。その時からエスペラント運動はもう二度と歩みを止めることはなかった。

緑丘会員 松下正行氏 御逝去

元新宮市三輪崎小学校長、あだ名「太地の藤」
去る2月6日午前7時、心筋拘束で亡くなられました。67才。謹んでお悔やみ申し上げます

緑丘会員 畑中 弘氏 御逝去

元 和歌山市立河北中学校教諭、
「和歌山もかしむかし」エス訳同人の
一人。去る3月21日、脳溢血のため
亡くなられました。53才。
謹んで哀悼の意を表します。

VIAGRO

MI POVIS PAROLI
HISPANAN LINGVON
IOMETE?

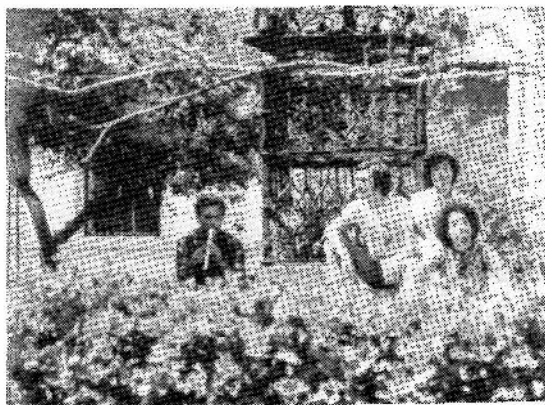
HASEGAŬA JOŜIFUMI

la 28-an de Aŭgusto, 1975
Matene mi ŝanĝe transiris al alia
pensiono, "Hostal Continental", en
la centro de Granada.

La nova tranoktejo estis mezklasa,
sed ŝlosilo de la ĉambro ne funkciis,
kaj plie mia ĉemizo estis iel ŝirita
de serura angulaĉo.

Mi volis duŝi min, kaj la mastrino
anoncis al mi, ke la varma akvo eliĝis
nur 5 minutojn. Sed mi povis
uzi varman akvon sufiĉe longtempe,
ĉar, kiam la varma akvo ne eliĝis
post 5 minutoj kaj malvarma akvo
eliĝis iom da tempo, sed poste varma
akvo denove eliĝis!

Tage mi vizitis la faman "Palaco
alhambra". Mi pagis 70 pesetojn kaj
ĝi estis tre malmultekosta, ĉar la



palaco estis tre bela kaj mirinda.
Mi multe fotis.

Fine de la turismo, mi vidis japanan
junulon, kaj ni parolis. Li venis por
studi pentrodarton en Eŭropo. Hodiaŭ
mi vidis multajn aliajn japanajn ge-
junulojn, sed li ne estis banala junulo
laŭ mia sento.

Mi kun tiu japana junulo interkonsen-
tis iri al la vilaĝo de cigano "Sacro-
monte". Sed ĝi ne estis bela, kaj ni
atendis vesperiĝon sur la monto longan

tempon por foti. Sed ni ne povis foti bonan. Kaj ni manĝis en restoracio. Manĝi en restoracio por mi okazis post longa tempo de post en Parizo.

la 29an de Aŭgusto, 1975

Matene mi veturis per trajno al Sevilla. Mi planis antaŭe resti 2 tagojn en Granada, sed mi ŝanĝis la planon resti tie nur 1 tagon, ĉar hieraŭ mi vizitis jam ĉefajn lokojn en la urbo Granada. Kaj mi vizitos Sevilla kaj Cordova po 1 tago.

En la trajno mi sidis kun iu alia japana junulo. Li venis de Japanio en la lasta jaro, kaj li lernas anglan lingvon en Londono. Laŭ li la regionon Ŝikoku en Japanio atakis granda tajfuno, kaj multaj homoj mortis. Mi tre timis ĉu mia familio estas sendanĝera. Mi volis telefoni kaj scii pri mia familio. Nia trajno atingis la stacion Sevilla posttagmeze. Mi elvagoniĝis ĉi tie, sed la japana junulo ankoraŭ veturos plu al Cordova.

En Sevilla mi devis denove ŝanĝi trajnon por proksimiĝi al la urba centro. Kaj en la nova trajno mi parolis kun unu hispano. Ĝeneralaj hispanoj ne komprenas anglan lingvon,

do, mi alparolis al li en ĵus akirita hispana lingvo. Dum ĉi tiu vojaĝo mi fariĝis iom kapabla paroli hispanan lingvon, ĉar tio feliĉe tre similas al Esperanto, kaj plie mi havis simplan kelklingvan konversacian gvidlibreton.

Mi donacis al li japanajn poŝtmarkojn.

Post la elvagoniĝo, mi serĉis pensionon. Sevilla tage estas tre varmege. Post iom da tempo, mi trovis "Camas"* tamen bela. La nomo estas "Orellana". Sevilla havas multajn arbojn de oranĝo kaj belajn blankajn domojn.

*"Camas" estas unu el la indikoj pri la lukseco de hotelo en Hispanio.

Mi tagmanĝis en restoracio. Ĉi tie mi sidis kun 2 hispanaj studentoj. Mi ne sciis kion manĝi ĉi tie kaj vane rigardis la menuon. Do, mi mendis la samajn kun ili. Tio helpis min paroli kun la studentoj. Kaj ni kune iris al la palaco Alcasar, sed ĝi malfermos nur je 4:30 p.m.!

Ĝis tiam ili gvidis min ĉirkaŭ Alcasar. Survoje unu el ili foriris kaj nove 2 aliaj aliĝis al ni. Unu el ili estis tre komika, li estis maristo. Kaj li antaŭe spertis viziti Japanion, do li parolis pri Japanio.

Je 4:30, mi sola eniris en la palacon. Ankaŭ ĝi estis tre bela kaj mirinda. Mi pasigis tie kontentigajn 2 horojn. Post tio, mi revenis al "Camas", ĉar mi devis paki tie miajn serinecesajn vestojn, ŝuojn kaj librojn por sendi al Japanio. Sed bedaŭrinde la poŝt-oficejo estas malfermata inter a.m. 9:00 kaj p.m. 2:00. Mi sendos ilin morgaŭ matene.

(daŭrigota)



Alcasar を案内してくれた陽気なスペインの若者達
右はしから2人目が船員、他は学生

Infanaj Lagoj

TANAKA Masami

Ĉe la anguleto de la ĉambro kuŝas unu malnova lignokesto, en kiu mi ĉiam enmetas lernolibrojn, skribilojn kaj aliajn necesaĵojn por la lernado. Kiam mi lernas, ĝi servas por mi kiel skribtablo. Ĝi ja estas mia unu sola kara propraĵo. Vespere mi sidigas sur la tatamo, ĉe la tablo rekte (laŭ la severa admono ĉiama de la patrino) sur ambaŭ tibikarno, kaj legas legolibron laŭvoĉe sub la malhela lumo de la oleolampo.

"Legado" estis mia plej ŝatata leciono en la lernejo kaj havis memfieron pri tio, sed longan tempon mi ne devis daŭrigi tion por kiel eble ŝpari oleon. La patro, kiu jam estis en la FUTONO* vokas min "Venu en la futonon apud mi". Kun ĝojo mi enŝovas min apud la patron, kaj atendas hodiaŭan rakonton, kiun li preparolas en ĉiuj vesperoj, pri diversaj malnovaj lokaj legendoj kaj misteroj. Li rakontis ilin tre lerte ĝis mia endormiĝo.

(* FUTONO=litkovrilo kun litkuseno)

Tio okazis en iu tago proksima al

la fino de la somero. Vespere la gepatroj pli frue revenis de la laborejo. dirante ke ĉi nokte tajfuno atakos nian vilaĝon. Ni devas prepari por defendi nin kontraŭ tio. Ili iris tien kaj ĉi tien por firmigi fenestrojn per lignoj. Ekstere jam bruis ventego kaj ĝi fariĝis pli kaj pli forta kune kun pluvego.

La domaĉo tremetis multfoje. kiam ventego frapis fenestrojn. Ni tri nur atendis la forpason de la uragano tute sendorme kaj senvorte. Pasis noktomezo. Pluvego fariĝis pli forta kaj ekstere aŭdiĝis krakado de arboj. muĝego de vento.

Ankoraŭ daŭris forta vento kun pluvego, dume ni aŭdis brueton de pluvgutoj. kiu falis subite en la ĉambron penetrante el la fendoj de la detruita tegmento.

"Tuj, rapide portu kiu ajn ujon" la patro kriis en mallumego. Mi estis tro laca ke mi iam senkonscie kuŝiĝis kaj endormiĝis aŭdante la voĉojn en malproksimeco.

Matenkrepuskiĝis. Venta muĝado jam ne aŭdiĝis. finiĝis pluvado. Baldaŭ trankviliga sunlumo filtriĝis en la ĉambron tra la breĉo de la pordo. Saltetante mi forlasis la ĉambron kaj staris antaŭ la domo kaj turnis la rigardon ĉirkauen. Sur la herbejo kuŝiĝis tapiŝe multaj disŝiritaj folioj

kaj branĉoj de arboj. Dekkelkaj vilaĝanoj jam staris sur la vilaĝa teraso kaj interparolis reciproke pri la lasta ŝtormo.

Jen la montaro ASO majstre elstaras tuj antaŭ ni duone kovrite de nebulo. kiu vaporigis de sur la herbejo. Ŝajnas al mi, hodiaŭa ASO havas apartan freŝegon kaj reĝan imponecon.

Vilaĝanoj ĉiuj bone komprenas kaj neniel dubas kiel bone la montaro kaj oldkriptomeriaro protektis nian vilaĝon kontraŭ ŝtorma atako kaj lasis nin en tre malmultaj damaĝoj. Kvankam la vilaĝanoj parolas malmulte pri tio, tamen ĉiuj estas dankplenaj respektive nur en sia koro. (daŭrigota)



◆ 2月号 (1988年, No.45) 漢字訂正 ◆

	言葉	正
P. 1	左段 ↓ 4行	ツル ⇒ ツル
P. 2	左段 ↓ 13行	立掛く(35) ⇒ 立掛く(35)
P. 5	右段 ↓ 2行	serĉos ⇒ serĉos
P. 6	左段本文 ↓ 1行	kriptomerioj ⇒ kriptomerioj
P. 7	右段 ↓ 4行	nomigas ⇒ nomiĝas
P. 10	左段本文 ↓ 2行	ĝjo ⇒ -ĝjo
P. 10	右段 ↓ 20行	ツリオ ⇒ ツリオ

あるニュージランドイスパランチストの 仏教入信

Daōjo (ダヴィド・マクギルさん) の
教団な遍歴 - 2 -



ニュージランドのイスパランチストの中には、私が肉食主義者であることに不快の念を持っている人達がいるのがわかりました。彼らの言い分はこうです。イギリスがヨーロッパ経済機構に参入した時、ニュージランドはイギリスでの食肉市場を失って打撃を受けたので、そのかわりに、日本での市場を見つけようとやっきになっているこの際、ニュージランド人自身に肉食主義者がいるということは不都合だということです。

大会場に大きなスクリーンが届きました。これは、本国の集録専門部の人が、日本でイスパランチを使っ
て、ニュージランドの事を宣伝するために、送ってきたものです。みんなでスクリーンを立て、私とその前に立って説明をしましたが、見物の入りはまず半分くらい。あと、息子のステファンが説明を交代してくれて、私はちょっと休憩しました。しばらくして帰ってみると、スクリーンの前は、たいへんな人だかり。どうしたのかと、そばの人に尋ねてみました。

「私のいない間に、ステファンは何かしたの？」

その返事：

「まず、30才くらい若いといったところかね！」

オーモトからは前もって、2人のイスパランチストのお名前を紹介していただいていた。そのうちの
お1人は、私が来日した時重病で、とてもお会いできませんでした。もうお1人は西田さんで、亀岡でのオーモト祭のあとお会いしました。祭の間は、私は亀岡

の境内を見てまわり、その教義を学び、能を見せていただいで、その説明を聞きました。

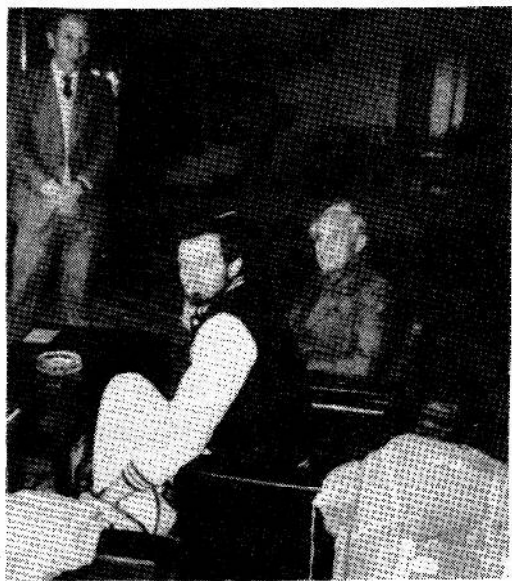
その後、ニュージランドで私が職を退こうとしていた頃、西田さんは、新しくできた修道院と連絡をとり、私が日本に来るなら、そこへ入るがいいと教えてくれました。その教義は浄土という大乘仏教一派ですが、仏教のあらゆる宗派や、キリスト教までも受け入れ、それらの研修もしていました。キリスト教のお祭を行う小さな礼拝室もあります。

西田さんは、私の入国手続きをするための事務所に連れていってくれて手続きをすませ、そのあと私は修道院にもどりました。

ところが、その4日後、修道院長の日向さんが、ある会合に私を呼んで、西田さんの死去のことを告げられました。これは全く思いがけない急なことでした。私は、何人かの僧たちと岸和田へいって、お弔いをしました。

こうして私は、修道院ではたった1人のイスパランチストになってしまいました。以前から西田さんは、私と二人で協力して、日向さんの著作をイスパランチに翻訳し、それを更に私が英語に翻訳する計画でした。西田さんは私を修道院に入れるために充分長生きし、そして亡くなったのですから、彼が私に遺した聖業を、可能な限り続けるべきだと感じました。

でも今のやりかたでは、僧が二人で、あの著作をあまうまくない英語に翻訳しているのです。あとで私がそれを直し、何人かの僧たちと、文の意味をとり違



えていないか点検した後、タイプに打って、オフセット印刷します。その後でエスペラント訳をし、日本のエスペランチストといっしょに日本語の原文と対照しながら校正し、タイプに打って印刷にかけます。

私も小さなエスペラント・クラスで教えています。私が死ぬまでに、有能なエスペランチストが何人か有って、いい翻訳をやってくれたらと思います。それから、その有能な人達は、世界大会にも行ってほしいと思います。各国のエスペランチストたちと話し合えば、貴重な体験が得られます。私自身も何回か世界大会に参加しました。

さて以上が、今これを書いている現在までの、私の生きざまです。この後、何か重大なことが私に起こったら、それはあなたのお耳にも達することでしょうから、これに付け加えていただければいいと思います。

すべての人に愛を、

ダヴィド・マクギル

あとがき 私の仏門入りの経過を書き残しておくのに、私は自分の死亡通知書の資料をコピーして送りました。いえ、私はまだ生きています (mi kredas!)。でも、私が死んだら、このことについて私に尋ねるわけにはまいりません。それで、私は自分の全生涯のことを書いておいてあるのです。今 活動なさっている皆さんも、その時の資料が残っていくように、私と同じようになさることをおすすめしたいと思います。

Daŭdo Macgill

前田米美訳

Kiu la unua lanĉis
la vorton



の言い出しっぺは誰?

前田米美

それは、イタリア系フランス人、ナポレオン・フェラリ (Ferrari)。この話の出どころは、SATの年刊文集『SENNACIECA REVUO』1987年版。フェラリの足跡 (spuro) について、いろんな人の証言をもとに、6ページにわたって出ている。けっこう面白い噂話が多い。でも年代順に並んでいないので、読んでいて混乱してくるのだが、ボクはボクなりに、ちょっと勝手に、適当に、並びかえて、噂話のうけ売りをしてみることにする。

1960年代のバリ、Overdomoの近く Passage Choiseul に『Talma』という小さな喫茶店があった。毎週土曜日に若い Esp-istoj が集まってくる。申し合せた決まりは『エスペラント だけ で話すこと』。そばで、年とった Esp-istoj がフランス語ばかりで話し合っているのを見て、若者のひとり (おそらくフェラリ) が、「あの年とった Krokodiloj め」「我々だけは Krokodili ないようにしよう。」

同じ若者グループの中でも、誰かがフランス語か他の外国語で話しをすると、彼はさっそく

「だれだ、Krokodiloj は?」と aĝiga nuanco で怒鳴り、クロコデリった者は罰として、お茶かワイン1杯分の罰金を払わされたという。

1947年のベルンの世界大会の時、若い雄弁なフランス人が参加していて、SONOLO運動というのを宣伝していた。SONOLOとは Silentu Nacia Lingvo の略。このフランスの若者言わく:

「Krokodiloj havas grandajn buŝojn, kiujn ili malbone uzas!」そして

「われわれだけは、あんな Krokodili はしないようにしましょう。これが SONOLO 運動だ。」

国際交流の場で「Krokodili」が、あの意味で使われた最初であった。そして やがて 全世界に広がっていくことになった。即ち、P.I.V. (Plena Ilustrita Vortaro の略。現在世界で一番たよりにされているエス・エス辞典) が定義しているように『paroli nacilingve en Esperantista medio』という事になった。



この二つの噂話には、あのフランスの若者がフェラリだとはっきり名指しはしていないが、彼とわりに親しかった D-ro Védrine の証言によれば、Ferrari はいつも緑星章をいつも二つ胸につけていて、「ボクは sonolisto の会長だからね」とっていたし、また彼からもらった手紙の封筒の上には、こんなことが印刷字体で書いてあった。

LA SONOLISTA VIVO ESTAS BELA
SEN SOVINISMO. SEN EGOISMO SEN

↓ALUZO

LA SONOLISTA KARIERO ESTAS
MIRINDA

KAJ LUMBILDPLENA

HONESTE LABORI.

HONESTE VIVI.

HONESTE PAROLI

SONOLU SONOLU SONOLU

SENDAS SONOLISTA AKADEMIO
NAPOLEONO FERRARI
STRATO SAVOIE N° 20
PARIZO®

Ferrari は 1900 年頃、北イタリアのトリノで生まれた。家族についての記録が残っていないので、恐らく生涯独身だとおしたようだ。フランスに移住した時、『マカロニ野郎』などと、フランス人からよそ者差別を受けた。

1932年のパリの第24回世界大会の時は、パリのすぐ北西にある Levallois-Perret というまちに住んでいて、そこから世界大会に参加している。職業はタクシーの運転手。お金持ちを乗せてロワールのお城見物への案内などしていた。別の噂では、Beaubourg 通りにある『Imperator』という喫茶店の kelneroで、土曜日だけ出勤していた。また別に人の話では、1931~1933年ごろ、喫茶『Talma』の kelneroだったと、これは年代まで挙げている。一方パリの Savoie 通りに『Nia Kombisto』というbutikoで、たった一人で散髪屋を、いや男性の整髪店をやっていたという話もある。ちょっと風変わりで、1日に5人以上の整髪をやらぬ。これで充分食っていけるといふ。ひいきのエスプレランチストのお客もいたが、あまり立派な店でもないし、お客の頼んだこと以上にサービスをおしつけ、それが1%時間も続いたというから、お客になるにはかなりの忍耐と勇気がいったそうなる。

和歌山緑丘会 (Wakayama Klubo "Verda Monteto")

世話人 前田 米美

〒640 和歌山市 小松原6丁目1-6

☎0734 (22) 8660

会費：年 3,000円 家族・学生 1,000円

払込：振替番号 大阪 6-8630

名 義 和歌山緑丘会

会計などの問い合わせ

牛島 美恵子

〒640 和歌山市 狐島 65-12

☎(夜間) 0734 (55) 1088

(昼間) 0734 (33) 3791

(竹中工務店)

▼土曜例会 午後2時~4時 県職員会館

▼木曜婦人会 午前10:30~12:00

会場 未定 (3月末現在)

▼月曜中級講座 午前10:30~12:00

会場 ギャラリー-喫茶「けまり」3階

国際郵便料金が再び引き下げ

昭和63年4月1日より

- | | | |
|--------------------|-------|--------|
| 1. 航空書状 | 10gまで | 10gごとに |
| 第1地帯 | 80円 | 60円 |
| 第2地帯 | 100円 | 70円 |
| 第3地帯 | 120円 | 100円 |
| 2. 航空書簡 | 80円 | |
| 3. 航空葉書 | 70円 | |
| 4. 航空印刷物(点字印刷物を含む) | 20gまで | 20gごとに |
| 第1地帯 | 70円 | 30円 |
| 第2地帯 | 80円 | 40円 |
| 第3地帯 | 90円 | 50円 |
| 5. 航空小型包装物 | 80gまで | 20gごとに |
| 第1地帯 | 160円 | 30円 |
| 第2地帯 | 200円 | 40円 |
| 第3地帯 | 240円 | 50円 |
| 6. 国際返信切手 | 1枚 | 150円 |

1988年4月

(会編集) 前田米美

640 和歌山市小松原6-1-6

TEL 0734-22-8660

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 47



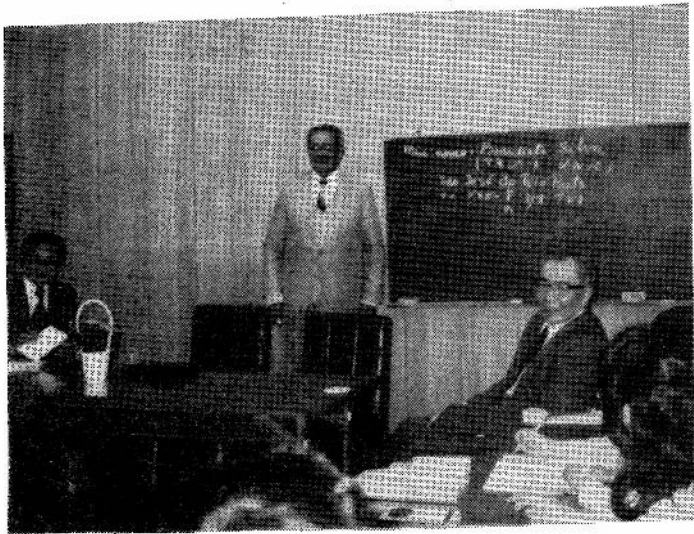
El la alia flanko
de nia ter globo

S-ro Benedicto SILVA vizitis nian lundan kurson en la 11a de aprilo, la unua tago post la printampa kursripozoz.

Li venis el Brazilo, el la alia flanko de nia ter globo. Li estas advokato kaj estis doktora profesoro pri portugala kaj latina lingvoj.

Dum la vizitado al nia kurso, li tre afable respondis por la demandoj de la gekursanoj. Li tre kuraĝe demandis al li en Esp. kaj li bone komprenis ilin. Tio ja estis bona stimulo al la kursanoj.

Post la kursgvidado, li vizitis la kastelparkon kaj la marbordon de suda urboparto. Li multe



dankis por la varmkora akcepto de la kursanoj kaj de esperantistoj en Wakayama.

Post la foriro, li skribis al MAEDA: " Mi tenados por eterne en mia koro, precipe la dolĉan memoron pri vi kaj viaj gelernantoj....."

[MAEDA Yonemi]

Infanaj Tagoj

TANAKA Masami

Patro

Kia estis mia patro? Mi volas tuŝi iomete pri lia profilo. Kiam li havis libertempon, li kutime promenadis sur la pado al proksimaj arbaroj kaj montoj, de tempo al tempo al malproksimaj lokoj. Ŝajnas al mi, ke li havis specialan intereson kolekti diversajn ŝtonojn kaj argilon. Precipe li havis apartan guston pri argilo.

La patro klarigis min montrante kolektaĵojn, ke inter ili troviĝas altvaloraj materialoj por ceramikaĵoj.



Ofte li sendis ilin al la ceramik-fabrikejo en urbo, kie li laboris antaŭe kiel oficisto.

Iutage la patrino konfesis min, ke venis sciigo de la laboratorio. Tiu raportis, ke ĉio, kion sendis la patro, ne meritas je bonkvalita ceramikaĵo. Post tiam mi nur pretervidis kverelon inter ili. La patrino levante ŝultrojn vekriis al la patro, "Ĉesigu fari senutilaĵon"

Apud la vojo, ĉe la rando de la vilaĝeto kreskiĝis unu maljuna persimono-arbo, kies trunko estis dika ĉirkaŭ je kvin aŭ ses metroj laŭ la ĉirkaŭo. Vidante ĝin la patro havis ideon, ke ĝi estas arbo tre

rara, havanta bonan lignovejnon. Baldaŭ el la persimono-arbo oni fabrikis tabulojn, kiujn ĉiuj vilaĝanoj rigardis kun granda admiro. Ĉar la tabuloj havis plene strangajn multkolorajn bildojn tre fantaziajn kaj plie ĝi donis al ni imagon ke kvazaŭ granda tigro ĝuste minacus nin kun malfermita faŭko.

Poste mi eksciis: denaske bonkora patro disdonis ilin senkompanse al tiuj, kiuj laŭdis lin.

En iu tago, posttagmeze en oktobro la patro kondukis min al la monto, portante ŝovelilon kaj korbon. Ni eniris en arbaron laŭlonge de la deklivo, kaj iris pluen al profunda vepraro, kie ne troviĝas vojeto, do ni nur marŝas serpentume inter arboj.

Kiam ni venis al la loko, kie troviĝas arboj kovritaj de grimpherboj, la patro haltis kaj diris, "Mi laboru ĉi tie. Se vi volas promeni, iru ien ajn por obserbi sovaĝajn florojn".

Ŝanco venis al mi. Antaŭe mi aŭdis de mia amiko, ke en ĉi monto kreskas pluraj sovaĝaj fruktoj, kiuj estas manĝeblaj kaj tre bongustaj. Do, mi tuj eniris en arbaron por serĉi ilin kaj grimpis deklivon plu supren. Mi ripozis ĉe la roko kovrita de musko kaj ĵetis rigardon ĉirkaŭen. Estis feliĉe, antaŭ mi staris granda arbo, ĉirkaŭ kiu volvis multaj grimpherboj, inter kiuj vidiĝis

ovoformaj flavaj fruktoj similaj al melongeno.

Post penego mi fine enmanigis ĝin. Ties veran nomon tiam ankoraŭ mi ne sciis. Ĝojplene mi descendis rapide al la patro, kunportante la sovaĝan frukton. Kiam mi alvenis al la patro, li fosis teron por rikolti JAMAHO-n (ignamo). Finante tutan laboron, li montris al mi la rikoltaĵon kaj diris: "Hodiaŭ vespere ni povos regali nin per bongusta supo de JAMAHO ĝis la kreviĝo de ventro.

Ĉe la hejmo mi elmetis mian frukton antaŭ la patrino. "Ĝi estas AKEBIO", ĉe la vido ŝi diris kun iom malagrabra mieno. Mi pendigis ĝin ĉe la termuro de la domo. Post kelkaj tagoj mi vidis, ke la ŝelo de la frukto havis vermiljonan koloron kiel knabinaj vivantaj vangoj kaj sur la frukto vertikale naskiĝis krevoj, kiu eligis fortegan mielan aromon.

Mi estis scivolema pri ĝia gusto. Ĉe sola imago al mi salivo abundis en la buŝo. En sekvanta vespero kun granda atendo mi venis al la loko, kie mi metis AKEBIO-n, sed la AKEBIO troviĝis nenie ĉirkaŭe. Ĝi foriĝis tute de miaj okuloj.

Estis domaĝe, ke mi ne povis fine saporumi montan frukton tiel sopiratan. (daŭrigota)

ザメンホフ伝 (16)

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

タイトルバック：辻 千早

第6章

理想主義的予言者

母の死後、ザメンホフ家の子供たちは、以前より心優しくなった父に近寄っていった。父の心の痛みは深く、非常に感じやすくなっていた。同じ喪の悲しみを抱いて、子供たちは皆、父のもとに身を寄せあつた。今は亡き、愛する母のことを思い、嘆き悲しみあうことで、彼等は母の愛と魂のもとに集まったのである。気の毒な父の日々を慰めようと、子供たちは氣遣った。父は子供たちの一番大切な友人になった。だから、巣立っていった子供たちも、できるだけ早くワルシャワに戻って来ることにした。次々に彼等は妻子を連れて戻り、再び家族団らんの場所を作った。

こうして1898年にルドビコも戻って来た。彼は家族と一緒に、ユダヤ人居住区の貧民街、チカ通り9番地に住みついた。第一次世界大戦まで彼はそこに住んでいた。眼科医として開業したが、わずかな治療費しかとらなかつた。患者からは40カペイカしかとらなかつたが、中にはそれすら払えない者もいた。しかしユダヤ人は、つましい生活はしていても、借金が嫌いなのである。普通の眼科医は高い治療費を請求した。彼らは、豪邸でぜいたくざんまいな暮らしをしていた。だから大多数の人たちは、眼病を抱えて盲目になっ



た方がましたとさえ思っていた。そこへ庶民向きの医者がやって来た。そして多くの人たちの視力を回復させてくれたのである。たちまち待合室は朝から晩まで患者でいっぱいになった。ルドビコは本当の慈善家になったのである。

彼は、疲れ切った労働者や青白い顔をした針子の上に優しく身をかがめた。皆、彼を信頼していた。経験を積み、勉強を重ねて、ルドビコはやがて優れた専門医になった。こうして彼は死ぬまで、大変質素で、つましい、どんなぜいたくとも無縁な一生を送ったのである。

(註)

日毎のたゆまぬ努力によって、心に重くのしかかっていた心配はなくなった。しかしそれとともにより崇高な理想のための自由時間も少なくなった。しかし自分の献身的努力が人類

同胞に即役立つと思うと、慰めになった。夕方になるとルドビコは椅子に腰を下ろして再びペンを手にとるのだった。

著作や翻訳や文通に夜の大部分の時間がとられてしまった。 エスペラントの運動はゆっくりとではあるが、着々と世界中に広まっていた。 ザメンホフはやさしいまなざしで新たな戦士たちの苦勞を見守っていた。

・・・都会や町や、
小さな村の皆さん・・・
私たちは皆お互いに
とても遠く離れて住んでいます。
今どこに住み、
何をしているのでしょうか？
ああ、私の大切な仲間たちよ。

この『同胞へ』という詩から、私たちは、仲間の「家族的なまどい」に思いをはせている彼の心の内を読みとることができる。夜のしじまに脈打つ心の奥底まで、まるで透明な水晶を通して見るようにうかがい知ることができる。

(註：いつか私 [E. プリヴァ] が、アメリカの大都会で、若い労働者たちに、ザメンホフの著作について講演をしたことがあります。その時、ワルシャワから来たユダヤ人の少年が私に尋ねたものでした。「ザメンホフって、あのディカ通りのやさしい眼医者さんのこと?」)

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat
La kopirajto de la originalo, la
Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.

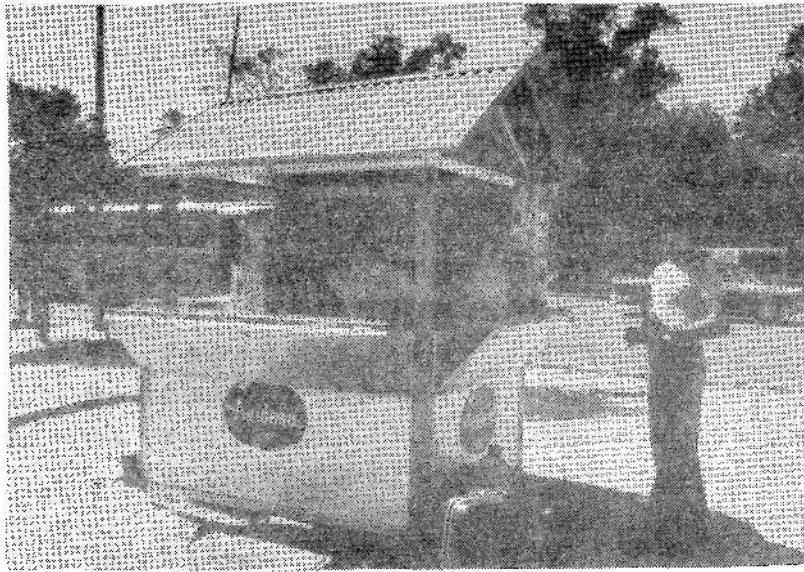
Kia Komplikaĵo
Sendi Pakajon

HASEGAŬA JOŜIFUMI

la 30an de aŭgusto, 1975
Hodiaŭ mi volis sendi neuzatajn aĵojn al Japanio. Unue mi devis aĉeti ŝnuron. Mi vizitis poŝtoŝtacion por sendi la aĵojn, sed la oficisto diris, nur post la afranka pagado, ke mi povas sendi nur librojn sed ne la vestaĵojn. Mi demandis la kialon per mallerta hispana lingvo. Neniu el la oficistoj povis paroli anglan lingvon, malgraŭ ĉe granda

poŝtoŝtacio. Tial mi ne povis kompreni bone. Pro tio mi vane uzis multan tempon. Kaj mi demandis al ili, kie mi povos sendi la vestaĵojn al Japanio, kaj la oficistoj respondis, ke mi povos sendi ilin ĉe RENFE (kvazaŭ nuna JR en Japanio).

Mi iris kun la pakajo al stacidomo iom malproksima, kaj demandis al la komisiito en stacidomo sed li respondis, ke li ne akceptas tion ĉi tie.



アイスクリーム売りの少年
アントニオ君の小屋

1975年8月30日
セヴィリアにて

明るいお喋りが長引いて、
お金を換える時間を バア
にしてみました。

Mi iris al alia poŝtoŝicejo apud la stacio. Denove mi demandis, ĉu mi povas sendi la pakajon de ĉi tie. La poŝtoŝicisto nove envolvis mian pakajon per papero. Tamen mi devis iri denove al alia loko, nome, mi ne povis sendi la pakajon tie. Li sciigis al mi la lokon en hispana lingvo, sed mi ne povis trovi la lokon kaj tial mi denove revenis al li, kaj denove demandis lin. Li skribis la nomon de la oficejo kaj la mapon sur mian poŝlibreton.

Finfine mi povis atingi celatan oficejon de RENFE je 12:45 tage. Sed la komisiito ne akceptis mian pakajon, ĉar la oficejo fermos je 13:00. Mi petis lin sendi, ĉar anko-

raŭ 15 minutoj restas ĝis la fermo. Sed li ne konsentis, ĉar mi bezonos fari multe da procedado kaj mankas tempo por tio. Mi petegis lin forte, kaj mi arbitre procede skribis sur la formula papero sen lia konsento, ĉar morgaŭ estos dimanĉo kaj mi volis veturi al Cordova sen la pakajo. Finfine mi povis sendi la pakajon ĉi tie. Mi forlasis la oficejon je 13:15! kaj la kompatinda komisiito laboris 15 minutojn pli multe.

Nu, due mi devis ŝanĝi monon ĝis la ekveturo de la trajno. Survoje mi aĉetis glaciaĵon de knabo ĉe budo surstrata. Tie mi demandis al li, kie estas la hotelo monŝanĝebla. Kaj ni parolis longtempe pri Japanio kaj pri

"Karate". Mi donacis japanajn poŝtmarkojn al li kaj li donacis ankoraŭ unu glaciaĵon al mi. Mi fotis lin kaj promesis sendi la foton al li. Mi parolis kun li tro longtempe kaj tial mi ne havis tempon iri al la hotelo, kie mi povus ŝanĝi monon.

Mi ekveturis per ekspreso "Talgo", ne havante tempon monŝanĝi. En la trajno mi vidis japanan junulinon, kiun mi vidis antaŭe en Granada. Ni bezonis multan tempon por trovi sidlokojn. Mi rezervis la trajnon sed la sidloko ne estis decidita. Ni trovis finfine malplenajn sidlokojn.

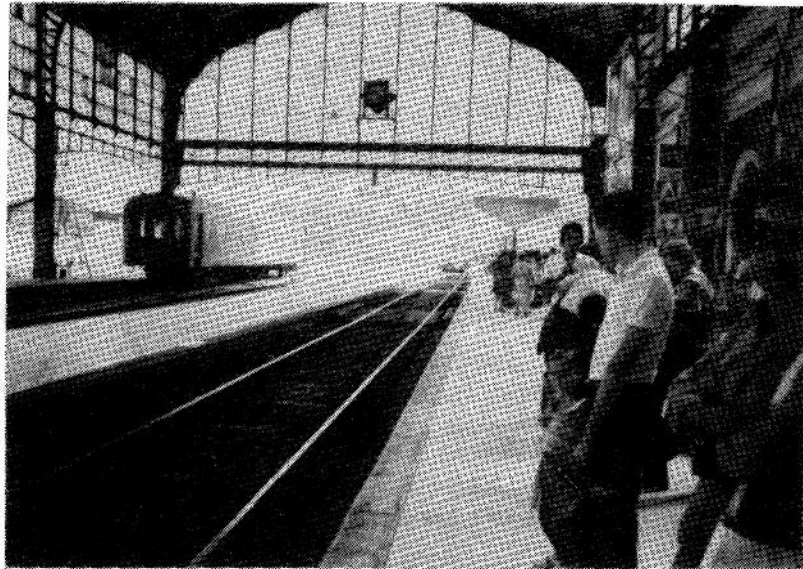
Ŝi informis min pri Maroko, ĉar ŝi jam antaŭe vizitis tien. Tio estis utila

informo. Kaj ŝi avertis min, ke mi marĉandu la prezon, kiam mi aĉetos. Nu, la trajno atingis Cordova vespere.

Mi decidis tranokti ĉe "C H Monturque"(C H eble indikas la luksecon de hotelo) Mi intencis aĉeti manĝaĵojn por morgaŭ, sed la fraŭlinoj de la gastejo informis al mi, ke hodiaŭ la butikoj jam estas fermitaj kaj morgaŭ estos dimanĉo kaj tial ne, do por morgaŭ matene ili rekomendis al mi "Bar" antaŭ la stacidomo. Ili estis belaj, do mi interparolis kun ili longtempe per angla aŭ hispana lingvoj miksante. Tiam iu brazila gasto intervenis al ni, tre bedaŭrinde !!

急行「TALGO」の到着を待つ
セヴィリア駅

少し残ってたコインを持って、
コルドバへ。この列車の中で
出会ったうら若き日本人美女と
.....



Blankĉevalo de Suho

tradukita de PINO



En Mongolio, la norda regiono de Ĉinio, etendiĝas vastega stepo. Ekde malnova tempo, loĝantoj vivadis paŝtante ŝafojn, bovojn, ĉevalojn kaj aliajn.

En ĉi tiu Mongolio troviĝas la muzikilo nomata Ĉevalkapa violo. Ĉar ĝia supro havas formon de ĉevalkapo, oni nomas ĝin Ĉevalkapa-violo.

Sed, kiel tia muzikilo estas produkita?

Jen estas la tradicia rakonto.

En malnova tempo, en ebenaĵo de Mongolio vivis malriĉa knabo-paŝtisto nomata Suho. Lia maljuna avino kaj li vivadis du solaj. Suho laboris tiel murte, kiel plenaĝulo. Ĉi matene Suho ellitiĝis frue kaj helpis avinon por prepari matenmanĝon. Poste li iris al tre vastega stepo, pelante dudek kelkajn ŝafojn.

Suho estas tre lerta en kantado kaj ofte kantis laŭ la deziro de aliaj ŝafistoj.

[daŭrigota]

福音館書店発行。大塚勇三再話の『スホの白い馬』より。大塚勇三氏の了解を得て訳された。



Kiu la unua lanĉis la vorton

K r o k o d i l i ?

の言い出しっぺは誰?
(その 2)

前田 米美

タクシー ŝoforo、喫茶店の kelnero、そして har
aranĝisto と多彩な仕事のほか、もうひとつ彼の仕事
に、鍵鎖製作販売というのがあった。鎖には緑の星に
『Esperanto』という文字を配した ŝildoがついてい
く、当時こんな物を蒐集するのが Esp-istojの間で流
行っていた。ある人のフェラーリ評：「彼は ĉionfar-
istoで ĉionfarinto, multparolaで multiniciata」

1930年代、彼は既にパリでエスペラントの宣伝に精
だしていたが、diktatoreca karaktero なので、つ
いていく人は少なかったという。

フェラーリは「timinda propagandisto」だった。彼
の店に来るお客には、あらゆる機会をとらえて一
時には自分で その機会を作って一一一宣伝をおしつ
けた。熱心でまじめで、善意の男だが、知的な宣伝に
は向いていなかった。有名な作家 Raymond Schwartz
が後に書いたものの中に：「Sekelj がやり始めた
『キャンペーンのキャンペーン』は賞賛に値するが、
それで思い出すのは、当時パリで活躍していたイタリ

アの同志のことで、この人は、エスペラントの発展の
遅いのがはがゆくて、『われら、宣伝のための宣伝を
やろう!』といった。」とある。このイタリアの同
志とは、フェラーリ以外に考えられないという。

第二次世界大戦末期、1944年パリが解放された頃、
彼はパリ郊外から 市内の Savoie 通りに転居してき
た。そこで彼はドイツ人同様のファシストだと思われ
て、いわゆる『フランス最後の愛国者』たちによって
捕えられ、銃殺されそうになった。(と少なくとも本人
はそう思いこんでいた。) 近所に住んでいた人々の話
では、「彼は悪い人間じゃないですよ。エスペランチ
ストですからねえ。」... 銃殺されると観念し
ていたところ、偶然アメリカ軍将校が彼の胸の2つの
緑星章を見て、「彼はエスペランチストだから、ファ
シストであるはずがない」といつてくれたので、一命
救われたという。

この頃から彼は、本名のイタリア的な Emilio Fe-
rrariよりも、フランスの英雄の名をとって Napo-
leone Ferrariと名乗るようになった。そして人には
「Ferrari mortis kaj renaskiĝis」とつけ加
えた。

フェラーリは、新入会員募集コンクールで一頭地を抜
く成績をあげて、パリの Esp. 会から表彰してもらっ
たこともあった。たしかに 募集した人数は多かった
が、他面、彼のしつこさにあきれて、近寄らない人も
多かった。 リヨンで発行されていた地方月刊雑誌
『Kompreni』の取次もやっていた。

フェラーリ評の いろいろ：

「Li estis originalulo, sed el la nova
generacio.」

「Li estis stranga homo, kiel pli malpli
ĉiuj esperantistoj!」

「Li estis simpla malriĉa kaj tre sin-
donema fraŭlo, kiu konstante kaj tedege
volis trudi sian opinion.」

「Li estis ĝisosta esperantisto.」

「Li prave opiniis, ke Esperanto ne estas
lingvo ekskluziva de akademianoj kaj
ideologiemuloj, sed devas vivantiĝi kiel
ĉiuj lingvoj en ĉiutagaĵoj.」

フェラーリは、1956年か 57年に亡くなった。Leon
COURTINAの『Historio de Esperanto』(1966)
には、彼の死亡通知が転記されているが、出所につい
ては、ふれていない。

『FERRARI. --- De multaj jaroj konata en Par-
izo kiel ŝoforo de taksio, estis renversita



de aŭtomobilo 13/4/56. De tiu dato li ne eliris el la Hospitalo. Fine la 1/1/56 li finis sian vivon. Tre aktiva propagandisto kaj sincera samideano 』

1/1/56はおかしい。多分 57 年のあやまりだろう。交通事故のようだが、Védria 博士によれば、彼は自殺だったという。『li finis sian vivon』パリの新聞の切りぬきを博士が持っていて、それによれば、パリ南東3Kmの運河で、投身自殺した彼の死体が見付かったと報じられている。この話にも、日付が不明である。

エスペラントの歴史の中で、フェラリは、全くかけろろうのような存在だったのだろうか、それとも 彼の力で運動がプラスになったのだろうか？

彼の著作は全然見付かっていないし、彼のことを

くわしく書いたものも少ない。彼のことを知っていた数人が、あちこちに致行書いたものが散見するだけである。写真も恐らく残っていないようだ。でも、プラスにせよマイナスにせよ、彼の華やかな姿が 一時期人々の目に映り、耳にしたことはたしかだ。やりすぎで かえって逆効果になった宣伝、募集は、エスペラント運動面では たしかにプラスよりもマイナス部分が多かった。「彼は、あまりに熱心すぎた宣伝家で、まわりの状況を見ずに、ただひたすら穴を掘ってしまおう talpo だった」と書いているのは、イギリスの John Wellsだ。Sonolo 運動も 結局失敗に終り、sononii, sonolisto, sonolejo, などのことばも、彼といっしょに、墓に消えてしまった。

このマイナス面に対して、フェラリのエスペラントへのプラス面の功績も見逃せない。

『Ne krokodilu』という『batalokrio』を定義させたのは、他ならぬ彼であり、このことばは 昔からの Esperanto のように、エスペラント語に組み入れられ エスペラント文化となった。これは、どこかの地方のスラングとか、専門家やある年齢層の人達だけの術語として片付けるわけにはいかない。Krokodili は、ちょっと流行してすたれてしまうどころか、もう半世紀生き続け、すっかり根付いてしまった。一般のどの言語表現にも、これにかわる類語は見当たらないのである。

(終り)

[SENNACIECA REVUO 1987 n-ro 115 抄]

S.R.の編集者 S-ro Paul Signoret と
作者 S-ro Bernard Golden の転載許可を
いただいています。

ちかて"3"-----

★土曜日の伊呂舎では、続けて Claude Piron の "GERDA MALAPERIS" を goje 読んでます。いはば 話は進んで policano が できてきました。チヤとーなるか!!

★木曜夫人たちの Jaŭda Rondo は.... eleganta salono で。テキストは、どなじ "Ĉu vi parolas Esperante?" を使って、もっか、"くどき" を 読んで おります。ついでに、"くどき" に対する "逃げ" も.....

★月曜講座は、S-ro SILVA を gasto に、Esperanto を 実際に使った会話を 試みました。
okuloj も、oreloj も、manoj も、buŝo も、kapo も、使えるものすべて使って.....
最近 は kanto もいくつか覚えました。
"月曜のメンバーの文通相手、10ヶ国以上あるんや!"

★どの kunsido にも お出にならないよ。
Kiel vi fartas? Ni atendas vin.

会費：年 3,000円 家族・学生 1,000円
払込：振替番号 大阪 6-3630
名 義 和歌山緑丘会
会計などの問い合わせ
牛島 美恵子
〒640 和歌山市 狐島 65-12
☎(夜間) 0734 (55) 1088
(昼間) 0734 (33) 3791
(竹中工務店)

1988年6月

(編集) 前田米美

〒640 和歌山市小松原6-1-6
TEL 0734-22-8660

VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 48



左から2人目 Ljo, 3人目 Ana, 右はし辻さん。 6月5日泉立近代美術館。

GASTAME

Petveturantoj!!

Tsuii Chihaya

"Ni estas petveturantoj. Ni staras vojflanke kun afiŝo. Ni skribas cellokon sur la afiŝo. Eĉ taksio haltis antaŭ ni kaj la ŝoforo veturigis nin senpage".

"Aliaj kamionoj aŭ personaj aŭtoj ankaŭ ĉiufoje haltas antaŭ ni. Kamiono

estas pli bona, ĉar la sidejo estas alta kaj ni bone povas vidi."

"Ni ĉiam, ĉiufoje sukcesis kapti ilin."

Ŝi alparolis al mi agrable sur la apuda sidejo de mia aŭto.

La 5a de junio, matene, telefono sonoris. De S-ro Okagaito.

"Ĉu vi bonvolus zorgi pri francaj geedzoj?"

"Volonte."

Tuj mi ŝoforis mian aŭton al Nogami-
ĉo. Survoje mi imagis pri du junaj
fremduloj.

Si estis ĉarma svelta kun longa
ora hararo. Sed la viro ŝajnis orien-
tano. Kia surprizo!! Li estis japano.
Sed li ne diris sian japanan nomon.
Li nomis sin Ljo kaj ŝia nomo estis
Ana. Ana babiladis kaj mi balbutis.
Ŝi estis instruistino de germana ling-
vo.

Bonŝance, ni tiam okazigis Ekspozi-
cion de Pentraĵo en "Kindai Bijucu-
kan (Moderna Arta Muzeo)." Membroj
de Verda Monteto kolektiĝis en la
moderna muzeo de Wakayama. Tie ni
babiladis.

Poste S-ro Fukumoto kaj mi gvidis

ilin al Saikazaki. Blua maro kaj
serena ĉielo. Agrabla vento blovis.
Ŝiaj longaj haroj flirtis.

Tiun nokton ili tranoktis ĉe mia
domo. Ili manĝis ĉion ajn de la kuir-
aĵoj faritaj de mia edzino. Ana diris,
ke la kuirajoj estas "Oiši" en japana
lingvo.

La sekvantan matenon mi akompanis
ilin ĝis Iwade pretervojo de la 24a
ŝtatvojo.

"Ĝis revido"

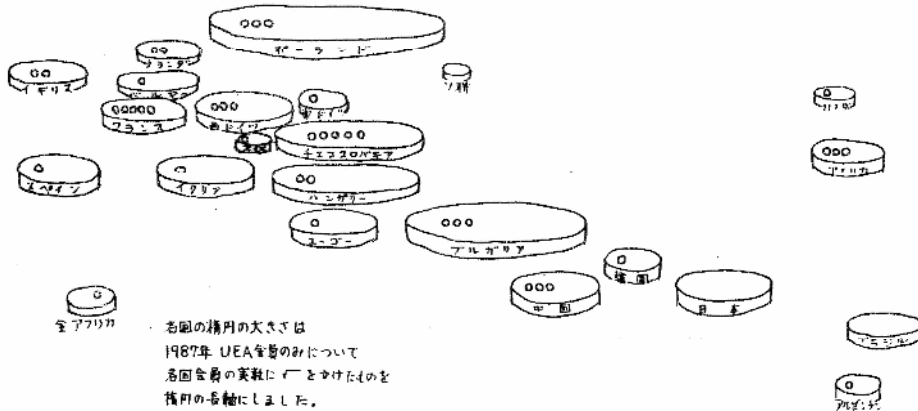
Ili svingis manojn forte. Ili ridetis.
Ili ŝajne havis nenian maltrankvilon
por kapti alian aŭton.

La sekvanta celata loko estis Uji.

Tie loĝas liaj gepatroj.

Kia aŭto kaptos ilin?

緑丘会員の文通相手のいる国々 1988年1月現在



全アフリカ

右図の諸円の大きさは
1987年 UEA全員のみに
対して各国会員の人数に
比例したものである。
[注] UEA会数は世界中で
101ヶ国に
分布しています。
[資料] "Esperanto" 誌 1988年3月号

オーストラリア

Malnova Amikino El Norda Irlando

Meze, kun sia fileto Hyugo, sidas S-ino Kobayasi-Fumiko. Kelkaj anoj el nia klubo 'Verda Monteto' tre bone konas ŝin, kaj ankaŭ la lundaj kursanoj, kies kurson ŝi vizitis en la 16a de majo. Ŝi ja estas en nia klubo, unu sola anino loĝanta en eksterlando!

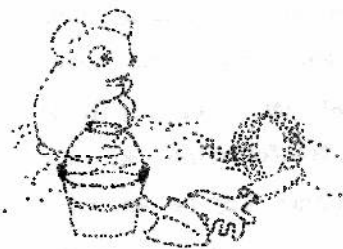
Kie do ŝi nun loĝas? Imagu, ŝi loĝas, kun sia edzo, la elstara lingvisto S-ro Michel Lamb, en Norda Irlando, en la norda parto de Irlanda Insulo, kie nin surprizas foje la eksplodo kaj murdo far' de I.R.A. gerilo.

Ĉu ŝia familio estas en danĝero? Eble ne. Vidu ŝian trankvilan vizaĝon. Oni raportas la konflikton iom troige.

Strange, Hyugo, la fileto, parolas japanan lingvon tre bone, naskita kaj kreskinta en Norda Irlando!

La foto montras la ĝisrevidan kunmangon kun kelkaj intimaj klubaninoj ĉe "Kinokuni-Kaikan" en la 8a de junio.

En la sekvanta tago, ŝi forflugis al la lando de sia edzo kaj ŝin akompanis ŝia patro, la estro de konstrua entrepreno, supozeble por pli bone instali ion ĉe ŝia irlanda nesto.



VOJAĜEME

INTERNACITELEFONI

...SENPAGE

HASEGAŬA JOŝIFUMI

La 31an de aŭgusto, 1975

Post la matenmanĝo ĉe Bar antaŭ la stacidomo Cordoba, mi ekveturis al "Algeciras". En la vagono mi sidigis apud japana junulo. Mi vidis lin ie antaŭe, sed ni ne povis rememori unu la alian, kie ni vidis. Mi parolis al li mian baldaŭan viziton al Maroko. Li diris al mi, ke tio estas terura. Jes, tio estus iom terura, sed Maroko tre interesas min. Mi ŝanĝis la trajnon en la stacio "Bobadilla", kaj tie mi apartigis de li.

Poste mi atingis la stacion "Algeciras". En suda Hispanio, blankaj domoj multigas. De ĉi tiu stacio mi devis iri al la haveno. Mi veturis per taksio ĝis la haveno. Mi povis trovi mian ŝipon, kiu ekiros al "Tanĝero" en Maroko, sed la ekira horo estis la 6a vespere. Mi devis atendi 2 horojn. Dume mi ŝanĝis monon ĉe la banko, kaj mi telefonis al mia patro kaj tiam li ne akceptis



Somos de la
Chaines des
Rotisseurs



bar
restaurante

Siene

MESA NUM.

Y. Ruiz

PLAZA JOSE ANTONIO, 1.
TELEFS. 223006 - 223093
CORDOBA

FACTURA Nº 005108

D.

Clave	IMPORTE	Concepto	Núm.	Fecha
1				
2	000.200	CM		
3	000.200	Sr 0041	30AGOS	
4	000.200	T 0041	30AGOS	
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				

Descripción Claves

- E.D. Entramases, ensaladas
- D.S. Sopas, Cremas, Pastas
- V.E. Verduras, Arroz
- H.P. Huevos, Pañados variados
- C. Carnes, Asados
- P. Pastries: Dulces, helados, Quesos y Frutas.
- B. Bebidas: Vinos, Cerveza, Aguas Minerales, Café y Licores.
- M. Menú del Día
- U. Servicio: Pan y otros
- T.C. Menú Niños
- D.E. Deducciones
- S.T. Subtotal
- T. Total

駅前 Barの「つげ」

mian telefonon.

Kiam mi estis en Japanio, mi anticipe aranĝis kun miaj familianoj, ke, se mi ne havos urĝan mesaĝon al mia familio, mi telefonos nomumante mian patron, kaj se mia familio ne havos tiam mesaĝon al mi, mia familiano respondu al la telefonistino, ke mia patro ne estas hejme kaj ne akceptas telefonon, do la internacia telefon-

Servicio e Impuestos incluidos.
Service charge and taxes included
Service et taxes compris
Bedienungszuschlag und Abgaben
inbegriffen.

ホテルの便所はちょっと変わっていて珍しかった。
椅子式でないから、日本式清潔感。
キンカクシがないから、開放感？！

prezo povas esti senkosta kaj eĉ mi povas ricevi informon, ke kaj mi kaj miaj familianoj fartas bone. En alia okazo, se mi havos mesaĝon, mi telefonos nomumante mian patrinon.

Dum mi atendis la ŝipekiron, mi parolis kun arĝeriano, kiu vojaĝas en Maroko, kaj ankaŭ kun marokano, kiu laboris en Okcidenta Germanio. En la ŝipo, juna marokano donis al mi informojn pri la trafiko en Maroko.

Li esperas vojaĝi al Japanio.

La ŝipo ekiris kutime 1 horon malfrue de la difinita tempo. En la ŝipo mi malfruigis mian horiĝon je 2 horojn pro la hordiferenco. Oni bezonis 4 horojn por transiri Ĝibraltaran

markolon ĝis "Tanĝero". La juna marokano veturigis min per sia aŭto al la centro de la urbo.

Mi tranoktis ĉe hotelo en malnova strato. Unue mi pagis erare 10 Dirhamojn(D.H.), sed vere mi devis pagi 1000 D.H. La mastro klarigis pri tio kaj postulis al mi la mankon. Maroka hotelo estis tre interesa, kaj la neceso havis aspekton tute malsaman kun la eŭropa.

La strato havis strangan atmosferon. Knabo vendis "combo"fruktojn el kaktus. Mi demandis la prezon kaj li respondis 2 D.H. Mi aĉetis ilin marĉande je 1 D.H. Ili estis dolĉaj, sed ne estis tre bongustaj. La knabo povis libere paroli francan, araban, hispanan kaj anglan lingvojn. Li parolis multe pri "Blues Lee". (daŭrigota)



モロッコ。朝ホテルの窓から：仕事を求める失業者が、不気味にずらりとならんでいた。

ザメンホフ伝(17)

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

タイトルバック：辻 千早

第6章(続)

理想主義的予言者

ザメンホフはまた、ユダヤ人労働者の貧しい患者のことをいつも心にかけていた。彼自身は家ではポーランド語しか話さなかったし、また自分は人類人(人類の一員であると自覚した人間)であると思っていたが、不幸なユダヤ民族の運命が気掛りであった。学生時代の彼は、シオニスト(ユダヤ人の建国主義者)のグループはショビニズム(排他的愛国主義)過ぎると思っていた。「アシミリスト(同化主義者)」という反対派のグループも好きになれなかった。呼び方は違っていても、ショビニズムという点では本質的に同じものだったからである。アシミリストたちは、ユダヤ人はポーランド人よりもポーランド人的に、ロシア人よりもロシア人的になり、ユダヤ人であることを忘れなければいけないと主張した。ザメンホフはそのような考え方は間違っていると思った。彼は明るさ、誠実さを追い求めた。

人は自らの民族的所属を、他に誇り高く押しつけたり、恥じて隠したりする必要はないと彼は信じていた。人は自由で誠実でなければいけない。宗教とか、家庭で使用する言語とか、出生などというものは、個人的なことである。教会が公的な立場から退いている国もいくつもある。今後は、国家と祖国も別々であるべきだ。



ユダヤ人はどの国家に所属しようと、善良で協力的な国民でなければいけない。外国人のようにふるまってもいけないし、帰化人のようにふるまってもいけない。他人に役立つ中立の立場で、皆と仲良く、対等につきあっていかなければいけない。ワルシャワに住むユダヤ人が、ポーランド人やパレスチナ人になる必要はない。ただ心正しいポーランド住民であればよい。そのようにしてこそ、初めてユダヤ人であり、人類人であることができ、それが最も大切なことなのだ。中立的な国際語を学ぶことで、世界中のユダヤ人が結束し、他民族と平等の基盤に立って連帯できるのだ。

このような考えにそって、ザメンホフは広大なロシア帝国全土の読者に読んでもらえるように、ロシア語で著書を出版した。彼はその本に「ホム・スム」と署名し、ヒレルの名にあやかかって「ヒレル主義」という表題をつけた。この有名な古代パレスチナの哲学者ヒレルは、紀元前の終り頃エルサレムに住んでいた人である。非常に権威ある律法学者で、いつも律法を精神的に解釈した。一方シャンマイとその学派は律法を字義どおりに解釈すべきだと主張した。「自分が不愉快に感ずることを他の人にしてはいけない」という言葉にヒレルの教えの全てが要約されている。ヒレルは、人は外見上のふるまいで他人を分けへだててはいけない。人はみな、自分は全体の一部にすぎないのだと考えなければいけない、と言っている。ザメンホフがそのような考え方にどれほど引きつけられ、影響を受けたかは、容易に想像がつく。

しかし彼の「ヒレル主義」はロシアに住むユダヤ人の情熱を呼びさますことはなかった。彼の本はどちら側からも嫌われてしまった。あまりにも現実離れしていたし、政治的利害とも全く相反していたからである。その理想を実現するためには、何よりも先ず民族間の平等を認めなければいけない。それよりも今はもっと楽な目標を追いかけてアジっていたほうがましだと指導者たちは思ったのだ。律法学者には、著者はあまりにも自由を信奉し過ぎると思われたのである。

各方面から寄せられたのは、批判と疑惑だけだった。真実を追い求めるほんの一握りの人たちだけがザメンホフの主張を理解し、認めた。排他的愛国者たちは彼を嫌った。ザメンホフは再び偏見の強さに悩んだ。再び精神的に孤

立し、苦しんだ。しかし彼の信念は揺るがなかった。人間は、民族的な違いを越えて結束しなければいけない。ザメンホフは、エスペランティストの同志たちに捧げた「私たちにできることをやっいてこう」という標語を、自分自身にも言いさかせていた。

百の種が消え、

千の種がむなしく消える・・・

それでも私たちは

せつせと種をまき続ける。

(詩「道」より)

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat
La kopirajto de la originalo, la
Esperanta eldono, apartenas al:
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.



土曜例会の新人 有 藤久美子さん

和大経済学部の先生で、20ウツ。お仕事は
都合で月曜と土曜例会に時々顔を見せて
くれます。エスペラントはパラペラで、皆を
ケムに巻いています。じゃ 私たちも、ガニバラ
なくっちゃ!

 # Infanaj Tagoj #
 #####

TANAKA Masami



Vilaĝa moro

Suginohira (杉の平)(Kriptomeria placo)

estas la nomo de la vilaĝeto, kie ni restadis dum unu jaro. Kiel la nomo montras, ĉi tie estas loko fama pro bonkvalita kriptomerio de antikvaj jaroj.

La vojo al la vilaĝa lernejo estas kovrita per branĉkrono de arbegoj, kaj eĉ sunlumo malfacile penetras tra ĝi. Dank⁹ al tio, kiam ni renkontus hazarde abruptan pluvon sur la vojo, ni ne bezonas pluv-ombrelon, kaj ni povas trapasi sen malsekiĝo.

Post pluvaj tagoj ĉiufoje la vojo trans-formiĝis al plen-kota rivereto. Eĉ en tia kazo knaboj portis al si neniajn piedvestojn. Kompreneble ili kutimiĝis iri nudpiede en bonaj veteroj. Kiam ni havas farotan aferon en la urbeto, ni iras nudpiede sur la vilaĝa vojeto ĝis la ĉefa strato de la urbeto. Kaj tie ni metas al si piedvestojn, kiujn ni portis ĉe la mano, kaj poste ni direktiĝas al la urba centro.

Mallonga estas aŭtuno, kaj venas vintro fulmrapide. Montara vintro estas tre severa kaj ofte alportas multe da neĝo. Tiun jaron en ne

malproksimaj tagoj al la jarfino, neĝo ekfalis kaj faladis en ĉiuj tagoj. Neĝo tavoloĝis ĝis pli ol duonmetrojn alte kaj sur la monta ebenaĵo aperigiĝis arĝenta mondo.

La montaraj bubaĉoj estas ĉiam viglaj kaj aktivaj. Ili ludas per diversaj sportoj sur la neĝa ebenaĵo. Se ni havas neĝstormon, tiam ni kolektiĝis en la vilaĝa kunvenejo, kie ni elpensus novan ludon.

Iutage la bubaĉo-ĉefo proponis al ni, ke ni provu ĉasludon de birdoj per kaptilo. Li diris aldone, ke, ĉar sovaĝaj birdoj eble suferus pro la manko de nutraĵo dum tiel longa neĝado, certe ni povus kapti ilin tre facile.

Por fari kaptilon ni devas prepari blankajn ĉevalharojn kaj banbupecetojn. Senprokraste en la sekvanta vespero, laŭ la plano ni grupiĝis kaj atendis malheliĝon. En plena vesperiĝo ni ekmarŝis sur la neĝpado tra arbusto, celante la domon, kie oni bredas blankan ĉevalon.

La pado kondukis nin supren al monteto, de kie ni povas rigardi en

mallumo iom pli fore kelkajn domojn kamparajn. Unu el tiuj domoj troviĝis apud Ĉevalstalo. La bubo, kiu estis plej kuraĝa en nia grupo, ekstaris kaj rapidis sola direktante sin rekte al la domo kaj malaperis en la flankon de la stalo. Subite frostotremo kaptis nin forte.

Ĉu li povus eltranĉi harojn el la vosto de la vivanta Ĉevalo sen konflikto?

Nervostreĉigaj sekundoj fluis malrapidege. Post longa sufokiga tempo, fine ni ekkaptis lian figuron alproksimiĝantan al ni sur la dekliva neĝa vojeto. Vidante lin ni certigis, ke li estis portanta Ĉevalharojn en la mano.

Hura!!

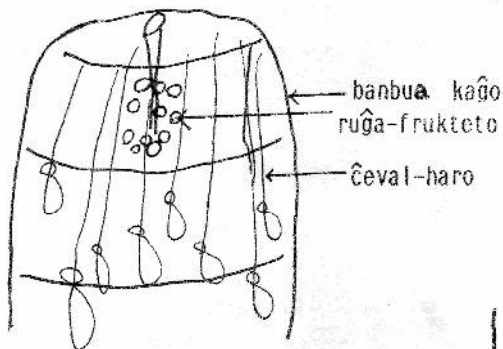
Ni verŝis admirajn vortojn sur lin kaj laŭdis lin por lia sukceso kaj braveco. En la sekvanta tago ni okupis nin por fari la kaptilojn. Iuj faris kaĝojn plektante banbuecetojn kaj aliaj tordilojn per Ĉevalharoj. Poste ni pendis hartordilojn ĉirkaŭe sur la kaĝo. En la kaĝo ni metis ruĝajn arbo-fruktojn (Mandina Poemeto). Elfaritajn Ĉaskaptilojn ni lokigis sur la neĝa evenaĵo tie kaj ĉi tie kiel oble proksime al la arbedoj.

~~~~~  
Kiel tio finfine fariĝis? Ĉu la plano iris laŭ-programe?

Ial mi ne rememoras pri tio. Ĉu

ni kaptis ilin aŭ ne. Sed mi estas certa por diri, ke ni devis pasigi tagojn nur pri birdoj kaptotaj, zorgante pri ĝiaj nutraĵo kaj loĝejo. Ĉe en sonĝoj ili aperis multnombre kaj libere flugis en la ĉambro. Ili konfuzis nin ĝis nia vekigo el la sonĝo. (daŭrigota)

Banbua-kaĝo rondforma  
je diametro 30cm



◆6月号 (N-ro 47) 誤字訂正◆

誤 正

P. 1 左段 ↓ 4行 printampa ⇨ printempa  
P. 8 ↓ 10行 murte ⇨ multe

ちかごろ -----

★ 土曜例会は *Granda Malaperis* を読了。7月末からは、"Jli kaptis Elzan" & "Lasu min paroli plu" に とりかかりました。

★ 夏休み中の

木曜講座は 9月8日(木)に、  
月曜中級講座は9月12日(月)に再開します。  
くれぐれも宿題をお忘れなく。

★ 残暑 お見舞申し上げます。

# Blankĉevalo de Suho PINO

En iu tago okazis tio: kvankam la suno subiĝis trans la monton kaj la ĉirkaŭaĵoj pli kaj pli mallumiĝis, sed Suho ne hejmenrevenis.

La avino ne povis resti trankvila.

La ŝafistoj, loĝantaj najbare, ekbruis maltrankvile.

Kio okazis al li?

Kiam ilia maltrankvilo estiĝis preskaŭ ne eltenebla, Suho revenis kurante kaj brakumante blankan aĵon.

Do ili alkuris al li, jen tio estis ĵus naskita malgranda blanka ĉevalido.

Suho kun ĝoja rido parolis la kialon al ili:

“Kiam mi estis sur la vojo al la hejmo, mi trovis ĉi ĉevalidon. Tiu ĉi kuŝis kun ia sufero. Mi vidis ĉirkaŭen kaj mi trovis neniun, kiu ŝajnas esti ties havanto. Semi lasos tie la ĉevalidon dumnokte, ĝi estos kredeble vorita de lupo.

Do mi revenis kun ĝi. (daŭrigota)

福音館書店発行・大塚勇三再話の「スーホの白い馬」より、大塚勇三氏の了解を得て訳しました。

1988年8月 (編集) 前田米美 〒640 和歌山市小松原6-1-6 (TEL.0734-22-8660)



WAKAYAMA Oktobro 隔月刊 1988

# VERDA MONTETO

Redaktita ĉe MAEDA-Yonemi (dumonata) N-ro 49

## ザメンホフ伝

(18)

原作：エドモンド・プリヴァ

翻訳：大谷宏治

タイトルバック：辻 千早

### 第6章(続)

理想主義的予言者

1900年から1905年にかけてエスペラントはよりめざましく発展していった。12カ国でグループや会誌が創設された。フランスでは有名な協会がエスペラントを支援した。すでに著名な学者たちが会員になった。エスペラント運動は大きく広がっていった。そんな時アローニユ・スル・メールで第一回エスペラント大会が開催される運びになった。

何となく不安な気持を抱いて、ザメンホフはその時を待ち受けていた。最初は、大会に行こうかどうかためらっていた。長旅だし、経費も大変だろう。また彼自身公けの場に出たことはなかった。講演などしたことはなかつ



"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat

La kopirajto de la originalo, la  
Esperanta eldono, apartenas al:

THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.

た。たくさんの新しい、見知らぬ人たちの視線を浴びるのが怖かった。彼は戸惑いを覚えた。

だが結局彼は行くことに決めた。民主精神を守り、彼はエスペランティストたちの要望に従った。多少不安感があったが、演説の原稿を準備した。同志たちに自分の心の底を話すつもりだった。エスペラント運動を共に押し進めるといふ最も高潔な目標を明らかにしようと思っていた。

妻と一緒にザメンホフは出発した。二人は3等車に乗ってパリに行った。そのパリで彼が大変恐れていた一週間の幕が切って落とされた。世界一華やかな首都で彼を待ち受けていたのはお祭り騒ぎとおもねりであった。市の幹部連中が市庁舎で彼を出迎えた。文部大臣が彼に名誉勲章を与えた。ザメンホフはエッフェル塔の頂上でフランスの高名な学者たちと食事を共にした。

こうした儀式ばったことが続く中で、ザメンホフは多少の煩わしさを感じていたが、常に気を配り、なるべく控え目に行動した。世間との付き合いが少なく、長年家にひきこもって暮らしてきた、ザメンホフにとって、こういったお祭り騒ぎの日々はつらいことだった。しかしそれがエスペラントの普及に役立つことを承知していた。だから彼は全てをじっと我慢した。夜更けて大変に疲れているにもかかわらず、彼は物見高い新聞記者たちの取材に応じた。辛抱強く記者たちの質問に答えた。自分のことは語らず、世界語のことだけを話した。

疑い深いパリジャンたちはおそらくザメンホフのことを愚直な人と思ったことだろう。だとすれば彼らの目は節穴であった。ザメンホフは何もかも事実を見抜いていて、空想は避け

たのである。ザメンホフは、大会のあらゆるプログラムがエスペラント・アカデミーオの会員のシャバルやセバル、非常に精力的に行動している大学教授ブーレのような献身的な招待客や友人たちの、大変な苦勞、尽力のおかげで注意深く準備されてきたことを充分に承知していた。そんなことができたのも、フランス政府が当時平和政策をとっていたからであった。明日にも政治の風向きが全く逆になり、排他主義の荒波があらゆる「国際的な」物を呑み込み沈めてしまうかもしれないのである。だからエスペラントを広める機会を利用しようとするのはもっともなことであった。

しかし本当の喜びはブローニュで彼を待ち受けていた。そこで彼は全世界の同志たちと出会うことになる。「家族的なまどい」の中に入ることになるのだ。

海沿いの小さな町の辻々に希望の星を描いた緑星旗が翻っていた。会場の周りで聞えてくるのはもう国際語だけだった。フランネルの帽子をかぶったイギリス人、いかめしい燕尾服を着たフランス人、旅行着のポーランド人やロシア人やオランダ人、色鮮やかなショールをはおった魅力的なスペイン女性たちが広場に集い談笑していた。彼らはお互いに話しが通じていた。口から耳に、スエーデン人からイタリア人に、流れるように、すらすらと話がかかわされていた。遂にやった！人々の間に立ちはだかっていた壁は打ち倒されたのだ！

神の祝福を受けた一日もいつしか夕暮れになっていた。街々に宵闇がせまってきた。開会式が始まるので人々は皆会場に入った。遅れた人たちも皆会場に人急ぎで駆けつけた。ホテルから。港から。旅行カバンをかかえて駅から直行して来た人もあった。小さな町



の劇場はもういっぱいになっていた。会場はあまりにも狭すぎた。千人もの同志たちは身動きがとれなかった。一階から二階正面さじきまでエスペラントのざわめきの声で溢れていた。ほとんどの人がザメンホフに会ったことがなかった。たいいていの人たちは、ザメンホフのことはその卓越した著作や、グループの書庫に大切に保管されている短い手紙によって知っているか、グループ事務所の壁に掲げられた肖像写真で知っているだけだった。誰もがザメンホフの激励の詩をそらんじていた。

暗闇の向こうに

目指す明かりが輝いている

その明かりに向かって

私たちは雄々しく進む。

夜空に輝く星のように

明りは私たちに行先を告げている。

地方でのエスペラント普及活動が行き詰まった時に、この「道」という詩を思い出さない者はなかった。満員の大広間の聴衆はそういう体験を語り合っていた。照明の下に暖かさがみなぎっていた。いまや遅しと待ち構えている聴衆の間に興奮の渦が巻き起った。・・・

と、突然、「希望」の賛歌が場内に響き渡った。

世界に新しい感覚がやって来た、

世界中に大きな声で呼掛けている・・・

## VOJAGEME

### Komploto de Turismaj gvidantoj kaj Restoracio



Muŝoj svarmas tre multe sur la strato en Tangier.

HASEGAÛA JOŝIFUMI

La 1-an de septembro,  
1975

Antaŭ la vizito al Maroko, kelkaj sciigis al mi, ke en Maroko la aŭtobuso estas pli utila ol la trajno. Tial unue mi serĉis aŭtobuskompanion. Oni antaŭe diris, ke la plej bona aŭtobuskompanio estas CTM



(maroka nacia aŭtobusa kompanio), sed tie mi ne povis aĉeti la bileton al Rabat por hodiaŭa tago, sed nur por hodiaŭa nokto. Mi serĉis aliajn nenaciajn kompaniojn, kaj trovis unu, sed ties busoj estis plenaj por hodiaŭ kaj morgaŭ. Mi demandis al iu sur la strato, kie estas alia kompanio por iri al Rabat, kaj li sciigis al mi manieron iri per trajno. Mi rezignis aŭtobuson kaj aĉetis trajnbileton de la 2-a klaso. Ĝi havis klimatizilon.

Mi promenis sur la malnova strato de Tangier. Multaj infanoj vendis diversajn aĵojn kaj ili persistis vendi al mi. Mi rifuzis dispute kontraŭ tio kaj multaj marokanoj rigardis min kun intereso. Multaj virinoj kaj maljunuloj vendas "ĉombojn" (frukto de kakto). Muŝoj svarmas tre multe sur la strato. Ili venas al mia korpo kaj eĉ al mia vizaĝo. Mi manĝis en iu manĝejo kaj tie por manĝi mi devis uzi fingrojn kun timo de infektiĝo.

Mi iris al la placo. Tie mi parolis kun maroka studento. Li diris al mi, se mi pagos, li povos gvidi la urbon, sed mi rifuzis. Poste iom maljuna marokano partoprenis en nia parolado. Li povis bone paroli anglan lingvon.

Laŭ li, li lernis ĝin sur la strato, ĉar tie alilandaj turistoj estas multaj. Ni tri parolis poste en kafejo, kaj mi trinkis marokan teon. La nomo estas "aĉai", kiu enhavis herbojn de mento. Post tio, la studento konsilis al mi, ke "kuskus" estas tre bongusta. Mi interesiĝis pri tio. Li gvidis min al iu restoracio. Ĝi estis altklasa restoracio kaj Kuskus estis ne tre bongusta konsiderante la prezon. Mi pensis, ke eble li ricevis monon de la restoracio. Tio estis bona instruo por mi. Poste li gvidis min al "Kasbah", sed mi anoncis al li, ke malgraŭ tio mi ne pagos al li monon kontraŭ la gvidado. Li jesis. Li intencis ofte viziti butikon kun mi, sed mi rifuzis kaj nur vidis.

Post tio mi iris al la stacio kaj la trajno ekiris je 3:30 P.M. La trajna veturado estis tre bona. La vidaĵo el la fenestro de la vagono, la dezerta tero kun malmulte da verdaĵoj, estis tre interesa por mi. Kiel kutime la trajno atingis pli malfrue ol la horo en la hortabelo. Ĝi devis atingi je 8:18 nokte, sed ĝi atingis antaŭ la 9-a horo. Jam estis mallume, kaj la hoteloj estis malmultaj apud la

stacio, eĉ altgradaj.  
 Mi marŝis multe,  
 kaj demandis, sed  
 mi ne povis trovi  
 konvenan hotelon.  
 Fine, mi elektis  
 la altgradan ho-  
 telon, Royal Hotel.  
 Mia ĉambro estis ne  
 tre bona.



(daŭrigota)

#####  
 # Infanaj Tagoj #  
 #####

TANAKA Masami

## Denova transloĝiĝo

La severa vintro pasis rampe,  
 kaj tiel de ni atendita printempo  
 fine venis. Sur la senfine vasta  
 herbejo ankoraŭ restas velkintaj herboj  
 brune kolorigitaj, kiuj eltenadis  
 longajn vintrajn suferojn.

Komence de la aprilo oni vidas  
 ĉie sur la herbejo blankajn fumojn de  
 herbo-bruligo. Laŭ la printempa vento  
 la masoj de fumo ŝvebas alten en la

ĉielon. Proksime aŭdiĝas Ugvisaj\*  
 voĉoj, kiuj preskaŭ tutan tagon  
 sonoras, kaj turdoj, kukuloj konkuras  
 sian voĉon unu de la alia. Intertempe  
 ekkrio de fazano akcentis ilian ĥoron.

En la montara regiono venas vera  
 printempo post la herbo-bruligo. Sur  
 la herbo-ebenaĵo ekaperas freŝaj  
 burĝonoj kaj baldaŭ ili farbas tutan  
 sternaĵon per hele verdaj koloroj.

Inter ili montriĝas multaj kreskaĵoj, ekvizetoj manĝeblaj, cirsioj, adonidoj, violoj kaj aliaj. . . Kara memoro pri tiaj naturaj lirikaj birdoj neniam perdiĝis en mi.

En aprilo 1923, kiam mi havis printempan ferion de la lernejo, ni devis adiaŭi la vilaĝon, kie ni restis ĵuste dum unu jaro. Mi ne forgesus bonkorecon de la vilaĝanoj, kaj samtempe estas dankemaj al la kamaradoj, de kiuj mi lernis multon altmeritan dum kun-ludoj kaj vivadoj.

Fru-matene en iu tago de aprilo, ni eliris el la aĉa dometo. Ekstere estis ankoraŭ malhele kaj aero estis malvarma. La kondukisto iris la unua, tenante en la mano bridrimenon de la bovo kun ĉaro, sur kiu oni ŝargis nian tutan havaĵon. Lin sekvis la patro kaj mi, plej poste la patrino kun suĉinfano sur sia dorso.

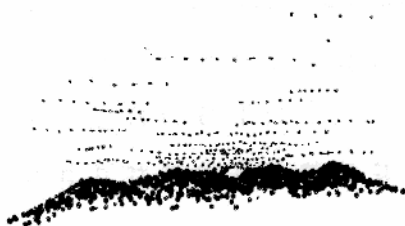
La vojo ne estis ebena, kiel mi antaŭe supozis. Pro tio ni devis iri ĉirkaŭ montoj aŭ laŭiri vojojn laŭlonge de la monto-piedoj de la montaro KUĴU.

La sunlumo falis senĝene rekte sur niajn kapojn. Ni marŝis antaŭen ĉiam direkte al la orienta vilaĝo, kaj ripetis ripozi sub la arbego.

Kiam mi vekigis el la dormeto, mi estis inter la pakaĵkestoj sur la bovĉaro, kaj nebule aŭdis alkriojn de la bov-kondukisto:

“Hot ! Hot !”

Kiam la orienta ĉielo fariĝis ruĝa, ni apenaŭ atingis la finon de la montara vojo. De tie anstataŭ la dczerta ŝtoneta vojo komenciĝis la gubernia vojo iom larĝa kaj ordigita. Paŝantoj vidiĝis ofte sur la strato, kaj ni eniris la urbon TAKETA, kiu estas fame konata kun la kastelo OKA-ĴOO\*\* kaj la kanto “KOĴO NO TUKI” (La luno super la kastelo-ruino). Trairante la belan poplan kaj salikan aleon ni rapidis al la vilaĝo OKAMOTO-MURA, kie nin atendis nova domo. Kiam ni fine alvenis ellacigite, estis jam malfrua nokto.



\* Ugviso: Birdo el ordo de paseroformaj birdoj, familio de silvi-edoj, kun silke mola plumaro grize bruna aŭ olivkolora; vivas en orienta Azio, belege kantas en la printempo (Cettia diphone). P.I.V.

\*\* OKA-ĴOO: malnova kaj preskaŭ detruita kastelo sur la monto, kiun ĉirkaŭas profunda rivero. Vidante tion DOI Bansui verkis poezion kaj TAKI Rentaroo faris muzikon en la jaro 1901 “La luno super la kastelo-ruino” (daŭrigota)

## エスペラント現象

前田 米美

ウィリアム・オールドさんが、ある時、ギリシャのとあるカフェテラスでコーヒーを飲んでいました。近くのテーブルで、かなり国際色豊かな組み合わせの若者たちのグループが、楽しそうに話をしていました。このグループの用語は英語でしたから、中のひとりのアメリカ青年は気楽そうです。

『私（ウィリアム・オールド）も英語国人ですから彼らの話をそれとなく聞いていたのですが、はじめのうち、かなり話がはずみよく笑ったりしていたのに、だんだんおとなしくなってきた、遂には皆静かに海を眺めていたかと思うと、2人3人と席を立てて行ってしまいました。どうやらこの出会いは、うまくいかなかったようでした。実のところ、英語国人以外の若者たちのことばの数は限られていて、何回かおきまり文句の英語をくりかえしているうちに、話題も限られてしまって、すぐ退屈になってきたのです。一方お気の毒なあのアメリカ青年は、わかってもらえないことばを何度もくりかえし、もうすこしわかってもらえそうな言い方はないものかと悶えていました。実はこのアメリカ人の発音の中に、私にも時々わからないところがあったのですが、……』

私には、こんな出来事は、普通の国際関係、殊に個人段階でのその縮図だと思われる。全く困った話で、時には、かなり深刻な事態にもなりかねないのです。例えば、旅行者が旅行先に国で、病気になって、医師に症状をけんめいに説明しなければならぬ時とか、その国の警官や税関との間にトラブルがあった時など。

ことばの違いというもの、意外と多く私たちの生活に関わってきています。例えば、テレビや映画館の外国映画。この問題を解決するのに、私たちは2つのやりかたをしています。その外国語を、全然別の俳優さんが、自国語に吹き換えるのと、もうひとつは、翻訳の字幕を入れるのとです。どちらも、ごちなさ、いいかげんさはありますが、とにかく言葉の混乱はどこにでもありがちなことから、その場その場でどちらかを選べば、あまり迷惑でもないというのですが、鋭敏な感覚の人には、これは不満です。

でも、言葉のカオス（混乱）からくる最も重大な成り行きは、平和と戦争の問題に関わってまいります。

ずいぶん古いスコットランドの小話なのですが、グラスゴーの町を中国の船員が歩いていました。まちなか2人に出会って、何か話しかけますと、相手の1人：

「この人、今なんて言ったの？」

他の1人：

「わからない。」

「なら、こいつを殴って、いっちまおう。」

あんまりいい小話じゃないねと思われるでしょう。でも私にはどうも、「外国語を喋るやつは、殴ってしまったほうがいい」といったような状況が世界中にかなりあるということ、この話が含んでいるように思うのです。』

\* \* \*

といった調子の内容の本。“LA FENOMENO ESPERANTO”という硬い書名から、ちょっと想像つきません。全く楽しい本です。売り切れないうちに。

La Movado の紹介のことばは：

「世界の言語問題を理性的に解決する唯一の案としてのエスペラントを、ウィリアム・オールドがあらゆる面からつつこんで……」

A5-120p. 1,250 円

送料 300 円

私はKLEGEで買いました。

Rigardon!

今年の和歌山緑丘会のザメンホフ祭は  
12月10日(土)午後、  
県職員会館で 開く予定です。  
演し物などは当日までに、司会の  
福本さんまで お知らせください。

# Blankĉevalo de Suho

PINO

Tempo pasis tagon post tago.

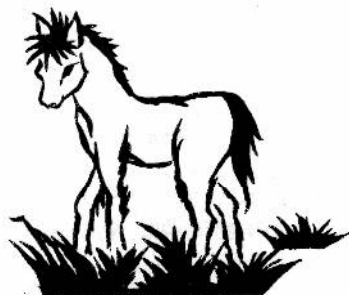
Dank' al atenta zorgado de Suho, la ĉevalido kreskis bone. Ĝia korpo estis tiel neĝoblanka kaj sverta, ke ĉiuj rigardis ĝin ravite.

Suho treege amis ĉi tiun ĉevalidon.

Iunokte, Suho abrupte vekiĝis el la dormo. Akra henego kaj bruega ŝafa tumulto atakis liajn orelojn.

Suho salte ellitiĝis, kuris eksteren kaj rapidis al la ĉirkaŭbarilo de ŝafoj.

Jen la granda lupo estis alsaltonta al la ŝafoj kaj la blankĉevalido kontraŭbaris al la lupo kaj difendis ŝafojn vivriske.



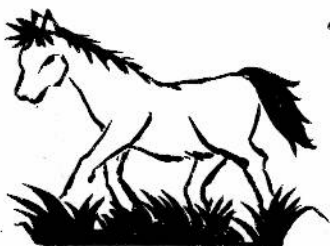
Suho forpelis la lupo kaj tuj alkuris al la blankĉevalido.

La blankĉevalido multe ŝvitis sur la tuta korpo.

Kredeble, longan tempon la ĉevalido batalis

sola kontraŭ la lupo. Suho, karesante ŝvitkovritan korpon de la blankĉevalido, alparolis ĝin, kvazaŭ li parolus al sia frato.

"Bravo! vi kuraĝe batalis, kara blankĉevalido. Mi vere dankas vin."



福音堂書店：大塚勇三再話の吹-ホの白馬より  
大塚勇三氏の了解を得て訳しました。

# NEOLOGISMO

奥村林蔵

「どんだんアジア、日本からも必要な新語を作り、使いだせ」、そして「ヨーロッパの新語の氾濫を押し返せ」というのが私の持論。

正しく言えば、「ヨーロッパの新語の氾濫は仕方のないこと。 エスペラントの発展のためには阻止できないものである（日本人、アジア人にはつらいけど）。 我々日本人、アジア人も受身にならず積極的にエスペラントの文章活動をすれば、自然と欲しい新語がでてくる。 それを気兼ねなく使えばよい」ということなのである。

ところが La Revuo Orienta 63/8 に、ヤマサキ・セイコー氏が「…… いっぽう日本人のほうでも、エスペラントのヨーロッパ性にあきたらず（私註、あきたらぬのではなくて、あきすぎたのです）、日本語からドンドン、エスペラントに neologismo を取り入れるなどと主張する人がいる。 これは「隣のオクサンが空地へゴミを捨てるから、こちらもドンドン、ゴミを捨てましょう」という発想でナサケナイ話である」と書いている。

なるほど neologismo がゴミならば、全くナサケナイ話である。

しかし neologismo はゴミどころかエスペラントという大建築のための1つ1つのブロック、煉瓦なのである。 公園の緑化のための苗木なのである。

町内の小公園に樹がすくない。 隣のオクサンが緑化のために自分好みの西洋花を寄贈して植付けなされる。 結構なことです。 これをことわることはない。 がこちらとしても黙って

いるわけにはゆかぬ。こちらで手に入る萩、桔梗など秋の七草や菊や桜などを寄贈して、植付ければよいのである。

同じ8月号に Harmon 氏が書いているように、4月号の Sonnenfeld 氏の所論のしめくくりの5行（とくにその最後の4行）が正しいと思う。

Resume mi dirus: Esperanto tute ne estas eŭropa lingvo, sed ja tro influita de eŭropa vorttrezoro kaj de la eŭropa esprimmaniero. Tio tamen povos modifiĝi iom post iom sub influo de pli forta uzado flanke de azianoj. (63/8/11)

## ちかごろ……

- ☆ 土曜例会は、「Li kaptis Elzan」を。  
会場：和歌山県職員会館  
○毎週 diligente 読んでます。
- ☆ 木曜講座は、あいかわらず「Ĉu vi parolas Esperante?」を。  
会場：サロン会  
○外国のE-istoの会話の速さに「目だけ」でなく、口も耳もニロクロ!?
- ☆ 月曜中級講座は、「LIZA kaj PAŬLO」を。  
「VESPERUĜO」や「La Espero」も。  
会場：けまり3F 会議室



# NOMO . . . .

“La Revuo Orienta” 5月号に、名前の特集が載ったのを おぼえておられる方も多かろうと思うのですが、その中で“エスペラントでつける子どもの名前”という artikolo がありました。

日本人の名前として通用しそうなエスペラントの単語で、できるだけ意味の良いものを列挙…とあります。

見やすくするために並べてみました。

- Julio (7月) 百合雄
- Leona (獅子のこゝろ) 球光栄
- Majo (5月) 真世
- Mondo (世界) 主水
- Naturo (自然) 夏郎
- Santalo (白檀) 燦太郎

----- とこんな具合に

37 ほど “仮名” があげられています。上記の例は「エスペラント便覧」によるとか。

文木 (Bunta) さんも、玄太 (Genta) さんも、千恵 (Cie) さんも、江利子 (Eriko) さんも、三良郎 (Saburo) さんも 日本語にも エスペラントにも 同じ発音があるとは、何とも タノシイです。

実際、E-isto II世で 本当に5月生れのマ-ヨちゃん、という可愛い knabineto や、37例の中に入っていないけれど Juto (勇人) 君という4才の男も居ます。

## Ĉu vi scias -----

★ 来年(1989)関西大会は、大津市でひらかれます。

★ 今年の札幌に於る日本大会へは、和歌山から S-ro MAEDA が参加しました。

練兵会の様子は、パネルで展示され、その活動が伝えられました。

★ EPA 和歌山支部が つくられました。お世話下さったのは、和歌山市島橋の小林さん。

自分の子供に Esperanto 名をつけられそうなる人も、自分の子供をなくとも、つけさせてもらえそうなの前に、さらに教例を…。

- |             |         |           |
|-------------|---------|-----------|
| Arto 在人     | Mana 真奈 | Monta 山太  |
| Denta 伝太    | Maro 麻呂 | Noblo 倫郎  |
| Ina 伊奈      | Mia 美亜  | Rajto 礼人  |
| Juna 結菜     | Ming 未業 | Roka 露花   |
| Kana 加奈     | Mito 水都 | Sana 佐奈   |
| Kant% 寛人、環太 |         | Satiro 幸郎 |

----- なども La Revuo Orienta に。

他、イミき身にしなければ、<sup>カズオ</sup>康太、<sup>カズオ</sup>勇次、<sup>カズオ</sup>和夫、<sup>カズオ</sup>晴人、<sup>カズオ</sup>海渡、<sup>カズオ</sup>弘、<sup>カズオ</sup>正次、<sup>カズオ</sup>恵美、<sup>カズオ</sup>美美、<sup>カズオ</sup>富士、<sup>カズオ</sup>加代、<sup>カズオ</sup>ルミ、<sup>カズオ</sup>ルナ、<sup>カズオ</sup>珠理 なども Esperanto にあります。

グッと古風に お碓、お比、お倉 などいかが？

ただし 市役所で交付してもらうためには、人名以外の漢字は当てない、という事が大切。燦太郎さんの「大衆」など、どうなんでしょうか。それに サ=タロ って口ははれません???

あ、そうそう。radioamatoro は本名以外に radio-nomo を名乗る習慣があります。MIA と名乗る junulo もいれば、ĈAKO と名乗っておられる junulino も近所にいらっしゃるようです。

PINO は radio-nomo も PINO ですが、日本語には 当てはまりません。?ネ!!

(PINO)

## VERDA MONTETO (隔月刊)

会費：年 3,000円 家族・学生 1,000円

お込：振替番号 大阪 6-3630

名義 和歌山練兵会

会計などの問い合わせ、牛島美恵子 TEL 55-1088 (夜) 33-3791 (昼)

1988年10月

(急須集) 前田米美 〒640 和歌山市山松原 6-1-6

(TEL) 0734-22-8660.

# VERDA MONTETO

Redaktita de MAEDA Yonemi (dumonata) N-ro 50

|   |                                 |   |                               |    |
|---|---------------------------------|---|-------------------------------|----|
| モ | REVENO al la HEJMO (HATANAKA-H) | 1 | Blankoevalo de Suho (PING)    | 7  |
| ノ | サマニホフ伝(19) (大谷強治)               | 3 | Infanaj tagoj (TANAKA Masami) | 8  |
| ノ | VOJAGEME (HASEGAWA JOSIFUMI)    | 5 | 会言+ 華屋 (中島美穂)                 | 9  |
| ノ | KONATULO                        | 6 | サマニホフ祭のお欠りせ                   | 10 |

## REVENO al la HEJMO

これは今年(1988年)3月に亡くなられた畑中弘さんの遺稿となった原作短編です。奥さんが偶然発見され、江川さんに託され、編集部に届けられました。今回から4~5回にわけて連載紹介いたします。(編集部)

(1)

“Pardonu min, Sinjoro. Ĉu mi povas sidiĝi apud vi?”

Tute neatendite Jackson estis alparolita de viro nekonata kun aĝo de ĉirkaŭ malpli ol tridek jaroj.

Jackson T. Hayama naskiĝis en Usono, havante la civilrajton kiel usonano. Sed pro la timo, ĉu la milito inter Japanio kaj Usono okazos, liaj gepatroj revenis hejmen al Japanio kun li. Tiam li estis ankoraŭ tre juna. Lia patro estis japano kaj la patrino estis usonano el Germanio kun oraj haroj. Do Jackson havis nigran hararon kaj blujn okulojn. Kiam ili revenis hejmen, najbaroj rigardis la

patrinon kun miro. Sed per la klarigo de la patro, ke ŝi estis de Germanio, ili akceptis ŝin kiel sian kamaradinon.

Kiel ili timis, baldaŭ la milito finfine okazis kaj daŭris ĉirkaŭ kvar jarojn. La milito estis severa. Kiam ĝi finiĝis, ili perdis ĉion en Japanio. Samkiel aliaj, ilia vivado en Japanio estis mizera post la milito. Do ili decidis reiri al Usono per la helpo de iliaj amikoj loĝantaj en Usono.

Jackson, kiu vivis ĉirkaŭ dek jarojn en Japanio, kreskiĝis bona junulo. Ili estis afable akceptitaj en Usono. Tiel ilia vivado denove

fariĝis trankvila. Jackson ricevis ankaŭ ceteran edukon tie kiel usona junulo. Tio signifis, ke li havas devon fariĝi soldato de Usono, almenaŭ unufoje. kvankam li ne bezonus esti soldato se li loĝas en Japanio.

Do li malgraŭvole partoprenis en la usona armeo kaj malfeliĉe li estis sendita for al Koreio, kie lin atendis severa batalo. En la granda kaoso de la batalo liaj multaj kamaradoj mortis, sopirante al la reveno al sia patrujo fore malproksima trans la maro. Ankaŭ multe da popolanoj de Koreio ne povis elkuri el la malfeliĉo de la milito. Amaso da vivoj, junaj kaj maljunaj, viroj kaj virinoj malaperis en la kruelan flamon kaj sangon.

Feliĉe Jackson mem estis nur iom vundita ĉe la piedo, sed granda vundo restis en lia koro. Kaj ĝi pli grandiĝis kaj profundiĝis, kiam li revenis el la aliaj milito-kampoj en Vietnamio. Post la milito li povis havigi al si bonan okupon kaj per tio li sukcesis. Tamen dum la longa tempo li ne povis esti libera el la diabla songo... pro la militoj.

De la amikoj, kiuj vojaĝis al Japanio, li ofte aŭdis, ke nuna Japanio fariĝas tre paca, libera kaj komforta, kompare kun tiuj tagoj, en kiuj li pasigis sian junecon. Li

rimarkis ke li mem ankaŭ sopiras al Japanio. Tio estis eble pro tio, ke li spertis la vivadon en Japanio kaj plie ĉar fluadas en lia korpo la varma sango de japano. Duono da sango, kiun li havas, estas ja tiu de japano. Ju pli pasis tagoj, des pli evidentiĝis al li la avido, ke li volas viziti Japanion, sian duan hejmlandon, kaj renkonti siajn malnovajn amikojn. Fine li decidis viziti Japanion.

Ĉio en Japanio, kio ensaltis en liajn okulojn, estis ja ŝanĝiĝinta ol lia supozo. Tamen neniel ŝanĝiĝis la koro de malnovaj amikoj. Jackson estis amike akceptita en ĉiu loko, kiun li vizitis. Karaj vizaĝoj aperis unu post alia antaŭ li. Li trovis sin parolanta en flua japanlingvo. Li ankaŭ sentis, ke nenio estas pli grava ol paco.

Tio okazis en unu el la vesperoj antaŭ sia reveno al Usono, fininte la restadon de dudek tagoj en Japanio. Kiam li estis alparolita de la nekonato, li sola pensis pri diversaj aferoj, kiuj pasis antaŭ liaj okuloj en Japanio, prenante glason da vino en trinkejo ne tiom vasta en iu malnova urbeto.

"Ĉu mi povas ĝeni vin per mia alparolo?" diris la nekonato en malalta voĉo.

# ザメンホフ伝

(19)

原作：エドモンド・ブリヴァ

翻訳：大谷宏治

タイトルバック：辻 千早

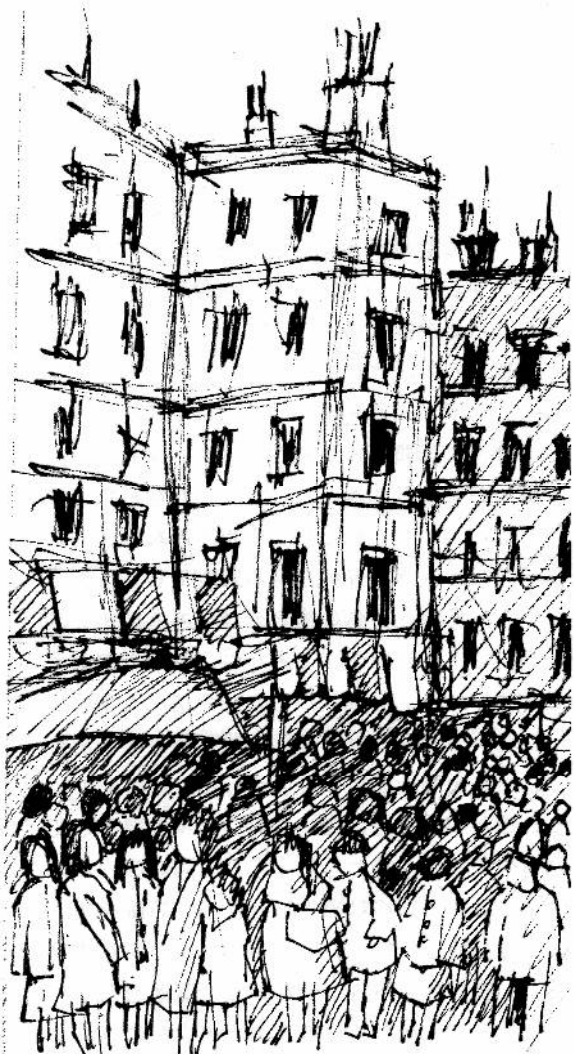
## 第6章（続）

### 理想主義的予言者

音楽が聞え、私たちはみないっせいに立ち上がった。舞台の上に、我々が敬愛するマイストロが大会役員と一緒に登場した。小柄で、気弱そうなザメンホフ大先生は感激の表情を浮かべていた。広いひたいに丸ぶち眼鏡、あごひげはもう白くなっていた。人々は手を振り、帽子を飛ばし、ハンカチを揺らせ、しばし歓呼のどよめきは鳴りやまなかった。市長のあいさつの後ザメンホフが立ち上がった。熱狂的な拍手の嵐が場内にとどろきわたった。しかし彼はもう話し始めていた。聴衆はシーンと静まりかえり、椅子に座りなおした。静寂の中を彼の声が響きわたった。

「親愛なる同志のみなさん、こんにちは。みなさんは全世界の大きな人間家族の同胞であり、近隣及び遠隔諸国の実に色々な国々から大会に参加されました。私たちすべてを結びつける偉大な理想の名のもとに、お互いに仲良く手を握り合おうと集まって来られました・・・」

「今日という日は私たちにとって神聖な日です。私たちの集会はささやかなものです。世間の人たちはこの集会のことはほとんど知りません。私たちの集会で話されている



言葉が世界の大小の町々に電報で飛び交うことでもありません。世界の政治地図を変えようと元首や大臣たちが集って来ているわけでもありません。私たちのいる広間には、豪華な衣装やたくさんのいかめしい勲章がきらめいているわけでもありません。私たちがいるささやかな会場のまわりで祝砲がとどろくことでもありません。しかし私たちのいる広間には不思議な音が、耳に聞きとれないような、それでいて心

こまやかな人なら誰でも感じられる、とても小さな音が飛び交っています。それは今生れたばかりの何か偉大な音なのです。会場の中を不思議なまぼろしが飛び交っています。それは目には見えませんが、心には感じられるのです。それは未来を、全く新しい時代を告げています。それは世界中を飛び交い、形を持ち、力を発揮するようになるでしょう。そして私たちの子孫はそれを見、感じ、そして楽しむことでしょう・・・」

「違った国籍の人たちが集って、お互いに理解し合おうとすることはよく見かけられますが、その人たちと私たちとの相互理解の仕方には、なんと大きな違いがあることでしょう！・・・その人たちの集りでは、ある国の人が他の国の人へり下ってみたり、相手の国の言葉を話したり、みずから自分の国の言葉を恥じたり、つかえながら片言を話し顔を赤らめたり、話し相手を前にして当惑しているのです。ところが相手の方は強い立場で相手を見下しているのです。私たちの会合では強い国とか弱い国とかいうものはありませんし、特権を持った人とか持っていない人というものもありません。誰もへり下っていないし、気兼ねもしていません。私たちはみな中立の立場に立っています。私たちは全く平等なのです。私たちはみな一つの国家の一員、一つの家族の一員のように感じています。そして人類の歴史上初めて、様々な国々の人々が、外国人や競争相手としてではなく、兄弟としてこの場に集まっているのです。私たちは自分たちの言葉を押し付け合うこともなく、お互いに理解し合い、お互いを引き裂く無知のため疑い合うこともなく、仲良く手を握り合っているのです。それは偽善的にある国民が他の国民と接すると

いうのではなく、誠意を持って人間と人間とが手を握り合っているのです。私たちは今日という日の重大さのすべてをよく認識すべきです。それは今日、ブローニュ・スル・メールの町をあげての歓迎のなかでフランス人とイギリス人、ロシア人とポーランド人としてではなく、人間と人間とが集まっているからです・・・」

「何千年もの間、お互いに相手のことをよく見、聞きもしないで、けんかばかりしていましたが、今ブローニュでは実際に大規模に世界中のいろんな国の人たちがお互いに理解し、兄弟となり始めています。そしてそれは一度始まったらとどまることを知らず、ますます勢いを増し、いつまでも、無知の最後の影が消えるまで永遠に、前進し続けることでしょう。この日こそ祝福されるべきであり、その成果はすばらしいものであってほしい！」

そのようにザメンホフは話し続けた。手に持った原稿はふるえていた。彼は強く感動していた。彼は読み続けることができるだろうか？だが何かが彼を後押しした。人前で話すことには馴れていなかったが、彼の声は次第に大きくなっていった。少し熱っぽくページをめくると、彼は聴衆の方をちらっと見た。男や女や若者、白髪頭、熱心に話を聞いている顔、そうだそうだとうなづいている視線。暖かな静寂が場内にみなぎっていた。聴衆が一体となってザメンホフの口から言葉を引き出しているようであった。ザメンホフは愛情をこめて言葉を続けた。

"VIVO DE ZAMENHOF" Edmond Privat  
La kopirajto de la originalo, la  
Esperanta eldono, apartenas al:  
THE ESPERANTO PUBLISHING CO. LTD.

La Ekonomia Vagono estis pli bona  
ol la Duaklasa vagono

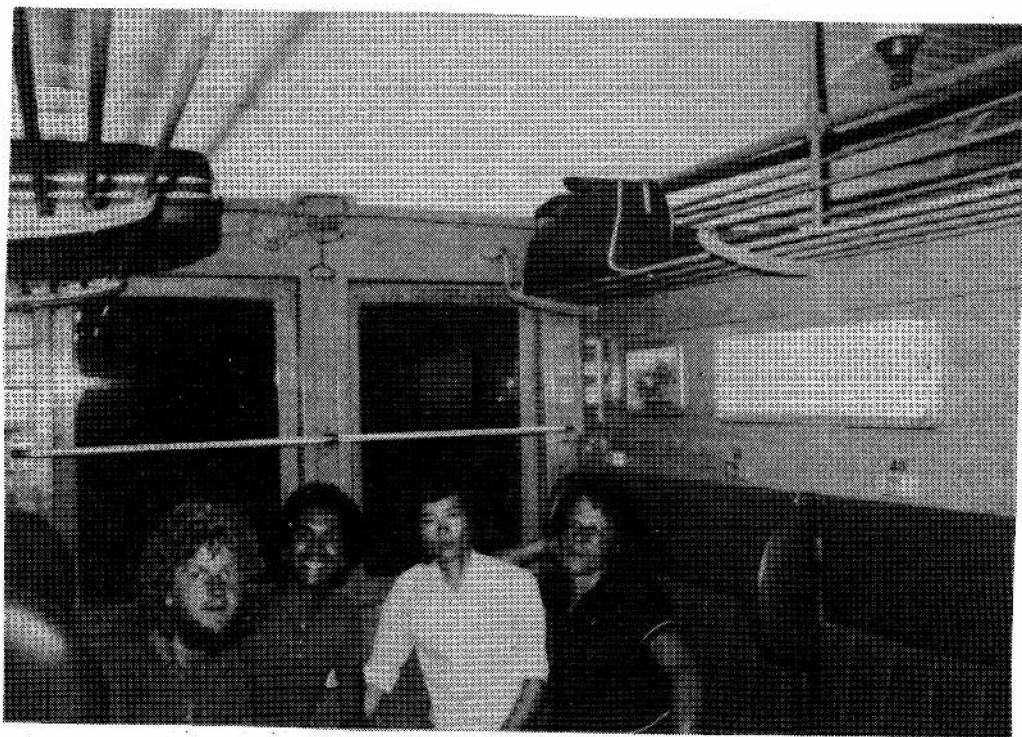
HASEGAŬA JOŜIFUMI

La 2an de septembro, 1975

Post la tagmezo, mi envagoniĝis kaj veturis al Casa Blanka. La vagonoj plejparte el ligno estis malnovaj. Tiu vagonaro havis nur unu vagonon por la dua klaso, en kiu mi envagoniĝis, kaj mi ne povis moviĝi libere pro multe da pasa-

ĝeroj. Aliflanke, ekonomiaj vagonoj estis multaj, kaj tial en ĝi la pasaĝeroj moviĝis pli libere ol ni.

Mi ŝanĝis vagonon ĉe Casa Blanka. De tie la duaklasa vagono havis ne multajn pasaĝerojn, do mi sidis en kupeo kun junaj marokanoj kaj francoj. Ni parolis kaj ludis enigmon





per alumetoj. Tio estis tre interesa por ili. La francoj tranoktos en kampadejo. Ni fotis nin kune. La marokano multe interesiĝis pri miaj kamero kaj strobfulmigilo, kaj li demandis min pri Japanio.

Nokte mi atingis Marakesh. Mi serĉis hodiaŭan tranoktejon. La centro de la urbo troviĝis malproksime de la stacio. Survoje mi demandis knabon pri la tranoktejo. Sed li ne konis tion, ĉar li loĝas en Casa Blanka. Sed li gvidis min deman-

dante la paŝantojn. Li interesiĝis pri "karate". Post longa paŝado mi povis trovi konvenan hotelon, dank' al li. Mi trinkis kolatrinkaĵon kun li en iu kafejo. Li demandis min pri mia adreso, kaj li donis al mi sian adreson. Li tranoktos ĉe kampadejo kun sia amiko. Ĝenerale marokaj knaboj postulas monon post la gvido, sed li ne postulis. Li diris, ke li ne volas monon, ĉar ni estas amikoj.

(daŭrigota)

KONATULO

-Kiu estas konatulo?

-Persono, kiun ni sufiĉe bone konas por pruntepreni monon de li, kaj kiun ni tamen nesufiĉe konas por ke ni povu pruntedoni monon al li.



---

【単語】 kon-at-ul-o = konato 知りあいの人。  
 persono 人、人物。  
 , kiun (関係代名詞、persono を指す。下の kiunも同じ personoのこと。)  
 prunte-preni 借りる。  
 li (konatulo を指す。)  
 prunte-doni 貸す。

「この人を知りあいの人は、お金を借りる。お金を貸す。」「この人は、お金を借りる。お金を貸す。」「この人は、お金を借りる。お金を貸す。」

「この人は、お金を借りる。お金を貸す。」

「この人は、お金を借りる。お金を貸す。」

「この人は、お金を借りる。お金を貸す。」

# Blankĉevalo de Suho ⊕ PINO

Tagoj pasis kiel flugantaj sagoj.

En iu jaro printempe, anonco komuniĝis tra la ebenaĵo. Reĝo okazos ĉevalkonkurson en la urbo. Kaj la ĉampionon li edzigos al sia filino. Kiam liaj ŝafistaj kolegoj ekscis la proklamon, ili instigis lin partopreni en la ĉevalkonkurso. "Nepre partoprenu en la ĉevalkonkurso, rajdante sur la blankĉevalo.

Do, Suho transiris la vastan ebenaĵon, sur la dorso de la amata blankĉevalo kaj iris al la urbo, kie la ĉevalkonkurso okazos.

En la ĉevalkonkursejo multaj spektantoj korektiĝis. Sur la podio la reĝo sidis digne.

Ĉevalkonkurso komenciĝis.

Fortikaj kaj necedemaj junuloj, kiuj kolektiĝis el tuta lando, ekvipis siajn ĉevalojn.

La ĉevaloj fluge kuris.

Kaj la unua estas -----

jen la blankĉevalo.

Estas tiu blankĉevalo, sur kiu rajdas Suho.

(daŭrigota)



福音館書店: 大塚勇三再話の「スーホの白い馬より」  
大塚勇三氏の了解を得て訳しました。

#####  
# Infanaj Tagoj #  
#####

TANAKA Masami

Kun la pasoj de la tempo mi eksciis, ke Okamoto-Mura, kie ni ekvivis, estis malgranda vilaĝo tre proksima al la urbo TAKETA, ke pli multe da vilaĝanoj okupiĝis en agrikulturo kaj la aliaj perlaboris en fabrikoj de la urbo.

Tra la vilaĝa centro pasis ĉefa vojo iom larĝa sed ankoraŭ ne pavimita, sur kiu vojo pasantoj ĉiam ir-reiris kaj ĉevalŝarĝĉaro trairis de tempo al tempo. Estis mia granda miro kaj ĝojo, ke preskaŭ ĉiu domo havis elektran lampon. Kaj ankaŭ ĉe mia domo ni povis pasigi nokton sub brilanta lumo.

La lernejo staris sur la monteto. Kaj mia klaso, en la tria lernejaroj, konsistis el ĉirkaŭ dudek lernantoj inklusive kelkajn lernantinojn.

Komence, dum kelke da tempo ili ne akceptis min afable kaj ne kuraĝis tuj proksimigi sin al mi. Ŝajne pro ke mi parolis montar-vilaĝan dialekton, per kio ili apenaŭ povis kompreni min kaj plie mi kondukis en ĉiuj agadoj senbride laŭ la kutimo de la montara vilaĝo. En pluva tago, kvankam ĉiuj

portis getaĵojn ĉe piedoj, tamen mi preferis piediri tute nudpiede. Ĉe en malhela tago mi iris ne portante pajl-sandalojn.

Post kiam la patrino komencis labori ĉe iu fabriko najbara, mi devis varti la suĉinfanon, kiun mi portis sur mia dorso kaj iris al la lernejo kun lernolibroj kaj vindaĵoj. En ĉiuj tagoj mi ricevis lecionon en la lernoĉambro, portante la infaneton sur la dorso. Feliĉe la instruisto diris nenion vidante min. Kiam venis interleciona ripoztempo, la klasanoj konkurse kolektiĝis ĉirkaŭ mi kaj iuj klasaninoj prenis la infaneton en siaj brakoj kaj ni kune pasigis tempeton.

Post la infaneto kreskiĝis, la instruisto donis al ni alian malgrandan seĝon por ĝi kaj sidigis ĝin apud mi.

Pasis la tempo. La infaneto jam povis mem piediri anase inter la lernantoj en la lernoĉambro. Mi ofte devis ĝin ree sidigi sur la seĝon kaj tiam ĝi restis silente dum momento, rigardante la vizaĝon de la instruisto.

la kutimon proprigitan dum la vivado en la montara vilaĝo mi obstine konservis ĉe mi : por ekzemplo, dum vintro mi iris surmetante pajlsandalojn ĉe la piedoj sed ne metante al si tabiojn kaj je la manoj ne surhavante gantojn, eĉ se, kiel ajn ekstere neĝblovado furiozas kaj frosta vento duŝas pike miajn vangojn kaj fine

aperas ulcero de frostpernio supraĵe de la haŭtoj de la manoj kaj piedoj, tamen mi aŭdacis vizitadi la lernejon.

En la komenco la klasanoj vidante min ridaĉis kun la okuloj kompataj kaj malestimaj sed mi ignoris ilin kun ŝajna apatio kaj partoprenis aktive en la ludon de la grupo.

Delonge mi decidis en la koro ke mi praktiku jenajn agojn;

“neniam mi ne uzu tabiojn kaj gantojn dum la vintro”

“kiel eble vivu nudpiede”

la ago de mi praktikita daŭris seninterrompe ĝis tiam, kiam mi finis tutan kurson de la elementa lernejo.

(FINO)



1988年 会計報告

\$. 62. 11. 17 ~ \$. 63. 11. 16

収入の部

| 項 目         | 金 額     | 摘 要            |
|-------------|---------|----------------|
| 前年度繰越       | 60,845  |                |
| 会 費         | 112,000 | 当日会費も含む 45人    |
| 図書 還元       | 1,180   |                |
| JCI, KLEGより |         |                |
| 会費 割引       | 7,560   |                |
| 寄 付 金       | 73,730  | 前田、福本、田中、高橋、松下 |
| 貯金 利子       | 1,372   |                |
| 計           | 256,687 |                |

支出の部

| 項 目   | 金 額     | 摘 要         |
|-------|---------|-------------|
| 通 信 費 | 41,750  | 切手・送料       |
| 事務用品費 | 63,500  | 刀洗印刷・封筒他    |
| 交 際 費 | 12,800  | 会館事務所管理人寸志他 |
| 会 議 費 | 14,400  | おむすび 祭、茶菓子  |
| 計     | 132,450 |             |

|       |         |
|-------|---------|
| 収入 の部 | 256,687 |
| 支出 の部 | 132,450 |
| 次期 繰越 | 124,237 |

# ザメンホフ祭

1988年

- \*日時：12月10日(土) 午後2時～4時
- \*場所：県職員会館(県庁前バス停西へ約300メートル。会場案内図参照)
- \*当日会費：1,000円(お飲み物お菓子など)
- \*司会進行：福本博次さん。

★当日会費1000円と、1989年度緑丘会会費3000円(学生・家族は1人につき1000円)は当日会場で、牛島美恵子さんにお渡しください。

緑丘会費3000円郵送の場合：

郵便振替口座 大阪6-3630  
名 儀 和歌山緑丘会

★その他の会費

1989年度 KLEG会費 3200円と  
// JEI会費 4800円は  
新規入会、継続 など希望の方のみ 牛島さんまで。

[会場案内図]

